
ノグ・コンフェクショナリー

久藤雄生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノーグ・コンフェクショナリー

【Nコード】

N3375T

【作者名】

久藤雄生

【あらすじ】

藤村貴人は巻き込まれ事故で、同じ学校の生徒4人と共に異世界ノーグに召喚された。

帰る術はないらしく、貴族に引き取られ生活することになるのだが……。

日常淡々異世界生活。

0-00 Hello, NOG

ひとりのわかもよ
救世主を喚んだらしいけど、現れたのは5人の男女。

「ふざけてんじゃないわよ！ さっさと家に帰して！」
激昂する同級生の女子。

「……………ッ」

弱弱しく涙を流す下級生。

「すっげー、魔法って俺でも使えるんすか？」
メモを片手に嬉々として質問を投げかける後輩。

「もっと詳しく説明しろよ……」
困惑した様子で詳しい説明を求める同級生男子。

それらをただ見てるだけの俺。
感情がついていかない。

怒りもなく、悲しみもなく、喜びもなく。

これが確かな現実なのか、それがわからない。

いや。

ああ、そうなんだ、としか思えない。

それから王だとか魔術師だとか魔女だとか色々出て来て何か話していたが。

何だか頭に入ってこなくて、ただ、ぼんやりと見ていた。

取り敢えず今日は休んだ方が良くと案内されたのは、三部屋続きの部屋だった。

入ってすぐはテーブルや椅子のある、食事をしたり談話する一番広い部屋。

次の部屋を男子が、一番奥の部屋を女子が、それぞれ使うことにした。

この世界に来たとき持っていた物はそれぞれの部屋の隅にまとめた。勿論携帯が使えないことなど一番最初に確認済みだ。

ベッドには泣き疲れた春日が眠っており、2人は起こさない様にそっとバルコニーに出た。

夜風が気持ち良い。

ふと空を見上げると二つの月。

青白い月と赤い月。

異世界、か。

ぼんやりと月を眺める。

「フジム、聞いてた？」

「聞いてた。全部右から左だけど」

「駄目じゃん」

「うん」

呆れたように真琴が呟く。

頭がついていかないってこういうことなんだな、と思う。

「どうなっちゃうんだろうね」

「さあ」

わからない。

「他人事だね」

「何というか、感情が追いつかない？」

「ふうん、意外」

「お前はもう落ち着いたみたいだな」

「ま、ね。私がしっかりしなきゃ、春日チャンも不安でしょ」

室内で眠る春日を眺めながら呟く。

相変わらず面倒見がいいというか何というか。

春日が後輩で女子だからだろうか。

自分だって、現状を不安に思っているだろうに。

気を紛らわせるため、他愛のない話を交わす。

学校のこと、部活のこと、バイトのこと。

そうしているうちに春日が目を覚ましたようで、部屋に戻ることにした。

「春日チャン起きたし、一旦皆で話そうよ」

男子2人がいる一番広い部屋に移動する。

これからのことを話合わなくては、というのが真琴の弁だ。

全員が円形のテーブルにつく。

紅茶らしきものがあったので、5人分淹れる。

「ま、自己紹介って言ってもさ。大半が顔見知りなんだけど」
茶に息をふきかけ、冷ましながら飲む。

うん、普通の紅茶みたいだ。

全員同じ高校に通っているの、顔見知りなのは間違いない。

「じゃあ私から時計回りだね。体育科2年の早良真琴^{さわら まこと}。全員顔見知りだけど一応ね」

真琴とは中学で3年間同じクラスだった。

それもあるって、今でも交流のある数少ない女子のうちのひとりである。

意思の強そうな目、長い髪をポニーテールにしている、（色んな意味で）男子にも負けない気の強いヤツ。

「……及川^{おいかわ こうたろう}、光太郎。進学科の2年で、剣道部」

及川は校内で有名な人なので、話したことはないが顔と名前は知っている。

確か生徒会副会長でもあり、剣道部では副主将。

顔立ちも良かったため、女子の人気の高いのだ。

クラスの女子が話していたのを覚えている。

「進学科1年の宮尾滋郎^{みやお じろう}っす」

ノッポな眼鏡の割に茶髪というこの後輩も、中学の時に知り合った。高校に入ってからバイト先でもある兄貴の店で、毎日のように顔を合せている。

ゲームや漫画、小説が好きで、よく語られる。

最もマニアック過ぎて話の半分もわからないのだが。

「調理科2年、藤村貴人^{ふじむら きひと}」

別段言うことはない。

部活はしてないし、バイト先を言うのも何か違う。

「英語科1年の春日^{かすが}みなみです。よろしく願いします」
頭を下げたことで、ふわりと長い髪が揺れる。

そういえば今年の英語科1年に美少女がいると噂になっていたことを思い出す。

小さくて華奢で、何かぽきっと折れそうだ。

「さてまずは現状把握ね」

言いながら、大きく溜息をついた。

「私だと疑った言い方しか出来ないし、ジロ、お願い」

「俺っすか。えーと、フジム先輩、話聞いてなかったすよね」

「聞いてたっつの」

右から左なだけで。

「はいはい、聞き流してたんすよね。じゃあ詳しくいきましょっか」
ひどい後輩である。

滋郎は眼鏡のブリッジを押し上げて、おもむろに口を開いた。

「ここは日本ではなく、ましてや地球でもない、“異世界^{ノーグ}”。そこに俺達は“召喚”されました」

あれだ、コイツの好きそうな設定だな。

いつもの語りを聞いているのだと錯覚しそうだ。

「本来は一人召喚されるはずだったのが、周辺にいたことにより巻き込まれたようっす」

確かにここに来る直前、5人とも渡り廊下にいた。

突然光の渦に巻き込まれたので、あまり細部までは見ることが出来なかったが。

「誰が召喚される筈だったんだ？」

問いかけるが、滋郎は首を横に振った。

「“異世界からやって来たひとりの若者が、^{エトラン}国の助けになる”とい

う言い伝えがあるそうっす。何でも“アカの英雄”が残した予言だとか」

何だその傍迷惑な云い伝えは。

そしてその根拠は？

世紀末の世界滅亡くらい不明瞭じゃないか？

「それで今回、“宮廷魔術師”と“魔女”が協力して“召喚術”を行なった」

そこまで言ったところで、春日が目を伏せた。

「日本に帰るための“逆召喚”は“不可能”」
そうだった。

それで春日は泣いてたんだった。

「生活の保障は十分にされるようですが、“若者が国を救うように働く”のが前提っすね」

「具体的には？」

「現在東隣の国が、海を挟んだ東の国と戦争をしているようです。そのとばっちりを防ぎたいそうっすよ」

「阿呆じゃねーの。ふつつーの高校生が戦争に役立つわけねーし」

銃器が身近にあったり、兵器を作れる専門家なわけでもない。

全員日本人だし、戦争を生で見たことすらないのだ。

戦争といえば人が死ぬだろうし、そんな場面に耐えられるとは思えない。

「そうっすね。ただこの世界には、“魔法”があるそうっす」

「は？」

「異世界間を渡ることによって、それが急激に増幅されるらしく」

「は？」

「俺達全員、魔法の才能があるそうっす」

説明が終わった。

今日は休み、明日の午前中から色々検査とか説明とかあるらしい。

「そういえばさ、何年か前に商業科の生徒が行方不明になったよね。それも5月」

「何か聞いた覚えあるわ。まだ見つかってないんだろ？」

「うちの学校、呪われてるんすかね」

噂で聞いた程度だが、数年前の5月、商業科1年の女子生徒が行方不明になったらしい。

確かGW中で、学校での神隠しではなかったと思うのだが。

その噂から何故か学校の七不思議に脱線する。

きつと今年から渡り廊下の神隠しが追加されるに違いない。

「ちよっと、いいか？ ……提案があるんだけど」

及川が重々しく口を開いた。

「何？」

「……救世主は誰かわからない、だったよな？」

真琴が頷く。

「もしも、明日の検査ってやつで救世主が誰か特定出来ないならその時思ったのは。」

「俺を救世主にしてほしい」

こいつ、大丈夫か？

ってことで。

いや、うん、すっげーいい奴だな、及川って。

0-01 魔法の適性

翌朝。

水を貰い顔を洗った後、支給された服に着替えた。

麻のような素材で、襟元が緩めの服だ。

下もゆったりめなズボンで靴は柔らかい革靴。

動きやすそうだ。

女子は女子で白のワンピースなのだが、嫌がった真琴はレギンスのようなものを履いている。

「普通に良かった」

「そうっすね」

確かに普通だ。

元の世界でもありそうなデザインで、違和感はない。

着替えが終わり、食堂に移動する。

この世界初の朝食は、シリアルもどきだった。

ミルクじゃなくて白湯だし、しかも薄ら塩味である。

残念ながら好みじゃない。

パフェの底に入っているとつい残したくなるくらい、好みじゃないのだ。

さりげなく周りを見ても誰も何も言わず、もくもくと食べている。

お前ら、不満はないのか。

気に食わない朝食をもそもそ口に運んでいると、若い男が現れた。

何となく昨日もいたような気がする。

後輩がこっそり耳打ちしてくれた。

男の名前はエドワード・カネル。

魔術師らしい。

昨日名乗ってましたけど、聞いてませんでしたよね、って一言多いんだよ。

「今日はまず、魔法の適性を調べようと思います。朝食を終えたらさっそく始めましょう」

シリアルもどきを無理やり胃に詰め込み、ミルクと果物で口直し。朝は米がいいんだけどな。

藤村家の普段の朝食は、和食が基本である。

女子が食べ終わるのを待って、部屋を移動することになった。昨日の召喚があった部屋とは別で、3列の長机とそれぞれ5脚の椅子がある。

パイプ椅子じゃなくて木製だけど、学校の多目的室みたいだ。魔術師に促され、全員揃って最後尾に座る。

椅子に座ると、白い石が配られた。

よくわからないが白い石を握り、力を込める。

そうすれば属性によって色が変わる、というものらしい。

白い石は片手で握ると隠れるくらいの大きさだ。

それを握りこみ、力を込める。

力を込めるといっても、物理的な力ではない。

力を流し込むようなイメージ、らしい。

まあ実際は魔力を流すらしいのだが、そんなもん知らん。何事もやってみないとわからない。

しばらくすると石がほんのり温かくなってきた。

そつと開くと白い石がマーブル模様に変化していた。

周りの様子を窺うとやはり皆マーブル模様のようだ。

「さすがですね、世界を渡るところも違うのか……」

この世界では、人間ならば誰しも魔法が使えるという。

火・水・風・地・光の5属性があり、大抵一人一つ適性がある。勿論中には複数の適性がある人もいるらしいが、割と珍しい。

このエンドワードという魔術師は、珍しい3属性持ちなのだそうだが、この世界では魔法と魔術は別物らしく、この男は魔術師であって、魔法使いではないのだと言い張る。

「中でも光の属性は稀少です。……ほう、5人中3人もいるとは」
光というだけあって、イメージ通り黄色らしい。

貴人と春日以外の3人の石は、黄色の混じったマーブル模様だ。ちなみに貴人の石は青、水色、赤の混じった3色に見える。

「つかお前のすげえな」

滋郎の石はそれはもう見事に5色混じっている。

「ほほう。もしやあなたが救世主なのでは」

「いやいやいや、違うっす。俺より及川先輩の方が断然強いっす」
滋郎が顔の前で手を振りながら答える。

「及川先輩？」

及川に興味を持ったらしい魔術師が、手元の石を覗き込む。

及川の石は黄色・赤・緑の3色だ。

魔術師はそれぞれの石の色を書き込んでいるようだ。

紙は再生紙のような薄茶色、ペンは万年筆のような形のものを使用している。

「及川先輩の剣は国で一番といっても過言ではない腕前で」

実際、及川は去年新人戦で優勝している。

魔術師の意識は及川に向かったようだ。

この調子なら順調に及川を救世主にもっていけるのではないだろうか。

「……そう、正義感も強いから、向こうで代表もしていたし」
嘘ではない。

今月末の選挙で、及川はおそらく生徒会長になっていたはずだ。

お、魔術師がその気になってきたみたいだ。

言い伝えに根拠はないし、救世主が誰かもわからない。そもそも救世主が本当にいるかどうかともわからないような状況なのだ。

それらしければ誰でも問題はない。

結果オーライ。

「俺で良ければ力になります」

魔術師がその言葉に目を輝かせる。

及川の手を掴んだかと思うと、ぶんぶんと上下に振った。

「ありがとう！ 早速師たちに報告に行ってくるよ！」

バタバタと遠ざかる足音を聞きながら溜息を吐いた。

「行ったな」

「上手く行きそうっすね」

「そうね」

及川が救世主になると言った理由。

それは、女子2人を守るため。

このまま救世主が決まらなかったら、全員戦場に行く可能性があるのでは、という考えに至ったらしい。

男子はともかく女子が戦場だなんて、ということらしい。

及川、すげえ。

でも本音は駄々漏れだけだな。

この状況でそこに考え至ったこともそうだが、それで自分が犠牲になろうというのだから恐れ入る。

実際その状況になって実行に移せるやつは早々いないだろう。

「……ごめん」

真琴が眉を潜めてぼつりと呟く。

「謝んなよ。俺が選んだことなんだから」

「……ありがとう」

男前だな及川。

魔術師が関係者を数名連れて戻ると、及川が別室へ移されることになった。

救世主なので訓練などの苦労もあれば、優遇もされるということだ。及川はこのまま王宮住まいで、騎士団に混じって訓練に参加など、忙しくなるらしい。

そして残りの4人がどうなるかだが。

「まずは大陸共通語の学習ですね」

「……え？」

「関係者の一部は翻訳魔道具を身につけていますが、皆さんに配布出来る量はありません」

言いながらエドワードは左手親指の指輪を掲げる。

黒い石のついたその指輪が、翻訳魔道具なのだろう。

「ですので、王宮にいる間に共通語の学習をして頂き、その後しかるべき後見人に引き取られるという形です」

「ちよっと、引き取られるってどういうこと？」

「そのままの意味ですよ。理由なくこのまま王宮に住むことは出来ません。それなりの地位を持つ貴族に後見してもらい、その屋敷で保護されることになります」

「それって皆一緒じゃ……ないわよね？」

エドワードは首を横に振る。

「無理でしょうね」

まあそうだろう。

4人も一気にお荷物抱えるとかどんだけだ。

「共通語の学習に加え、常識や文化などの知識も必要ですし、基本魔法の勉強も必要です。もし何か他にもやりたいことがあれば申し出て下さい」

「えーっと、俺ら元の世界じゃ学生だったんすけど、こっちじゃどうなるんすか？」

「こちらの世界では成人後に通う学校はありませんよ」

「へ？」

「こちらの学校は未成年しか通えません」

言い方がまずかったと思ったのか言い直された。

だけど滋郎が聞き返したのはそういう意味ではないと思う。

そもそも……。

「この世界の年の取り方は？ で、何歳で成人？」

「ああ……24時間で一日、30日か31日で一ヶ月、12ヶ月で一年。そして1年で1つ歳を取り、16歳で成人ですね」

成人年齢以外はほぼ同じか。

16歳で成人。

それだと1年生2人はおそらく未成年である。

よく海外では日本人は幼く見られるというが、ここではそんなことないらしい。

まあ海外じゃないけどな。

「皆さん成人されてますよね？」

これで1時間の長さが違うとまた狂ってくるが、まあいい。成人に見られるってことは成人してるんだろう。

「俺はしてるみたいっすね。春日さんは？」

「わ、わたしはまだですが、学校はちよつと……」

緊張しているのか、か細い声で答える。

「ではやはり学校は通わないということで。貴族の多くは18歳くらいまで働かず、社会勉強をすることがよくあります。皆さんもとりあえずそうされてはいかがでしょう？」

約2年か。

いきなりじゃあどうしたい？ などと言われてもわからない。猶予があるのは助かった。

「それでは、今日は立ち入り出来る場所の案内ということで、明日

から講義を致しますね。講師は私が勤めます。どうぞ気軽にエディとお呼び下さい」
そう言って魔術師はにっこりと笑った。

0-02 語学学習

適性検査終わった後、城内を案内してもらったことになった。

及川は早々に別室に移動となり、4人だけだ。

説明を受けながら散々歩きまわって、昼食を挟み、5時間以上掛かったのではないだろうか。

滋郎が質問しまくるものだから余計に時間が掛かったのだと思う。

あのメモの内容が気になる。

アイツは常に片手にメモ。

普段何書いてるんだ。

夕食後から就寝まで学習時間らしい。

あまり時間に余裕がないようだ。

与えられている部屋の一室で、授業が始まった。

今日は語学そのものではなく、予備知識を習うという。

この国で主に使われているのは大陸共通語。

エトランのある大陸の名前をウナカーサという。

ウナカーサ大陸共通語。

他にも大陸はあるようだが、大陸と言えば一番発展してるウナカーサを指すらしい。

この大陸は上を向いた三日月のような形をしており、エトランは切れ目から西2つ目に位置する。

切れ目から西1つ目が問題の国である。

逆にエトランの西の国はリダインと言い、こちらとはほとんど関わりがないらしい。

「その翻訳の道具、もっとあればいいのに……」

授業の合間に真琴がぼやく。

視線はエディの手元である。

翻訳の魔道具を持つのは王族や魔術師の一部、割と上層部の人間か、自分たちの専属侍女たちだけだ。

即ち後見人となる貴族は勿論、買い物するにも店の人間と言葉が通じないのである。

「高価な上に制作にとっても時間が掛かる物なので……手に入る頃には必要なくなっているでしょうね」

そんなにか。

「諦めて勉強した方が良いつすよ」

「くう……ジロに言われると何かムカつく」

「ははは、それでは続けますね。……エトランは大国です。資源も豊富ですから、他国から欲しいと思われてもおかしくない」

「資源って何すか？」

「これです」

卓上にあったランプの下部から石を取り出した。

あの白い石と色が違うだけの、ただの石に見える。

「灰色……」

「ええ、魔動石といいます。このランプでいうところ、ですね。こ

ここに石をいれて、それを動力にして灯りがつく、というわけです」

石油や電池といった役割か。

「廊下のランプにも石が入っています。数日ごとに入れ替えていますのでそのうち見ることもあるかもしれませんね」

数日で交換なんて面倒だな。

電気は通ってないのか？

って存在しないのか？

「国内のエネルギーはその魔動石だけっすか？」

「そうです。個人の魔力を使うことも出来るのですが、とても間に合いませんからね」

部屋にはポットのようなものもあったし、元の世界でいう家電も割と開発されているのだろう。

照明、調理器具、洗濯、掃除、移動手段などなど。

どれだけ普及しているかはわからないが、そうなる間に合わないという発言も納得できる。

初授業が終わり、一息吐く。

エディは退室し、部屋には自分たち4人だけだ。

「どうなるのかな……これから」

真琴が呟く。

「大丈夫っすよ、どうにかかりますって！」

「……アンタは樂觀的でいいわよね」

にこにこしている滋郎を真琴は横目で睨む。

「ホラ、茶あ入ったぞ」

厨房から頂いてきた焼き菓子をお茶請けにティータイムだ。
この世界の焼き菓子も元の世界と変わらないように安心した。

「ありがと、フジム。……ジロと違って気が利くわあ」

「えー、ひどいっすよー」

その遣り取りを見て、春日が微かに笑った。
この世界に来て初めて笑顔を見せたのではないだろうか。
でもあれだよな、きっと春日の反応が“普通”なのだ。

「及川先輩には申し訳ないっすけど、俺らは俺らで身を立ててかな
いと」

「大丈夫なんでしょうか……」

春日が不安げに呟く。

「後ろ盾があるのならどうにかなるっす。及川先輩次第なところは
ありますが」

「他人に全部負んぶに抱っこなんて、性に合わない」

滋郎の言葉に真琴は眉を顰め言い捨てる。

真琴らしい言い分だ。

「それならそうならないようにすればいいんじゃないっすか」

「……そうよね、うん……そうよね！」

あっさりと言う滋郎。

真琴は何か思いついたのか、吹っ切れたのか。

普段の明るい表情に戻った。

「は……」

バルコニーに出て息を吐く。

月が大きく、赤い。

「異世界ねえ……」

事実は小説よりも奇なり、か。

室内では3人とも就寝している。

「店、大丈夫かよ……」

元々そう大きな店ではなく、従業員もぎりぎり。

その中から主戦力である自分と滋郎が抜けてたぶん店は忙しい。
2人ともほぼ毎日働いていたのだ。
店長が身内だと中々扱き使われるものである。

「寝るか……」

夜風は気持良かった。

翌日は午前中から授業。

みっちりである。

とにかく詰め込めと言わんばかりに授業は進む。

学校で習う外国語と違い、モロに生活に影響してくる。

日常の生活で身につくものも大きいだろう。

よく使う単語さえ覚えていれば割とどうにかなるもんだ。

春日の提案で単語カード作りに勤しむ。

いざとなればこれを見せれば通じるだろうということ。

ちなみに服は色々もらったので、それぞれの制服はきちんと保管してある。

毎日24時間、制服をきているというわけではない。

こちらの服も元の世界の服も大きな違いはなさそうだ。

普段着に関しては落ち着いた色が多いが、ドレスや騎士服は派手な色合いのものも見掛けた。

昼食はオープンサンドとサラダとスープ。

使われている食材は至って普通（に見える）。

サラダは……ホウレンソウか？

生のホウレンソウに玉ねぎときゅうり。

オープンサンドはトマトスライスにチーズ、ハムと至って普通。

スープはトマトスープのようで、細かく刻まれた具が色々入っている。

「……米？」

「だな」

スープには米が入っていた。

見慣れてるものより長細い感じがするけど。

だがしかしこれっぽっちの量だと雑炊ではない。

「エディさん、この白いのって」

「それですか？ 米はスープやサラダによく使われる食材ですよ」

エディは指輪を嵌めているので、米は元の世界で使われる米と同じってことだよな？

指輪を外すと違う単語に聞こえるのだろうか、米は米。

「どうせなら単品で食べたいんだけど」

真琴の提案に一同頷く。

「単品？ ですか？」

「炊いた米が食べたい」

「えーっと、この国の料理ではありませんが、ピラフ、でしょうか？」

「ピラフでもなんでもいっす。とりあえずご飯ものが食べたいっす」

同意。

米があるなら米が食いたいよな。

今はまだ良いけど、そのうち絶対恋しくなるって。

「わかりました。夜はピラフにするように伝えましょう」

「やった！」

「さて、それでは続きをしましょうか。夕食まで、頑張りましたよね」

「鬼！」

「あ、そうそう。これは文字の練習帳です。自主勉強にお使い下さい」

0-03 そうだ町に行こう

「って、またこれかよ！」

どうやらこの薄塩シリアルもどき、朝食の定番らしい。
勘弁してくれ。

「あー、エディさん？ 明日から朝食変えてもらえないっすか？」

先輩の我慢がきかないようです、と続ける。
失礼な。
だが事実なので否定はしない。

「どんな朝食が良いのですか？」

「うちはパンだなあ。トーストに目玉焼き、ベーコンと野菜とか」

「あー、俺んちもパンっすね。って言っても総菜パン1個置いてあるだけっすけど」

真琴と滋郎はパン食か。

「あー、白米と味噌汁に弁当のおかずの残りとか」

学校に弁当を持参していたため、どうしてもおかずが残る。
基本的に朝はそれを食べ、おかずが少ない場合は何か足す。
さすがに自分一人のためだけにわざわざ朝食を作るのは面倒だった。
朝からバイトの時はバイト先で賄いが出るので問題なかったし。

「米でもパンでも良い。これだけは止めてくれ……」

シリアルもどきを指差して言った。

エディは楽しそうに笑いながら頷く。

「明日から違うものにしましょう。では朝食後、魔法の適性を調べた部屋でお待ちしております」

1日みっちり勉強した。

言葉は勿論、時間の概念や時計の読み方、周辺の地理、簡単な歴史など。

暦は現在大陸歴760年。

これは“アカの英雄”と“魔女”の出現の年らしい。

「何ソレ？」

「……フジムは見てなかっただろうけど、魔女はいたわよ。私たちを召喚した人でもあるし」

うん、覚えてない。

魔女という単語には聞き覚えがあるが。

「同じ年くらいに見える女の人っすよ。実際は760年以上生きてるらしいっすけど」

「は？ この世界ってそんな長生きなわけ？」

「いや魔女だけらしいっす。何でも“精霊の血”を浴びたせいだとか。で、“アカの英雄”ってというのが魔女の師っす。この人はもういないみたいっすけど」

大陸で一番長命な魔女の出現から760年。

あれか、キリストみたいなものか。

しかし精霊。

またファンタジーとかメルヘンな単語が出て来たな。

「不老不死らしいよ。何かあったら魔女に聞け、ってというのがこの国のやり方みたい。つまり私たちの召喚もそういうこと。迷惑な話よね」

逆に魔女さえ味方につければってことか。

帰れない以上、別に国と敵対しているわけでもないしその必要はないわけだが。

大変そうな立場だな、と漠然と思った。

この世界に来て数日が経った。

1日みっちり勉強でかなり疲れる。

運動不足解消のため、訓練場の出入りも解禁となった。

アスレチックのようなものもあり、わりと楽しめる。

何より娯楽がないことがつらい。

元の世界ではバイト三昧でテレビもあまり見なかったが、まったくないととなると逆に見たくなる。

そうなってくると簡単に出来そうなボードゲームの作成に手が出る。主に真琴が欲しがり、滋郎が作るのだが。

滋郎は元々手先が器用で時計やペンを解体したりもしていた。いずれ開発系を体験したいっす……とにやにや呟いていた。意味がわからん。

もう少ししたら週に何日かは休みになり、自由に行動出来るらしい。それから語学の授業は半分減り、魔法の授業が始まる予定だ。滋郎がものすごく嬉しそうなのは分かり切っていたことだが、意外にも真琴が楽しみにしているようだ。

一度訓練の見学に行ったのだが、及川はすでに魔法を使える。エディは素質がある、天才だと誉めちぎっていた。いや楽しそうで何より。

自由行動が出来るようになったら、城下町で食べ歩きしたい。

この世界のケーキ屋とかもの凄く興味がある。

城下町だけでケーキ屋が5店舗以上、カフェも数軒あると聞いた。人口が数千人の町としては多い方なのではないだろうか。

元々ケーキ屋の家に生まれ幼少の頃から手伝っており、両親が亡くなり店を畳んでからは歳の離れた兄の店で働いていた。

兄の店は養鶏場である義姉の実家の卵を売りにしていた。

ケーキ屋なのだがイートインも出来、そちらではランチセットもあった。

バイトは主にケーキ製造だったのだが、ランチのピークには料理も担当していた。

滋郎の担当はケーキ製造と接客である。

「先輩、俺も行きたいっす」

「そうだな。最初は皆で行った方が良いかもな」

そうでもしないと春日は引き籠もりそうだし。

共通語の学習は春日が一番進んでいる。

さすが英語科。

しかし積極性がないので会話が出来ているかといえば出来ていないような気がする。

逆に一番進んでいない真琴が一番会話が出来ているのではないだろうか。

さすが積極性のカタマリ。

真琴は部屋付きのメイドに翻訳機を外してもらってまで実地で勉強する徹底振り。

なのに何故か授業は身につかないというところが真琴らしい。

「食べ歩きもいいけど買い物したーい！」

真琴の訴えに春日も頷く。

「服とか小物とか色々見たいです」

女の子だな。

「俺武器屋とか行ってみたいっす」

滋郎は堪能しすぎだよな。

早速エディに話したところ、エディ引率で町見学に行くことになった。

実地で語学学習というわけだ。

城から出るのは初めてだ。

緩やかな坂道を下り、門を潜れば城下町。
人が多く、朝から活気がある。

「朝市がありますので、この時間は賑やかなんです」

通りは野菜や果物、魚介類など食べ物が多い。

板に大きく値段が書かれており、物価はわからないがどの店も人が溢れている。

パンや串焼きなどの軽食も並ぶ。

良い匂いだ。

城で朝食を食べずに出ているので腹が減っている。

「さてそれではコインをどうぞ」

コインを数枚渡される。

何かの実を刻印された、小振りな銀色。

「朝食はそれぞれ買って食べて下さい。最悪言葉が通じなかったら、コインを渡して指差せば良いですから」

何て無茶振り。

鬼か。

この人混みの中放り出すか普通。

エディからだとも魔力感知でそれぞれの所在地がわかるので問題ないらしいが……。

そういう問題か？

コインを持って軒先を覗く。

「ホットドックっぽいな」

板に2と書かれてあるので、おそらくコイン2枚だろう。

『ひとつください』

『はいよ。——と——どっちが良い？』

「は？」

聞き取れなかったのか、新しい単語か。
まあいいや。

『おまかせします』

わからなかったらこれで良いじゃん。

渡されたホットドックに齧り付く。

千切りキャベツにトマト、ローストハムに塩胡椒。

ちよつと物足りないけど旨い。

シリアルより断然旨い。

果物が並ぶ軒先でそのまま食べられる果物を教えてもらった。

明るい黄色で皮ごと食べられ、食感は洋梨のような感じがする。
ヨシの実というらしい。

朝食後合流し、女子クエストの衣服や小物を取り扱う店へ。

日本に比べるとシンプルで落ち着いた色の服が多い。

服は支給されているので必要ないが、女子は違うらしく数点購入していた。

こういう金は城から出ているらしい。

税金か？

真琴は出世払いだと言っていたが。

滋郎のリクエストでもある武器屋にも寄る。

城の武器庫にあるもので十分だ。

買う必要はない。

しかし値段の高さや武器の重さにはしゃぐ一同。
呆れつつ見守るエディ。

昼食は生パスタだった。

聞けば乾麺はあまり普及していないらしい。

魔法の発達で早くから冷蔵庫もどきがあり、食品の保存に関して不便がなかったからだろう。

同じ理由で保存食の種類が少ない。

クリームを和えた生パスタにサラダとスープ。

デザートに皿盛りのケーキ3種。

「このケーキは城下町で一番人気のあるお店のものなんですよ」

店で出すケーキを違うケーキ屋から仕入れることはわりとよくあるが、こちらでもよくあるのだろうか。

「あとでそちらのお店にも行ってみましょうか」

それはぜひと。

0-04 出会う

ケーキ屋は見事に女性ばかりだった。

「居心地悪いっす」

同意。

滋郎の呟きにエディも頷く。

居心地が悪い男3人。

客は女性ばかりだがちらりと見える従業員は男が多い。
そこは日本と変わらないようだ。

父の店も兄の店も正社員は男ばかりでむさ苦しかった。
逆にパート・バイトは2人以外、女性ばかりである。

「フジム、色々買って皆で食べようよ！」

「そうだな」

ころんとした形のクッキーに、アーモンドたっぷりの薄い焼き菓子。
花型の焼き菓子は味にバリエーションがあるのか、3色並ぶ。
プレーンにココア、ベリー系だろうか。

定番の貝型は見当たらないが、これが近そうだ。

わりとよく見るお菓子もあれば見たことのないお菓子もある。

生ケーキも同じで、見たこともあるケーキも、ないケーキもある。素材自体が少し違うだろうし、当たり前といえば当たり前なのだが。さすがにすぐに食べないといけない生物は少しだけにして、焼き菓子を中心に購入。語学学習も兼ねて、素材や消費期限についてなど色々話を聞いている。

朝市でも見掛けたが、果物に関しては違うものが多いようだし、要研究だな。

「次はどこに行きましようか」

「本屋に行きたいっす」

エディの問いに滋郎が即答。

本屋に決定した。

重い扉を押して店内に入ると、そこは本でいっぱいだった。って当たり前か。

背の高い棚が立ち並び、中にはぎっしりと本が詰められている。

各分野の専門書から小説まで色々あるようだ。

漫画や画集、写真集などは見当たらない。

「フジム先輩、お菓子の本があるっす」

「えーっと……菓子作りの、基礎……か？」

嬉々として滋郎が本を差し出して来る。

タイトルを読む。

しかしまだ文字に慣れていないので、時間が掛かる。
読みに関しては滋郎と春日が早い。

「つす。内容も結構おもしろそうっすよ」

ページを捲ってみるがやはり写真や絵はついていない。
ちょっと欲しいが、本はわりと高価なようで気が引ける。

「出世払いっすよ、先輩。ここでもケーキ屋で働くんじゃないんすか？」

忘れてた。

言われて気付く。

この世界で何か職に就かないといけないんだった。
この世界に永住するんだった。

「滋郎はどうすんだ？」

「俺は開発とかしたいんすけどねえ」

「開発？」

「はい。家電でも良いしエネルギーでも良いし……せっかくなので色々してみたいっす」

まあ滋郎なら頭脳職だよな。

肉体労働という感じではないので、ケーキ屋にバイトで入った時は吃驚したものだ。

高校でも進学科だし、元々中学時代から成績が優秀なことは知っていたので、塾通いか家庭教師をつけるかで学業に専念するものだと思っていた。

「経営も良いっすね。フジム先輩の店の経営担当」

ああ、それは良いな。

製造は好きだが原価計算や費用や利益の算出は面倒なのだ。

「それなら私は接客ね」

真琴がひょいと棚の裏から顔を出した。

「春日チャン、めっちゃ真剣に本見てんの。さすがよね」

確かに真剣に本を読んでいる様子だ。

「もう小説読めるレベルって。私とフジム、やばくない？」

「俺らが普通。こいつらが天才過ぎるんだよ」

普通に考えてみる。

一ヶ月も経たずに英語の小説原文で読めるやつなんていないだろう。辞書片手にならともかく。

「それもそうよね。うん、良いんだ！ 私は私のペースでいく！」

「おー」

「あ！ フジムのとこのケーキも好きだけど、オムライスも美味しいよね！ オムライス食べたい！」

何で女子ってところろ話題が変わるのか。

兄の店は、店の名前がたまご工房でそのまま卵が売りだ。ランチメニューも自然と卵料理がメインとなる。

女性客にはオムライス、男性客には親子丼が人気だ。

「そうだよな。こっちの料理もそりゃ旨いけど、食い慣れたもん食いたってのはある」

醤油とか味噌とか米とか、特別好きってわけじゃないけど恋しくなる。

米とか大豆はあるみたいだし、似たような調味料もあるかもしれない。

エディに頼めば探してくれるだろうか。

頼んでみるか……。

さすがに買ったものすべてを一日で消費できるわけもなく。夕食を終え、腹ごなしにと散歩に出ることにした。

部屋から見える中庭に出てみた。

よく見えないが色々花が咲いていたような気がする。

月が二つ、夜空に輝く。

「今日は両方青いのか」

前と違い、月が二つとも青白く発光している。

何か法則があるのだろうか。

まだまだこの世界は知らないことばかりである。

『……誰だ』

木の陰が動く。

耳障りの良いアルトに振り向くと、ちょっときつそうな顔立ちの少女がいた。

薄暗いので色彩はわからない。

『キイト・フジムラ』

誰だと言われたので名乗る。

異世界から召喚されたという単語を聞き忘れていた。

説明が出来ない。

『ああ……——の————か』

「は？」

聞き取れなかった。

まだ習ってない単語だろうか。

『ああ、良い。私の名前はリゲル。……リゲル・ノーグ』

『リゲル』

復唱する。

『“魔女”と呼ばれている、貴方達を召喚した責任者だ』

息を飲む。

“魔女”という単語は滋郎達から聞いている。

まさか一対一で会うことになるとは思わなかった。

何て偶然だろう。

突然リゲルは頭を下げた。

この世界の人間が頭を下げているところを初めて見た気がする。
風習の違いかと思っていたが。

『貴方達には申し訳ないことをしたと思っている』

眉を顰め苦しそうに吐き出す言葉。

意外だ。

もっと傲慢そうなイメージを持っていたのだが。

それこそ“この世界の役に立てるなんて嬉しいだろう？ふふん”的な。

『恨んでくれて良い。私が責任を持って必ず——』

また、聞き取れなかった。

リゲルは俯き、表情は見えない。

『何か困ったことあれば言ってくれ。……出来ることなら何でもする』

顔を上げる。

意思の強そうな瞳が射抜く。

「あ……と『わかった、伝える』

『頼む』

ふとりゲルの口元が緩んだ。

700歳以上だとか言ってたけど、何かかわいいな。

まあ見た目は同じ年くらいにしか見えないけど。

『ありがとう、キイト』

……花が綻ぶようになってこういうことか？

射抜かれたのは、何。

0-05 魔法……？

エディに頼んでみた調味料が届いた。

探している醤油や味噌の特徴を口頭で説明できるはずもなく。

“この世界に存在する調味料をすべて”取り寄せてくれたらしい。

ずらりと並ぶ、調味料。

並ぶなんてものじゃないけど。

箱に詰め込まれてるけど。

「どんだけだよ」

「研究のし甲斐があるじゃないっすか」

滋郎は何故か楽しそうだ。

そしてエディには料理人を目指すと思われているようだ。

あながち間違いでもないが。

まずはひとつ開封し、ぺろりと舐めてみる。

オイスターソースっぽい？

炒め物にしてみるか。

炒め物向きそうな根菜や葉菜を手に取り、下拵えする。

「フライパンがない」

そうか、調理器具も違うのか。

同じものも多いが、見たことのないものもある。

そういえば箸も出て来たことないもんな。

道具も色々頼んでみるか。

出世払いだ、出世払い。

とりあえずフライパンは両手鍋でいいか。

鍋を熱し、油を敷く。

素材をいれ、炒める。

火が通ったところで調味料投入。

「よし、うん、普通」

ごく普通の炒め物が出来上がり。

若干中華風といえば中華風。

この分だと道のりは遠そうだ。

箱詰め of 調味料を見て、溜息を吐いた。

「それでは今日から魔法の練習をしましょう」

「ギター！」

「待ってましたあ！」

滋郎と真琴のテンションが高い。
うぜえ。

魔法の練習ということで、場所はいつもの部屋ではなく訓練場である。

「今回はもう一人、講師を頼んでいます」

エディに呼ばれ、入ってきたのは“魔女”リゲルだった。
あの夜わからなかった髪の色は、銀。
光の加減によっては白っぽく見える。
濃い灰色のローブが“魔女”らしい。

「“魔女”……」

ぽつりと春日が呟く。
その表情は暗い。

「へー、“魔女”が講師？」

『リゲル・ノーグだ。リゲルと呼んでくれ』

真っ直ぐに真琴を見てリゲルが言う。

「ま、責めても仕方ないしね。『私は真琴。マコって呼んで！
ろしく、リゲル！』 よ

肩を竦め、笑顔を見せる。

裏のない笑顔。

『宮尾滋郎っす』

『春日です。よろしくお願いします』

リゲルと目が合った。

真琴が不思議そうに見ている。

ああ、自己紹介しないからか。

『髪の毛、銀色』

『ああ。前にあったときは暗かったからか』

『綺麗』

『は……』

リゲルが目を瞠る。

その様子を見ていた滋郎たちも驚きの表情で2人を見た。

『……キイトの髪も、綺麗だ。夜の色で』

リゲルがはにかむ。

やばい。

かわいい。

「うわぁ……フジムが誑し込んでる」

「珍しいっすね」

誑し込んでるなんて失礼な。

正直に、本心しか言っていないのに。

「……あの、とりあえず魔法の授業、始めても良いでしょうか」

エディが苦笑いでつぶやいた。

魔法の授業が始まった。

魔法には分類がある。

攻撃系魔法や防御系魔法、補助系魔法など、属性とはまた別の分類である。

まずは難易度の低いもの、簡単な攻撃と防御からということだ。

初歩の初歩の魔法は掌もしくは指先で、自分の属性の魔法を出現させるというもの。

「水にしましょうか。ここにいる6人全員の共通属性ですし」

エディが掌を上に向けた。

注視する。

「Ⅲ」

水の塊が出現する。

液体なのでそれが流れ落ちる様子を黙って見ていた。

「……ちよっと待って」

「何でしょうか」

「今の、何？」

真琴がふるふると震え、問う。

エディは質問の意図がわからず、首を傾げながら答える。

「水の基礎魔法ですが……？」

「そうじゃなくて！ 何今の、呪文なの！？」

「え？ 呪文？」

「そうっすよ！ 何すか今の！ もっとう！ ね！？」

ねって。

「今のは水の出現を表す魔記号ですが」

「魔記号？」

「ええ。魔法に魔記号は欠かせません」

「……期待外れもいいところだわ」

「ちっ。つまんないっす」

「お前ら話進まねえだろうが」

「っす」

ゲームや漫画でよく見掛ける、長い呪文を唱えるものを想像し、期待していたらしい。

「気を取り直して……Ⅲ／Ⅹ」

「……………」

真琴の顔がひどいことになっている。

お前女だろ。

「これが出現した魔法をその場に留める魔記号です」

水は流れ落ちず、エディの掌にある。

「留められる時間は魔力の流し方や量によって変わります。個人によっても違うので色々試してみるしかありません」

水が消えた。

エディがまた新しく魔記号を呟く。

「Ⅲ／Ⅱ；Γ」

掌の水が放出される。

「あ、駄目っす。イラっとして来た」

「抑えろ滋郎」

滋郎は夢が壊れたせいかな苛立っている。
普段へらへらしているが意外と短気だ。

「今のは留めた魔法を飛ばす魔記号です。方向は魔力を流した方向と逆に行きます」

「次は……リゲル」

『どうぞ』

「Ⅲ／Ⅱ；Γ」

『re；Ⅲ』

「これが防御ですね。魔記号は順番を入れ替えたり省略することで違う魔法になったり、効果が変わらなかったり色々ですが、最初はまず基本的な魔記号を覚えることから始めましょうね」

面倒になってきたんだが。

これは避けられないのだろうか。

子供でも魔法が使える世界だと言っていたので避けられないんだろ
うなあ……。うなあ……。

エディやリゲルに見てもらいつつ、魔法の練習を始める。

「Ⅲ／Ⅹ」

意外と難易度は低いらしい。

子供も使えるので当たり前なのかもしれないが、しかし魔法のない
世界から来た身としては感動モノである。

別に魔法にあこがれも何もなかったが、これは中々。

基本はⅢの部分のを他の属性の魔記号に変えるだけだ。

それぞれの属性の魔記号を教えてもらい、練習する。

全員難なく魔法の基本を習得した。

咄嗟に使えるかは別であるが。

練習風景を見て何を思ったのか、夕食後、滋郎が唐突に話を切り出
した。

「フジム先輩リゲルさんが好きなんすか？」

何故。

「いや好きっていうか……まあ、正直なところ見た目は好みだ」
嘘ではない。

きつめの顔立ちなのに笑うとかわいいなんてモロ好みだ。

「……………」

「ちょ、フジム、春日チャンひいてるじゃん！」

「何でだよ、正直に答えただけだろ。大体中身が云々つつつてもま
ず見た目からじゃん」

見た目が受け付けないと中身も見えないだろ。

「え、そんなことないでしょ」

「いやお前、いくら中身良くても小学生とかじいさんとか好きにな
ることないだろ？」

性別、年齢を含み見た目の第一印象は大切だと思う。
それにどれだけ美人でも不潔だったらひくだろうし。

「そりゃあ、まあ、そうだけど……」

「っていうか“魔女”は老女じゃないんすか」

確かに700歳は老女だろうが。

「見た目は若いから良いんじゃないね。つか見た目は好みだけど好きと

は言っていないだろ」

「えー……」

「つか何だこの会話。
色々おかしいぞ。」

1-01 騎士団

語学と魔法とその他色々。

午前中いっぱい座学、昼食後は魔法を詰め込む。

夕方からは自由時間になるので、滋郎や真琴と訓練場で体を動かすことが多い。

中でも魔法で作った水球を投げたり打ったりが最近のお気に入りだ。春日は体を動かすのが苦手なようでもっぱら見学である。イメージ通りだ。

たまに一日中自由な日が出来、城下町に行くようになった。引率はなしである。

大抵4人一緒に行き、女子が服や小物を見ている間、町を探索する。服選びになんか付き合ってもらえるかつうの。

「先輩、今日はこの店どうっすか？」

「そうだな。つうかこの店で最後なんじゃね？」

今のところ毎回違うケーキ屋に寄っている。

一番最初が一番人気のケーキ屋だったが、次からは寄りやすい順に回った。

城下町にあるケーキ屋は全部で6店舗と聞いている。

この店が6店舗目だ。

意外と多い。

お茶菓子という風習があり、特別な日にケーキを食べる人も多いのだとか。

木製の看板、色の剥げた扉。

埃こそないものの、薄暗い店内にケーキや焼き菓子が並ぶ。

といっても、今まで行った店に比べ、格段に種類が少ないのだが。

何ていうか……期待出来そうにない。

いやいや見た目だけで判断はいかん。

食べるだけは食べよう。

食べるだけは。

生ケーキを4種類と焼き菓子を数点。

いつもより量は控えめである。

やる気のなさそうな猫背の青年に清算してもらい、店を出た。

「何か微妙っすね。やる気もなさそうでしたし」

「だな」

女子と合流し、城に戻る。

今日はこれから及川の訓練を見学するのである。

及川は春日を誘った。

春日は真琴を誘った。

真琴は滋郎を誘った。

滋郎は貴人を誘った。

何だこれ面倒くせえ。

しかも誘ったんじゃなくて巻き込んだの間違いだろ。

春日と真琴がレモン水を作り、それを差し入れに騎士団の訓練場に行く。

「及川先輩、強いっすねー」

金属のぶつかり合う音が響く。
気合の入った声、怒号、声援。

及川は副団長と思わしき人物と模擬戦を行っていた。
剣と魔法を駆使して戦っているのだが、互角に見える。
貴人はそれよりもその横で模擬戦をしている若い騎士の剣が気になった。

剣の色が透明に見える。
透けているのだ。

「及川先輩の腕なのか補正なのか」

「は？」

「何でもないっす」

「すごいね、ミッチーかっこいいじゃん！　ね、春日ちゃん！」

真琴の目が爛々と輝く。

真琴の持っていていき方がちよつと強引な気もするが。

「そうですね、及川先輩が人気なの、わかる気がします」

まあ春日が同意しただけ良いか。

でも春日の性格上、否定することはない気がする。

「誰がミッチーだ！」

いつの間にか及川が近くまで来ていた。

心なしか顔がにやけている。

「あ、及川先輩、お疲れ様です。これ、良かったら……」

春日にレモン水を手渡され、嬉しそうだ。

わかりやすいデレデレ具合。

それをにやにやと面白そうに見学する滋郎と真琴。

元々及川が春日に好意を持っていることは、周知の事実。
バレバレだ。

初日から目線がずっと春日を追っている。

そして何かと春日を気遣う。

わからないはずがない。

しかし春日はまったく気付いてないようだ。

春日も及川も人気があるのでお似合いだと思う。
貴人にとってはどうでも良いことだが。

「あー、血が騒ぐ！ 混ざりたい！！」

真琴がふるふるとふるえ、叫ぶ。

「混ざれば？」

「うう……下手に目立ってもあれかなあって」

確かに、下手に目立って救世主候補にされても困るだろう。

「まあな」

「あ、じゃあ魔物討伐とかどうですか？ いるんですよね、魔物」

「あーそういえば言ってたな。町の外には出ないようにって」

自由行動の範囲は城下町の中だけだと言われている。

町の外に出れば魔物の出る区域もあるからだそうだ。

そのため魔物討伐の職もあるという。

が、滋郎の期待したギルドは存在しないということで、ショックを受けていた。

「魔物って……スライムとか？ レベルとか上がんないのかなー」

「ゲームじゃあるまいし……呪文もあれだったろ、期待すんなよ」

「そうだった……期待なんてしない……」

「そもそも魔物つつつても、生き物を殺すってことだからな」

その覚悟はあるのか。

真琴が落ち込む。

3人で話している間に、及川は訓練に戻って行った。

「そういえばさー、春日ちゃんってどんな人が好きなの？」

ぱっと顔を上げ、にやにやと春日に話しかける真琴。

「え」

途端に春日の顔が赤くなる。
色が白いのでわかりやすい。

「えっと……あの……」

湯気出そう。

「わ、たし……は……その……」

春日は意を決したかのように顔を上げ、真剣な面持ちで語り始めた。

「男の人ってあんまりしゃべらない方が良いと思うんです。無口っていうか、落ち着いてる雰囲気で、クールな感じが格好良いなって。ちょっとぶっきらぼうだけど優しくて頼りになるし、力もあって。すぐ真剣に働いてるのも格好良いんです。人気あるのに相手にしないところも媚びてないっていうか」

目を丸くして、春日を見つめる。
つうかそんなに喋れたんだな。

「それに目付きがあんまり良くないのに笑うとかわいいところとか、大きい手とか、」

「ストップ。そろそろ戻ろうぜ」

止めないとどこまでいくのかわからん。

何だか目立っているようだし、そろそろ夕食である。

「そうっすね。夕食後に買って来たケーキ、食べましょう」

「まさかの!」

「っすねー。せっかく救世主立候補したのに及川先輩カワイソウっす」

ケーキの味がイマイチで、気分転換にと貴人は散歩に。

春日は奥の女子部屋で休んでいる。

部屋には滋郎と真琴の2人のみ。

春日の、それ、貴人のことだね? 的な語りを聞き、二人は突っ込みたくて仕方がなかった。

「えーでもフジムねー。まあ中学の時は結構モテてたけどさあ。まだ二ヶ月くらいなのに、意外に惚れっぽい？」

「あー、いや。たぶんもっと前からっすよ。春日さん、たまご工房の常連っすから」

「え!？」

真琴は驚いてテーブルに身を乗り出した。

「フジム先輩は覚えてないかもしれないっす。確か前に転びそうになった女の子をキャッチしたことがあって、それが春日さんだったと思うんすよね」

「へー……何それ少女漫画みたい。ていうかミッチー知らないよね。バレないようにしないとかわいそすぎる……!」

「そうっすね。及川先輩には頑張ってもらわないと」

当事者丸無視の恋愛トークである。
いたところで止められない気もするが。

「マコ先輩は？　ないんすか？」

「興味ない」

一刀両断である。

真琴は本気で興味がなく、交際歴どころか初恋？何それと鼻で笑うような状態だ。

「まあ俺も興味ないっすけどね」

「2次元だけで良いって？」

「その通りっす。その2次元も見れなくなっちゃいましたけど」

残念そうに溜息を吐く。

滋郎はどこまでも滋郎である。

1-02 魔物討伐

魔物討伐の職は、討伐隊という。

城に属する騎士団の中にある部署のひとつである。

大きくわけて3つ。

王宮騎士隊・警備隊・討伐隊。

花形は王宮騎士で、及川はこの王宮騎士隊である。

この隊も色々細分化されているらしいが、詳しいことは聞いていない。

そんなわけで、4人は討伐隊に臨時参加することになった。

自衛のための訓練として少くらい経験しておくべきだということだ。

異世界から召喚されたことは、城の人間は大体知っている。

すなわち、騎士も知っているということだ。

及川が救世主として扱われているので、残りはオマケだという認識。当然、舐められる。

わかってた。

「先輩、」

「駄目だっつの」

苛々した様子の後輩に駄目だししつつ、滾るぜ！とはしゃぐ真琴を抑えつつ。

こんなキャラじゃないのに、と貴人は溜息を吐いた。

春日は俯いたまま、もくもくと歩いている。

討伐隊はいくつかの班にわけられている。

一番優秀だという班に、まとめて放り込まれた。

初めての魔物討伐の標的は3本の角の生えた、大ネズミっぽい魔物である。

この魔物、一匹ずつは強くないが集団行動をとるので面倒なのだという。

生き物を殺すこと。

その覚悟。

いざというときに自分の身を守れないようでは、困る。

城下町から一步も出ないというならそれもありだと。

だがそういうわけにもいかないだろう。

自分の身を自分で守るために、出来ることはしておかないと。

幸い全員それなりに魔法が使えるので、直接手にかけずにすむ。

上手くやれば死体も残さないように出来るだろう。

一応貸し出されている剣はあるが、訓練すらしていない。

前に見た透明な剣は私物らしいので借りることは出来なかった。

「この辺りでサウンマスが目撃されている。やつらは群れで動くので油断しないように」

隊長の注意があり、それぞれ周囲の探索に出る。

個人で動くと危険なので班単位で動く。

今回は4人一緒なので、この班だけ人数が多い。

魔物を目撃したらホイッスルを鳴らし、討伐隊全体が集合するのである。

最も参加している班が、今回は多くない。

探索開始。

森というほど鬱蒼としてないが、足場は安定していないし、見通しも悪い。

張り切っている滋郎と真琴は班長達と共に前方を歩く。

その少し後ろに貴人と春日。

そのまた後ろにベテランの騎士が一人。

「大丈夫か？」

さっきから春日は一言も話さない。

「……はい」

「別に戦わなくて良いんだぞ」

現実を見ておくことは大事だと思う。

だけど戦わないといけない、ということはない。

特に春日は戦わないで欲しい。

及川が何のために救世主になったのかという話だ。

「でも」

「ここで戦おうが戦うまいが、いざとなったらどうにかなるって」

樂觀的だが、春日はここで戦っても何にもならないと思うのだ。

「守る」

「え？」

「及川もいるし、滋郎もマコもいる。春日は戦わなくて良い」

「わたしひとりだけそんな、」

「俺が良いって言うてるんだから良いんだよ」

目の前でうじうじされるとうざい。

ここで戦ってその罪悪感とか嫌悪感とか負の感情でまた落ち込まれることも目に見えていて。

「お前は守られてろ」

春日の頭に手を置き、前を見据える。

「来たみたいだな」

春日もつられて前を見、息をのんだ。

笛がなる。

集合、そして戦闘開始の合図だ。

「来たあ！ ジロ！」

「はいっす！」

走り出す二人。
楽しそうで何よりだ。

「Ⅲ／ⅡⅡⅠ」

真琴の放った水球が、勢い良く魔物にぶつかる。
魔力を多めに乗せればその分威力もスピードも上がる。
一番最初に覚えた基本中の基本だが、真琴が使えばかなりの威力だ。

「3／ⅡⅡⅡⅠ」

滋郎の放った風の刃が魔物を切り裂く。
魔物の体は真っ二つに裂け、血が吹き出る。
青い。
魔物の血液は青か紫が多いのだ。

「Ⅱ；Ⅱ；Ⅱ」

繰り返す、繰り返す。

滋郎が風の刃を無数に操り、魔物を細切れにしていく。

その様子を見て、春日が涙目になる。
顔色も悪い。

何で当事者のあいつらは全然平気そうなのに、何もしてない見てい
るだけの春日がこうなのか。

不思議だ。

二人が調子に乗ったおかげで、貴人を含め他の騎士たちは出番なしだ。

「いやー、大丈夫だったわ。余裕余裕」

魔物の強さと、生き物を殺すことに対しての両方か。

「そうっすね。魔法で攻撃っていうのと、モンスターの形状がかわいくないからっていうのもあるんすかね」

あっさりと言ったのける二人。

まあ吐かれたり鬱になられるより全然良い。

「お、お強い、ですね……初めての戦闘だとお聞きしておりましたが」

班長が頬を引き攣らせながら言う。

「魔物討伐は初めてっすけど、まあ、慣れてますから」

滋郎はおそらくゲームや漫画で耐性があると言いたかったのだろう。しかし班長はそういう意味で取っていない。

取れるはずもない。

「意外と魔力使わなかったね。っていうか火の魔法使いたかった！」

真琴は火の魔法が一番相性が良いようだ。

しかし森で火を放つわけにもいかないと、今回は禁止されている。

「でもこの程度じゃあ救世主になんてなれないから、ここにいるんすけどねー」

厭味だ。

お前たちより遥かに多いこの魔力を持っても、救世主ではないのだと。

にっこりと爽やかそうな笑顔で言い放つ。

滋郎は根に持つタイプである。

「あ、先輩は良かったんすか？」

「別に良い」

魔物討伐は何回か参加予定になっているし、進んで戦いたいとは思わない。

見ている分には気分が悪いこともなかったが、自分の手に掛けるとまた違うのだろうか。

「それよりも終わったなら早く帰ろうぜ。春日がヤバイ」

口元を手で押さえ、蹲る春日。

「わ！ 春日ちゃん大丈夫！？ ジロ、おぶれ！」

「え、俺っすか！？」

「当たり前だろ、さっさとしろ！」

滋郎は渋々嫌がる春日をおぶり、歩き出した。

その様子を奇異の目で見ると騎士たち。

貴人はこっそりと溜息を吐いた。

1-03 再建計画

魔物討伐が終わり、翌日は休日。

エディが気を遣ってくれたのだが、貴人は何もしていない。

春日は体調不良でベッドの中で、真琴は一層火がついたらしく、とうとう騎士団の訓練に混じっている。
及川と同じところだ。

そんなわけで男二人、ぶらり城下町。

「あ、この店閉めたんだな」

前に寄った薄暗い店だ。

扉には休業のお知らせが貼ってある。

「まあ無理もないっす」

他の5店舗に比べ、格段に人気がなかったのは見ればすぐにわかったことだ。

「どういう意味ですかあああああ」

突然の大声に驚き振り返るとそこには、号泣する猫背の店員がいた。

「こんなに、こんなに頑張ってるのにいいいい」

じろじろと町行く人に訝しげに見られ、2人は慌てて店内に逃げ込んだ。

青年を引き摺って。

「いや、すみません、取り乱しちゃって……あ、僕はイグレッツィオと言います。どうぞグレッツとお呼び下さい」

ようやく落ち着いたらしい。

差し出されたお茶を啜り、息を吐く。

「じつは僕、外国で絵の勉強をしてたんです。でも父親が亡くなって、店をどうするかって話になってそれで」

画家の卵なんて儲からず、副業でどうにか食べていた日々。
突然の訃報。

父の店を閉めてしまうのも嫌だという兄弟との話し合いにより、一番条件の合うイグレッツィオが店を引き継ぐことになった。
遺されたレシピを見て店を開け、副業としてケーキ屋を営みつつ、絵の勉強をすれば良いと――。

しかし、この有様である。

人に押し付けた癖に兄弟たちには詰られるしで最悪だ。

「うう……」

再びぼたぼたと涙を流す青年に、貴人は慰めの言葉をかける。

「今までケーキ屋で働いてたわけじゃなかったんだろ？ 頑張ったな」

「結果は努力だけでどうにかなるもんじゃないし、しょうがないっすよ。売れないもんは売れないっす」

「ううっ……！」

「バツカ滋郎、落とすんじゃないよ、上げろよ」

「さーせん」

滋郎に台無しにされた。
うぜえ。

「それでこれからどうするんすか？」

茶請けに出されたクッキーを食べ、お茶を啜る。
うん、硬すぎる。

「それなんですよね……どうしよう……」

落ち込むイグレッツィオに、滋郎が優しく声を掛ける。

「それなんですけどね、職人を雇えば良いと思うんすよ」

「おい、まさか」

「そうっす。俺たちを雇いません？」

「え？」

滋郎の言葉にイグレッツィオは目を丸くした。

「じつは職人なんすよ。雇ってもらえればこの店、立て直しますよ？」

「ほ、本当に……？」

「本当っす。任せて下さい」

滋郎のその自信は、一体どこから来てるのか。

人に押し付ける気満々なんじゃないだろうかと思うのだ。

結局こうなるんだよな。

貴人は溜息を吐いた。

面白そうではあるが、どうなっても責任は取れないぞ。

「それで、この店のウリは？」

「はい？」

「セールスポイントとかコンセプトとか」

「そんなものありません。父親の残したこのレシピを見て作ってるだけですから」

イグレッツィオは自慢げにレシピを掲げながら言うが、それは自慢して良いところではない。

「……それでよく頑張ってるって言えたっすね」

店内に滋郎の呆れた声が響く。

気を取り直して。

「あー……前の店と大分変わっても大丈夫か？」

「ええ、それはもちろん！ 店があるってだけで兄弟たちは満足なんですよ」

「それなら良いけど」

この世界に来てまだ日も浅く、前の店舗の情報も少ないとなると、おそらく全然違う店になる。

立て直せばそれだけで良いっていうのなら、なんとかなるかもしれない。

まず敵を知ろう。

イグレッツィオに他店のお勧めを色々買って来て貰った。胸焼け胃凭れと戦いつつ、他店の傾向を探る。

「これが一番人気の店のだな。全体的に小さめで作りが丁寧。値段も高め、高級感がある」

「で、こっちが一番近い店っすね。素朴な味わい、若干大きめ、安め」

「この店はマフィンの専門店です。種類がたくさんあって人気です」

「こっちの店は……フルーツをウリにしてるんすかね。フルーツの使用量が多いっす」

「つうかこっちのケーキは全体的に甘めだよ……この店は作りは丁寧だけど手頃な値段設定。立地が良ければもっと人気でそう」

ミント系のすっきりしたお茶を飲む。

「そこまで特徴のある店はないか。こっちの世界はあんまりコンセプトとかないのかもな」

「そうっすね。逆にやりやすいかもしれないっす」

被る心配がないという意味ではやりやすい。

「まずは品揃えからな」

どの店にも置いてある商品を滋郎に書き出してもらおう。

城下町で定番中の定番ということだろうし、この店でも外せない。

「そういえばこれ」

花型の焼き菓子の赤色のものを摘む。

「何味？」

味はベリー系なのだが、形は残っていないし、何よりこの世界の素材に詳しくない。

「ああ、アカの実ですよ。この町ではアカの実の人気の高いので」

イグレッツィオが指差したのは、ケーキの上に乗った飾りだった。赤すぐりによく似た赤い果実。

一回り大きく、酸味が若干なく、甘みが強い。

「どのくらい人気なんすか？」

「そうですね……年中取れて値段もお手頃で、お菓子の定番というか欠かせないものですね」

日本でいうと苺のような扱いか。

味も良いし色味も良いから使い易いな。

「商品の種類の最終決定は試作してからだな。まずは設備に慣れたいし、明日から厨房借りるぞ」

「どうぞどうぞ」

「オヤジさんの遺したレシピも貸してくれるか？ 滋郎写しておいてくれ」

日本語で。

「はいっす」

「で、あとは店なんだけど」

店内を見回す。

穴が開いていたりということはないが、壁の色が剥けているのが気になる。

ところどころ染みもあるし。

「改装というより塗装しようぜ」

「良いんですけど、資金が……」

「資金って何の？」

「何って塗装代ですよ」

色遣いが地味な世界なので、ペンキも高いかもしれない。

「あーペンキ代はエディに借りよう」

魔法の呪文、金利なし、出世払い。

自分達の職のためといえば渋ることはないと思う。

「ペンキ代ではなく塗装代ですよ。塗装だけでも結構な額が掛かる

んです」

「……ペンキは調達するんでグレッツさんが塗るってことっすよ？」
噛み合っていない会話に滋郎が注釈を入れる。

「え？」

「絵描きなんだろう？ 壁をキャンバスだと思って塗れば良いんだよ」
「わー先輩無茶振り。でもよろしくっす」

むらがあっても手作りっぽくて良いんじゃないだろうか。
いつそそういう風にしてしまうのも良いかもしれない。

ただ手作り風が日本で受けていたのは、それが一般的ではないからだ。

この世界ではむしろ手作りが一般的である。
受けるかどうかはわからない。

「あ、そうだ。グレッツ、アンタの描いた絵を見てみたい」

この世界初の絵描きの絵だ。
書籍には一切絵がなかったし、城に肖像画の類もなかった。
スケッチブックを見せてもらう。

「いいね」

風景画や人物画が描かれている。
色遣いは意外と大胆だ。
良かった、抽象画じゃなくて。

「お、この花、アカの実の花？」

その風景画にはアカの実になりつつある、大輪の花が描かれていた。

「はい、そうですが」

「この花をさ」

新しい紙に、アカの花を描く。

細部を描くのではなく、デフォルメされたイラスト調のもの。

縁は太めでオレンジ掛かった茶色、中は少し渋めの赤。

中心は暗めの黄色である。

「これを真似て描いてみて」

さすが画家の卵。

貴人も下手ではないのだが、断然上手い。

「これロゴにしようぜ。こういうイメージで外壁と店内の壁に絵を描いて」

「壁に絵、ですか？」

「そう、直接な。どの店も普通の壁だったからインパクトあるだろ。外壁はアカの花が良いけど、店内は風景画が良いか」

店内には商品の色もあるので、少し落ち着いた絵が良いか。

「壁は任せるからな。ちゃんとボロいところ隠せよ。そのための絵で

もあるんだから」

むしろそのための絵である。

1-04 試作

夕方になってから店に籠り、試作を始めた。
菓子作りの基本の本と、イグレッツィオの父親のメモを参考にして
いる。

滋郎は原価の計算と売価の設定、店の飾りなど細かい部分を見直し
を頼んでいるが、商品が決まらないことには動けない。

グレッツには勿論壁に絵を描いてもらう。

看板や焼き菓子を置くテーブル、ベンチにもアカの花。

包装材はどの店も同じものを使っていた。

印刷技術が発達していないので、オリジナルの包装紙はどうしても
高くつくからだ。

高いなら作れば良い。

ということで、スタンプを作成。

アカの花と店名だ。

包装紙に押すだけなのだが、中々良い感じである。

包装紙が薄茶色なのでインクの色は赤みのあるオレンジにした。

この世界では包装紙で包み、茶色の紐で閉じ、花を飾るというのが
一般的なようだ。

リボンというか布製品が高め。

さすがにもう少し安くないと導入できそうにない。

仕方がないので紐はそのまま、ただし包装の仕方に変化をつけるこ

とで妥協。

こちらの世界のオーブンは、見た感じ石釜だ。

少しクセがあるものの、温度調整も出来るし性能はオーブンと変わらない。

ただ燃料が魔動石なので、うっかり燃料補充を忘れるとオーブンが止まる。

「よし、試作第一号の完成っ」と

第一号はプチシューである。

どの店にもシュークリームが置いてあったので、それをアレンジしようと思ったのだ。

カスタードと生クリームを合わせ、アカの実を入れてアクセント。仕上げて粉砂糖を篩う。

プチにしたことにも意味がある。

第一に食べやすさ。

第二に残ったときの処理、である。

「第二号も完成。マコ、試食よろしく」

「任せて！」

出来るだけ色々と意見を聞きたいので、真琴を誘ってみたのだ。

「おいしい！ この赤いの、クリームに合うね！」

「アカの実だってさ。そのまんますぎる」

「確かに！ 私この実好きだわ。ベリー系良いねー」

ベリー系が好きな女子って多いよな。

逆に男子は好きな人が少ない気がする。
偏見か？

「で、第二号な」

「うん、こっちも美味しい。軽いしサクサクいける。たまご工房にもあったよね」

「そ、あれのサイズ違い。ラスクは小さい方が食べやすいしな」

第二号はシューの皮を使ったラスクだ。

売れ残ったシューの皮をうまく処理するための商品でもある。

「ラスクがある店はなかったし売れないかもしれないけど、とりあえず捨てるよりはマシだろ」

試食を出せば売れる可能性もあるし、何事もやってみないとわからない。

真琴の反応は良いし、グレッツにも試食してもらってから商品に加えるかどうかを決める。

美味しいか、美味しくないか。

売れるか、売れないか。

作業効率が良いか、悪いかな。

色々考えて商品を決めていく。

本日の試作はこれで終了。

日中に授業がある日はそんなに長く時間を取れない。
試作品の残りを持って城に戻る。

「あ、リゲル」

「マコ、キイト。出掛けてたのか」

「俺と滋郎が城下町のケーキ屋で働くことになりそうなんだ。で、
試作に付き合ってもらってた」

「ケーキ屋？ 意外だな」

「フジムは元々家がケーキ屋さんなんだ」

イメージに合わない、とはよく言われる言葉だ。

「あ、そうだ。これ、試食してくれるか？」

貴人はリゲルにプチシューを渡す。

リゲルはこの世界の女性なので、試食にぴったりの人物だ。

「アカの実か。私も好きなんだ」

プチシューを口に運ぶ。

「美味しい。こんなに美味しいシュークリームは初めて食べたな」

「大袈裟。でも、ありがとう」

あまりお世辞を言いそうなタイプと思わなかったので、少し驚いた。素直に嬉しくもある。

「クリーム、ついてる」

リゲルの唇の端を、親指で拭う。

「うわぁ……」

真琴が微妙な表情で呻く。

「何？」

「何でもない」

苦笑いだ。

リゲルも不思議そうにしている、真琴は私がおかしいの？とごちる。

「そういえば、何で“魔女”なんだ？」

ふと不思議に思ったことを聞いてみる。

前に少し聞いた気もするが、この際色々聞いてみよう。

「“魔女”は単なる通り名だが……そうだな。その昔精霊の血を浴びた事で不老不死になった。それだけだ」

「不老不死……700年も？」

「このままの姿で700年以上生きている。皆先に逝き、私だけが永遠に取り残される。……だが、後悔はしていない。大切な人を守れたことが、むしろ誇らしい」

穏やかな微笑み。

やさしい表情。

「大切な人？」

何となく引つかる。

もやっとするというか。

「師だ」

師。

そういえば前に聞いた気もするな。

しかし精霊の血を浴びると“魔女”なんだとすると、他にも“魔女”がいてもおかしくないのではないだろうか。

「精霊の血を浴びて不老不死になるなら、リゲルの他にもいるんじゃないのか？」

「いない。精霊は元々、人の手で傷つけられる存在ではないのだ」

「じゃありゲルは何で……？」

「精霊によって作られた武器でなら、精霊を傷つけることが出来る」

「精霊って武器なんて作るの？」

確かに。

貴人の中で精霊は自然と一体化して暮らしているような、そんなイメージだ。

妖精でも妖怪でも言葉は何でも良いが、人前に出てこないというか。

「……かなり特殊なことなのだが、この世界に精霊の作った武器が5つある」

「へえー！」

ますますゲームみたいだ。

勇者がその武器を集めてラスボスを倒す、なんてよくある設定。

「今は封印されているが……そうだな、いずれ向かわなければならぬ。時が来れば――」

リゲルと別れ、部屋に戻った。

春日はまだ寝ているようなので邪魔にならないよう一番手前の部屋だ。

滋郎は解体に行つて来ます、と日本語でメモがあつた。
待て、何を解体する気だ。

「何かさ。武器が5つって出来すぎてない？」

「俺も思つた」

「私達、本当は巻き込まれて5人なんじゃなくて、わざと5人呼ばれたんじゃないかって思える」

それには同意だ。

「何かあるんだろうけどな」

現時点でそれが何なのかはわからない。
だがどう考えてもその5つの武器が怪しい。
怪しすぎる。

「ま、いっか。その時になればわかるでしょ！」

軽い。

軽すぎる。

ただ今それを考えても答えは出ないのは確かで、それなら他に時間を割いた方が良い。

「それよりも今は店の再建よね！」

その通りだ。

店の再建が第一である。

1-05 春日の悩み

「わたし、これからどうすれば良いんでしょう……」

春日は目を伏せ、力なく呟く。

貴人はりあえず茶を淹れた。

試作のシューラスクも添える。

魔物討伐で一人だけ気分が悪くなってしまったことを気にしているらしい。

大丈夫だ、たぶんそれが普通。

普通じゃない2人と比べてはいけない。

「及川先輩やマコ先輩みたいに戦えないんです」

「戦わなくて良いって」

「藤村先輩や宮尾くんみたいに、働けるお店もない」

高校1年生の5月だし、アルバイトもしたことがない春日にいきなり働き口を探せというのは難しいだろう。

本来ならば高校3年間と大学の4年間という期間があったはずなのだ。

しかも春日は英語科。

この世界で活かせるというわけでもない。

その上いきなりの異世界召喚で、将来のビジョンなんてそうそう浮かぶはずもない。

一番普通の反応をしているはずの春日だが、周りがおかしすぎて思い悩んでいるようだ。

「貴族に引き取られるまでまだ時間はあるんだし、急ぐことないだろ」

そもそもこの家に引き取られるかということも決まっていないのだ。

「引き取られた貴族の家業を手伝うことになるんじゃないか？」

引き取る方も、視界に入る場所にいたほうが助かるだろうし。

「それが嫌なら……他の職に就くか」

城下町に住むことになるのなら、騎士団に所属か飲食店や販売店。町の一角にある工場地帯で働くのも良いだろう。

この工場地帯は魔動石そのものや魔動石式の道具、紙、木工品などが作られている。

原料となるものはエトラン国内の地方の村などから運ばれてくる。市場や中卸というものは特になく、それぞれ商人が個人で切り盛りしていたり、生産者が直に店に売り込んだりする。

地方でも良いのなら原料の生産という手もあるが。

貴人の中で春日のイメージは衣服系の販売店だ。

布は遠方の村や町から運ばれてきて、それぞれの店舗で衣服などに加工される。

よってそれぞれの店は単なる販売店ではなく、製造も行う。

全体レベルで見ると効率が悪いし、費用は掛かるし、価格の変動が激しいと良いことがない。

しかし店によってかなり特徴が出るので、それはそれで面白い。

「春日は何がしたい？」

「何がしたいって言われても……」

「じゃあ何がしたくない？」

「たたかいたく、ないです」

まあそうだよな。

一番良いのはケーキ屋に引き込むことなんだろうが、自分の店でもないし、そもそも現段階で人が増えてもどうしようもない。

「とりあえず引き取り先が決まるまで、色々見て回ってしてみたいことを探そう。ないならないで条件言ってエディに探してもらってのも手だし」

気落ちした春日の頭を撫でる。

「大丈夫だって」

考えすぎだ。

真琴と足して2でわれればちょうど良さそうである。

春日と別れた後、貴人は調味料試作の昼食を持って、滋郎とエディに合流した。

昼食を食べながら滋郎の開発成果を見る。

「先輩！ 遅いっすよ！」

「悪い」

本日の昼食は魚介系焼き飯だ。

透明の魚介系調味料の試作である。

こちらの料理は煮込みとグリルが主流なので、あえて炒め物を多く作ることになっている。

フライパンはなかったが、パスタ鍋という似た様な鍋を発見したのでそれを購入したのだ。

出世払いで。

本来の用途は炒めるのではなく、軽く火を通し絡めるものらしい。

やはり鉄製の鍋が欲しい。

フライパン、中華なべ、強い火力。

炒め物には必須だ。

「じゃーん！ こっちの試作一号も出来たっすよ」

「万年筆？」

エディが使っていたペンと同じ型だ。

「この世界のペンはインク内蔵型の使い捨てか補充型なんで、日本と一緒なんすけど」

滋郎は誇らしげにペンを掲げる。
テンション高いな。

「じつはこれ、初の魔術式なんです!」

「噛み砕いて話せ」

何だその魔術式って。

この世界の道具は基本的に魔動石を使用する。
もちろん手動式もあるが。

滋郎の言う魔術式というのは、魔動石を使用しないものの総称らしい。

まず、魔法というのは魔記号を使う5属性の攻撃・防御・補助。
魔術というのは魔法とは別もので、使う魔力は同じだが質が違う。
大雑把に言えば5属性に当てはまらないものが魔術である。

魔記号を刻み、魔法を発動させる道具の類は厳密にいうと魔術になるらしい。

つまりこのペンはそういうことだ。

「使用者の魔力を使ってインクが出るんすよ。つまり半永久的に使えるペン! 補充いらす!」

使用魔力も微々たるものらしいので、この世界なら赤ん坊でも使え

る。

「たかがペン、されどペン。初めてにしては中々だと思っくんすよ」

開発開発言ってたからな。

嬉しそうだ。

「これなら今までのペンもそのまま使えるし」

なるほど。

日本から持って来たペンも魔術式にしてしまえば、インク切れにならないわけか。

とは言ってもキイトは筆記用具の類を持っていないのだが。

「あー早く大物作りたいつす」

「あ。もしかしてあの透明の剣もそういうことか？」

騎士団の訓練を見学したときにみた、あの透明の剣。

「ええ、そうです。あれは氷の魔法を組み込んだものですね」

やろうと思えば、魔法で氷の剣を出現させることは出来る。

しかしそれだと戦いにくいので、ああいう魔術式の剣を使うのだそう
うだ。

媒体となる剣に氷の魔記号、刃の魔記号、維持の魔記号などを刻む。

あとは使用の際に魔力を流すだけで良い。

慣れれば魔力を流しつつ、他の魔法を使えるので便利である。

「そうか……良いよな、あれ」

炎の剣とかちよつと憧れる。

「待ってて下さい、先輩！ 俺が作るっす！」

それいつになるんだよ。

「滋郎君ならばすぐに作れるんじゃないでしょうか」

「技術革命王に、俺はなる！！」

「うぜえ」

異様にテンションの高い滋郎を抑えつつ、店に向かった。

1-06 泉

店に着くとイグレッツィオが店内の壁に絵を描いていた。
石造りの町並み。

海と夕日の見える風景。

「すごいっすね、さすがプロ。俺、萌絵しか描けないっす」

「それもすごいと思うけどな」

集中しているようなので挨拶は後回しにして、試作を始める。

「今日はどうするんすか？」

「とりあえずシート焼くか」

シートというのはたまご工房で使っていた天板型のスポンジだ。
ロールケーキの生地なのだが、丸型で抜いて重ねればデコレーションケーキにも出来る。

「んじゃ計量しますね」

「頼むわ」

計量を滋郎に任せ、貴人は買出しに出た。
目的は果物である。

こちらの果物の旬はよくわからないが、アカの実・ヨシの実・ブルーベリー・モモなどが並んでいる。

元の世界にあったものもあれば、見たことのないものもある。見た目が同じでも味が同じとは限らない。

試食のためにも一通り買ってみよう。

ついでに近くのケーキ屋にも寄ってみた。

10種類以上の生ケーキとたくさん焼き菓子。

この店に限らず、生ケーキよりも焼き菓子の種類が多い。

籠の中に焼き菓子を入れたギフト品もあり、焼き菓子に力をいれていることがわかる。

「ギフトか……」

売れるのであれば何か考えないとな。

元の世界にもあった乾燥剤や脱酸素剤の役割を持つものもあり、賞味期限はさほど変わらないだろう。

「その前に焼き菓子か」

マドレーヌが花の型になっているくらいで、他はそんなに変わらないように見える。

エトランはあまり他国の文化が入ってきていないので全体的な種類はそんなに多くない。

定番の商品は早めに試作してみよう。

店の改装が終わったら早めに営業を再開したい。

シートを冷ましている間に、果物を試食してみることにした。
ブルーベリーやモモは見た目通りの味だった。

拳大くらいの緑の実はいスカ味、ただし食感がメロン。
そしてこちらのバナナは中身は一緒なのだが皮は茶色だった。

「……うん、まあ味覚が同じで良かったすよね」

確かに。

味覚が違ったら食べ物の確保が厳しくなっていたかもしれない。

冷めたシートにクリームを塗り、巻く。

ロールケーキである。

これの上にクリームを絞り、フルーツを飾りデコレーションしたロールケーキも作った。

クリームにアカの実を混ぜ込んでみたり、チョコクリームにしてみたり、バリエーションも様々。

カットしたものとロールのままのもの、両方を売り出す。

「普通の白と、アカの実が美味しいです」

「俺はチョコがいいっす」

これは単純に好みの問題だと思うので、出来るだけ種類を並べたい。
あとは売れ行き次第で絞っていいければ良いし、期間限定品にしても良い。

基本は一緒なので試作はしないが、丸型のデコレーションケーキも並べよう。

このシートはタルトや他のケーキにも使うので多めに焼かないといけない。

冷凍保存が出来るので、焼けるときにまとめて焼いておこう。
残りを冷凍庫に入れる。

「え?」

貴人が振り返ると、イグレッツィオが目を丸くしていた。

「何だ?」

「そこ、冷凍庫ですよ?」

冷凍庫を指差して、首を傾げている。

「うん」

当たり前だ。

冷凍保存するのに冷凍庫にいれずにどうするというのだ。

「え?」

「え?」

「……この生地、冷凍保存出来るんっすよ」

見兼ねた滋郎が助け舟を出す。

「ええっ!?!」

何その驚き様。

「冷凍技術はあるのに冷凍保存はしないのか？」

不思議だ。

もしかしたらこいつが知らないだけで他の店ではしてるんじゃないだろうか。

「え、だって、でもそんなことメモには……」

確かにメモには作り方しか書いてなかった。

菓子の基礎の本にも冷凍保存のことは載っていない。

「まさかと思うけど……ケーキ、毎日一から作ってたのか？」

「え、はい」

「……………すごいっすね」

「ありえん。だからこの店だけ種類が少なかったんじゃない？」

「たぶんそうっすね」

「え？ え？」

よくわかっていないのか、イグレッツィオは滋郎と貴人を交互に見ておたおたしている。

「まあいいや。この生地は焼いたあと、冷凍保存出来る。他にも冷凍出来るもんは教えるから」

一人で毎日、よく頑張った。

すごい、すごいようん。

「とりあえず今日は帰るわ。また来る」

お土産兼試食にケーキを持って帰ろう。

シュー、ケーキと来たら次はタルトかパイか……。

そういえばメモにも本にもパイがなかったなと思いながら、2人は帰路についた。



「帰りたい……帰りたいよう……」

膝を抱え、蹲る。

この世界で暮らしていける気がしない。

春日はひとり、泣いていた。

今春日いるのは地下の一室。

室内なのに泉があり木も生えているという不思議なところだ。人も来ないので春日のお気に入りになっている。

「ううゝ……」

泣き言を言ってもどうにもならないことくらいわかっている。
そうは思っているけど、涙が勝手に出てくるのだ。

この世界に馴染めない。

戦うことも出来ないし、かといって働くことも出来ない。
異世界の人の中に入っていくことが、怖い。

どうして皆、入っていけるんだろう。
自分がおかしいのだろうか。

勉強は好きだけど、趣味という趣味はなく、特技もない。
テレビや映画、雑誌は好きだし、買い物も好き。
だけどそれが仕事に繋がるかといえばそうじゃない。

魔法だって先輩達は3つ以上属性がある。
それなのに春日2つ。
それも水と風で、光という貴重な属性でもない。

どうしたら良いのだろう。

春日は溜息を吐いた。
冷たい水に手首を浸す。
気持ちいい。
ちゃぷちゃぷと遊んでいるうちに水底の文字に気が付いた。

「ん……？」

詩だろうか。
興味本位で読み上げてみる。
覚えてたの言語が楽しくて、つい色々読んでしまうのだ。

「えっと……」

『チカラが欲しければ 我を呼べ 我が名は―― 白く気高き――
なり』

「名前、ないのかな」

名前の部分が読み取れないようになっていた。
文字が消されているというか、削り取られているのだろうか。

「名前かあ」

家で飼っている子犬を思い出す。
白いロングコートチワワだ。

「とうか藤花、元気かな」

きゃんきゃんとかわいらしい子犬。

春日がソファに座ると、膝の上に来たがるのだ。

まだ小さいので自力で登ることは出来ず、抱きかかえるのが常だった。

また目が潤む。

帰りたい。

家族も心配しているだろう。

帰れないと説明されたが、どうにかならないだろうか。

宮尾君なら出来そうな気がする。

なんとなくだけど、宮尾君だし。

『帰るために、チカラが欲しい。チカラを下さい。……白く気高き——さん』

何がなく、呟いてみただけだった。

その一言で、何かが起きると思わずに。

驚愕で見開かれた目、そして叫び声。

その声を聞きつけて騎士が、及川が、走る。

そしてその場に駆けつけて来た時見えた光景は——。

人を丸呑み出来そうなほど大きい白い蛇と――――。

1-07 方向性

「フジム！ ジロ！」

部屋に戻ると真琴が慌てた様子で二人の腕を引いた。

「来て！」

一番奥の女子部屋に連れ込まれ、二人はその光景に目を瞠った。

「ぶふっ」

「……～～～ッ！！」

笑いを堪えて滋郎を叩く貴人と、我慢出来ずに噴出す滋郎。

「え、何それ。笑うところ？ 他に反応ないの？」

2人の目に映るもの、それは。

小さな白蛇と楽しそうに戯れる春日と、蛇にびくびくしながらも一緒に戯れようとしている及川。

春日に絡んだ白蛇が動くたび、体を大きくびくつかせるのが面白い。

「いやーあいつよっぽど春日好きなんだな」

健気だよなあ。

貴人は2人に聞こえないように小さく呟く。

「え、そこ！？　そうじゃなくて、春日チャンが白蛇巻いてることに反応しない？」

「あ、そこか」

「ペットっすか？」

「……もういい」

真琴が拗ねた。

「あ、おかえりなさい！」

こちらに気付いた春日が、満開の笑顔で出迎えてくれた。
こんなに明るい春日を見るのは初めてのことである。

「それ、どうしたんだ？」

「地下の泉でもらったんです」

そういえばあったな。

室内に泉があるなんてすごいなと思った覚えがある。

「もらったって誰につすか？」

「えーっと……大きい白蛇なんですけど……精霊らしいです。泉の精霊」

「精霊って白蛇なんだ。イメージと違うな」

「この世界は俺に厳しいっす。ことごとく夢を破壊……」

そんなに落ち込まなくてもいいと思うのだが。

「精霊すべてが蛇ってわけじゃ……。それで泉の精霊にこの子と、精霊の巫女の力っていうのをもらいました」

「へー」

精霊の巫女の力。

よくわからんが、もらって困るものではないだろう。

「精霊の巫女っすか。やっぱ回復系？」

「そうみたい。エディさんが回復系魔術の才能が開花したはずだっ
て」

「おもしろそうっすねー」

滋郎は好奇心満載の顔でメモを取り出す。
いつも持ってるけど、そのメモは一体いつになったらいっぱいになるのだろうか。

「あ、そうだ。フジムもジロも、明日から回復系魔術ってのやることになったから」

「俺らもっすか？」

「そ。春日チャンひとりじゃ寂しいでしょ。少しでも使えた方が便利だし、一緒にやってみようってことになったの」

「すみません……」

落ち込む春日にうろたえる及川が面白い。
こっそり笑う。

「あ、そーだ！ マコ先輩、これこれ！」

「何？」

滋郎が自作のペンを取り出した。
午前中に魔改造していたペンである。

「使用者の魔力を微量ずつ使うタイプで、インクいらすなんすよ。
今日改造したんす」

「へえー！ おもしろい！ 私のもやって！」

真琴は自前の筆箱を漁り、ペンを数本取り出した。
学校で配られた入学記念の万年筆に、女子の支持率が高いカラフルなペンが数本。

いつ見ても何に使うかわからない色のバリエーションだ。

自分の赤と黒しか入っていない筆箱を思い出し、苦笑いする。

「フジムは？」

「俺は筆箱持って来てない」

皆渡り廊下で召喚されたのだが、そのときの持ち物は様々。

貴人は手ぶらで、ポケット中に携帯と財布が入っていたただけだ。
他の4人は何かしら荷物がある。

「あ、これも忘れてた。試作のロールケーキなんだけど、」

「食べる！」

「はえーよ」

珍しく及川も加わり5人揃ってのお茶だ。

騎士団の話や戦争の話など、色々と聞く。

エトランには侵略が始まっていけないが、やはり時間の問題だという。
もしも東隣^{アステ}の国が勝てば侵略はないが、おそらく負けるだろうとい
うのがエトランの見解らしい。

「あ。トーカ！」

白蛇が春日の肩からテーブルの上に移る。

及川がさりげなく距離をとる。

そして白蛇がロールケーキを、食べた。

「……蛇ってケーキ食うんすね」

「変わった蛇だな」

「トーカは一応、魔物に分類されるらしいので……蛇とは違うんじゃないかと……」

魔物がケーキを食べるのも、十分不思議だけだな。

翌日、回復系魔術の授業が始まった。

春日の腕には白蛇が巻きついている。

及川がいなくて良かったと思う。

「あまり得意ではないのですが、一応教えることは出来るので……」

元々回復系魔術の使い手は多くない。

都合がつかなかったのか、回復系魔術の講師もエディのようだ。

「回復系魔術の種類から説明しますね」

回復系魔術はその名の通り、回復する魔術である。

怪我の治癒だったち疲労回復だったり、その内容は様々。

この2種類に関しては“精霊の巫女”と呼ばれる回復系魔術の才能の持ち主でなくても、使い手がいるらしい。

あとは解毒や浄化といったものもある。

解毒の魔術そのまま、毒を解す。

浄化の魔術もそのまま、浄化。

が、この浄化は種類があり、衣服の汚れを落とすものから呪いの解除まで含まれる。

「カスガさんは今後、白の塔で生活してもらうことになります。そこで仕事も与えられます」

「白の塔？」

「はい。城の敷地内にある、その名の通りな白色の塔ですね。精霊の巫女が住まう場所です」

要するに、寮？

「精霊の巫女は外に住むとわりと面倒で、白の塔での生活を推奨しています」

「面倒って何なの？」

「毎日癒してくれと殺到されますよ」

「……………」

「あの……それってわたし、ひとりですか…………？」

不安げにエディを見上げる。

「うっ……そう、なりますね」

春日の攻撃。

エディはダメージを受けた！

などと妄想しつつ、説明を聞き流す。

「私も白の塔に住みたいんだけど」

「マコトさんは精霊の巫女ではないので……」

「特例作って！」

「そんな無茶な！ 白の塔は精霊の巫女と侍女し……か？」

「はいけってーい」

早いな。

しかしこれで全員の方向性が決まったことになる。

「認められるかどうかはわかりませんが、話は通しておきます。それはそうと今後のことですが、共通語と魔法の授業はもう十分ですので、魔術について少し授業して……そうですね、一月後くらいにはそれぞれ後見人を紹介できるかと思います。まあ大体決まってるんですけど」

「決まってるのに一ヶ月？」

「書類とか手続きとか黙らせるとか色々ありまして」

黙らせるのか。

「皆さんエトランの四大公爵家に引き取られることになりますので、不自由はしないと思いますよ」

「それは良かったつす。色々道具開発したいんで援助あてにしてるんすよ」

「才能もあるし、ジローさんの開発は面白そうですね」

道具つくりのための基礎である、魔記号を刻むこと。

これは中々難しいものらしく、滋郎には才能があるという。

「まずは先輩の武器を作りたいっすからね」

「おお、武器ですか。こういうものにする予定ですか？」

エディと滋郎が嬉々として武器の話始める。

回復系魔術の授業はどうした。

1-08 英雄の丘

本日の試作はタルトである。

タルト生地アーモンド生地をいれて焼き、スポンジとカスタードクリームを挟み、フルーツを飾る。

空焼きしてレアチーズを流しても良いな。

同じ生地でクッキーも作れる。

これにはチョコレートクリームを挟もうか。

それからプレートにも利用しよう。

クッキープレートに文字を書くのだ。

お誕生日おめでとう、とか結婚記念日、とかそういうプレートである。

イグレッツィオに確認したところ、文字を書くサービスというのはないので売りにしてみることにした。

サービスといっても有料である。

クッキープレート1枚購入で文字入れ致します、と。

この世界というより国は、^{ノーク}
^{エトラン}無料なものが少ない。

日本でも買い物袋やごみ袋の有料化が進んでいたが、ここではさらにケーキの箱までも有料だ。

紙が高いからかもしれない。

そうなるを持ち込みも多いらしく、中には鍋を持ってくる強者もいるとか。

ちょっと見てみたい。

「大分商品も揃ったな」

壁にも花や風景画が描かれ、明るい雰囲気になり他店と比べ遜色のない程度に種類も増えた。

焼き菓子の陳列も籠などの小道具を使い、ギフトも用意してある。どうにか箱が安く手に入れば、もっと色々出来て良いのだが。

「オープンが楽しみです！」

「客、戻ってくればいいな」

「!？」

元々評判が落ちてこの様なわけで、そう簡単に戻ってくるかどうか。

と、いうわけで試食と売り込みを考えた。

試食は単純に店の前で配るというだけなのだが。

この町のレストランで、料理はおいしいのにデザートはイマイチ、という店をピックアップ。

その店にケーキを売り込むという案である。

それだけで売り上げになるし、そこで評判になれば集客になる。

オープン前に売り込んでおきたいところだ。

候補は現在、滋郎と二人で食べ歩きをしながら探している。

「あ、そうだ。俺明日からちょっと籠りますんで」

候補のレストランから出て、滋郎が弾んだ声で宣言する。
引き籠もり発言って嬉しそうにするものだっただろうか。

「は？ 店どうすんの？」

「先輩に任せるっす！ 俺ちょっと急いで武器作りたいんすよ」

「何で」

「魔物討伐2回目、そろそろらしいっす。先輩が無双する武器をちよちよいと」

ちよちよいとってそんな簡単に出来るものなのか。

「なんでリゲルさん誘えばいいんじゃないっすかね。この人だし、一応女の人だし」

「一応ってお前……でもそうだな。それも良いかもな」

この世界では初デートである。

リゲルが誘いにのってくれば、であるが。

好意の有無はどうであれ、かわいい女の子と2人で出かけるというのはちよつといい気分だ。

戻ったらさっそく誘ってみよう。

「マコも来るのか？」

誘ってみて第一声がそれってどうよ。

「いや二人で行きたいんだけど」

「マコも誘いたいんだが」

「わかった。今回はマコも誘う」

でも次回は誘わない。
何が何でも誘わない。

つうかこれ脈ないよな、完全に。

「いやー何かゴメン！　すごい期待に満ちた目で誘われたから断りにくくて」

確かにあれでは断れまい。

真琴に罪はないと思う。

城下町の大通りを歩きながら、真琴は手を合わせた。

前を行くりゲルは、おぼろげな記憶を頼りに目印を探している。

いつもは連れて来られているらしい。

一体誰に。

その店は何でも、大通りから細い路地に入ったところにある、知人ぞ知る隠れた名店であるという。

メニューはなく、おまかせの料理しか出てこないその店は、デザートがないらしい。

中々好都合である。

日本の飲食店はデザートがない店を探す方が難しいが、こちらでは逆だ。

それがケーキ屋が6店舗もあり成り立っていた理由なのかもしれない。

「この国でデザートは家で寛ぎながら食べる、という人が多い」

なるほど。

道理でイートインの出来るケーキ屋がないわけだ。

人数に余裕があればイートインもしてみたいが、今のところは無理である。

そもそも売上げがないと今の人数から増やすことも出来ない。

ようやく探し当てたその店は、黒い重厚な扉の向こう側。

革張りのソファのある、高級感のある店だ。

「いらっしやいませ、リゲル様」

「いつもの席は空いているか？」

一番奥の仕切られた個室風のソファ席がいつもの席らしい。

「好みの食材や嫌いな食材を言えば考慮してもらえ」

「あ、私、味が濃いものが食べたい」

確かにこの国は薄味だからな。

「じゃあ魚介系で」

「ではそれで頼む」

「かしこまりました」

一礼して、従業員が下がる。

出て来た料理は魚介のトマトクリームスープと塩の効いたフリット。野菜サラダのドレッシングはナッツのペーस्टが入っているように濃厚。

バケットのトーストはガーリックとトマトの酸味が効いている。

「美味しい！ フリット最高……！」

「旨い」

素材は新鮮。

味は濃い目。

特にこのドレッシングはかなり好みだ。

食後にお茶を頂く。

すっきりとした味わいで、消化を助ける効果があるらしい。

「今度滋郎を連れてくるか……」

「それがいいね！」

濃い目の味付けというだけで高ポイントである。

「好評な様で何よりだ。この後はどうする？」

「んー……結構来てるしなあ。リゲルのおすすめは？」

ネタギレのようだ。

「そうだな。町の外になるが、案内したい場所がある」

城下町の正門を出て右に曲がった。

城下町の外に出たのは2回目。

前回は左に曲がり森へ入った。

ゆるやかな丘を上り、見下ろすと城下町が一望出来る。

「おー！」

丘には巣穴のようなものがあり、その横にはアカの実がたくさんあった。

「リゲル、これは？」

巣穴を指差し、尋ねる。

「それは以前話した武器がある祠だ」

なるほど。

その祠は侵入出来ないように結界が張られているようだ。
貴人はまだ結界の魔術を使えないが、知識としては知っている。

「ここは、すべてののはじまりの場所。英雄の生まれし場所」

「英雄？」

「ああ、アカの英雄だ。すべてを、エトランを創った人物。」

すべてを創ったと言われる人。

国を作った人。

「とても。とても素晴らしい人だった」

リゲルが少し悲しそうに微笑む。

リゲルは700年以上生きているけど、英雄はおそらく普通の人間だ。

700年。

それだけ生きていれば数多くの別れを経験しているはずだ。

「私は英雄の意志を継ぐもの。召喚は英雄の意志であり、私の意志」

「そうしなきゃ、いけなかったんでしょ？
別に私達は恨んでないよ」

「……ありがとう」

恨んでいなくても、真琴はきつとつらい。

春日も、及川も。

滋郎は微妙だが。

「なあ、逆召喚って本当に出来ないわけ？」

「……今のところ、出来ない」

「ふーん」

今のところ出来ない、ねえ。

つうことは研究すれば出来るかもしれないってことか？

1109 一歩

「さっきの、どう思う？」

リゲルと別れ、部屋に戻る途中。

真琴が声を潜め唐突に言い出した。
なぜここで。

戻ってからで良くないか。

「何かありそうだな」

「やっぱそう思う？ どうする？ 皆に言う？」

「滋郎には言っておいた方が良さだろ。及川と春日は顔に出る」

「うん、賛成」

そのまま滋郎が籠っている部屋に向かう。

籠る宣言をしてから、仮眠用のベッドのある簡易工房を借りているのだ。

本気で籠るらしく、昨晚は戻って来なかった。

簡易工房は地下にあった。

泉のある部屋の斜め向かい、軽く防音が入っているらしく、音漏れが少ない。

「ジロー！ はかどってる？」

元氣よく真琴が扉を開ける。

ちょうど休憩中だったらしい滋郎と目が合う。

「いらっしゃい。今試作品が出来たとこっす」

作業台の上は乱雑。

工具の類やよくわからないものが散乱している。
ちよつと楽しそうだ。

工作は嫌いじゃない。

「これと、これが先輩の武器の試作品っす。今度外か訓練場で試してみてください」

渡されたのは物差くらいの、筒状の棒が二つ。

「鍛冶屋の人に原型の武器作ってもらってるんで、まだかかるんですよ。特注なんで手間取りそうっす」

特注って一体何を頼んだというのか。

「楽しそうだな」

「楽しいっすよ！先輩もやりましょう！！」

それも良いな。

「そうだな、ちよつとやってみたいかも」

「まじっすか！じゃあ時間取れそうな時来て下さいっす！」

「えー、じゃあ私もやってみようかなあ」

「マコ先輩もやりましょーよ！　楽しいですよ！」

真琴は細かい作業を面倒くさがるのが、大丈夫だろうか。
まあ飽きたら止めれば良いだけの話なのだが。

「あ、そうだ。ジロ、帰る方法ってあると思う？」

「あると思うっす」

「根拠は？」

「ないっす。でも行きがあるなら帰りがあってもおかしくないっす
よね。リゲルさんも何か隠してる感じがするし」

「滋郎もそう思うのか」

「リゲルさんっすか？　そうっすね。でも悪いようにはならないと
思うっす」

「まあ悪意があるようには見えないよね」

確かに悪意はなさそうだ。
罪悪感はあるようだが。

「何にせよ協力体制でいた方が良いっすね。戦争が終われば帰れる
可能性も高くなりそうっす」

一応そのためによれたのだ。
目的を達成しないと、あちらも困るだろう。

そしてやってきました、魔物討伐2回目。

今回は貴人・滋郎・真琴の3人だ。

精霊の巫女となった春日は、討伐の参加が免除となった。

滋郎の作った試作品を預けられているので、今回はきちんと戦わないと。

一応訓練場で少し触ってみたので使い方はわかっている。

前は森の中で見通しが悪かったが、今回は草原。

木がところどころに生えているが、見通しは良い。

遠くでウシ型の魔物の群れが草を食べている。

食べている先から毒沼が広がっているようだ。

「と、いうわけで今回はフビィだ。見ての通り毒をもっているので気をつけるように」

魔物の討伐は、無差別ではない。

攻撃しない限り無害な魔物も多いので、その辺りは無視。

討伐は有害なものに限る。

人を無差別に襲う魔物、作物を荒らす魔物、毒を撒く魔物など。今回はその毒を撒く魔物だ。

「戦闘開始！」

隊長の声掛けに一斉に動く。
四方から囲い、一気に叩くのだ。

全員がポジションにつき、構える。

魔物が周りに気付いたようだがもう遅い。

貴人が魔法を放とうとした、その時。

傍らの木に実がついていることに気が付いた。

「ゆ、ず……?」

形も色も、香りも柚子だ。

その大きさだけが違う。

貴人の知る柚子の2倍ほどの大きさ。

「でっけえな」

味をみたい。

一つもいで噛り付く。

皮は苦く、実は酸っぱい。

そして独特の香り。

「うん、柚子だ」

店には並んでいなかったが、この世界には柚子があるらしい。

森や山は私有地ではないので持って帰っても問題ないと聞いている。

「ラッキー」

じつは柚子、好物である。

焼き魚に絞るのも良し、ゆず系ドリンクも良し。

大量にとってゆずマーマレードにしよう。

などと考えている間に、魔物は絶えていた。

「やべ」

また何もしていない。

翌日。

引き籠もり中の滋郎を引き摺って、例の店へ行った。

案の定滋郎も気に入ったらしく、さっそく交渉開始。

一日限定10食分、デザートの販売込みが決定した。

売れなかったら払い戻しするので、相手に損はない。

そうでないと人気も知名度も何もないケーキ屋は相手にされなかっただろう。

まずは様子見、10食。

もしもこれが完売するのであれば仕入れを増やしてもらえる。

安定した売り上げとなれば払い戻しもなしとなる。

「あのお店でつきり閉めたんだと思ったら、新しい職人さん呼んだのねえ」

このビストロ風のお店は店主である渋いおじさんと奥さん、その娘さんと息子さんの4人でまかなっているらしい。

「若いけど腕は良いのね。美味しいわ」

娘さんは20代後半くらいのスレンダーな美人。

他国に嫁いでいたが最近戻ってきたとか。

あっけらかんと本人が話していた。

息子さんは前回店にいた人である。

素早いし動きも綺麗、営業スマイルも完璧。

女受けしそうで羨ましい。

少なくとも目つき悪い、怖いとは言われたことないだろうな。

「これだけの好条件ならこちらとしては不満もないしね。よろしく頼むよ」

渋い。

口髭も渋いが声も渋い。

「こちらこそ、よろしく願いします」

滋郎と二人で頭を下げる。

オープンはまだ先だが、まずは一歩。

1-10 スパイ調査

店のオープンはまだ決まっていらないが、ビストロへの搬入は決定した。

向こうの担当者である娘さんのメリッサさんと話し合い、5日後の最後の魔物討伐を終えてからということに。

魔物討伐が日を開けた5日後と決まっているのは、魔物の活動期間の都合らしい。

よくわからん。

とにかくオープンの日取りはビストロの様子をみて、タイミングをはかる。

それまではがつり仕込み。

宣伝活動としてエディやリゲルに話しておいた。

こういうことやらしい、という口コミである。

顔が広い二人なのでそこそこ広まるのではと見込んでいる。

紙媒体を使った広告チラシがない世界なので、これが一般的だ。さてうまくいけば良いが。

「三度目の正直って、言うじゃん？」

「言うな」

「フジムさ、3回とも何もしてないよね？」

「そうだな」

「……せっかく武器作ったのにいいいい」

部屋の片隅で嘆く滋郎。

滋郎の作った武器は一度も実践で活躍していない。

貴人の武器だけしか作っていないからだ。

「だからごめんって言ってるだろ。しょうがないじゃん、カボチャがあっただから」

3回目の魔物討伐中、通常の3倍くらいの大きさのカボチャを見つけたのである。

中身もずっしり入っているようで重い。

大きいカボチャは薄味大味なことが多いので、これもその可能性が高い。

しかしまあ煮詰めれば使えるだろうと一つ、持って帰って来たのである。

「フジムの中では重要なんだね、そこ……」

「ホラ、お前カボチャ好きだろ。かぼちゃプリン作るしさ」

「ううっ……！」

「パンプキンパイも作るか？」

「くっ……一生ついていきます、先輩！　なんでカボチャコロッケも！　是非に！」

「早っ！　早いよジロ！」

カボチャの菓子に釣られる男・宮尾滋郎。

真琴がずっとお茶を飲みながら思い出したように言う。

「そういえばジロがフジムに懐いてるのってなんで？　中学時代部活違ったよね？」

貴人は途中で辞めたが野球部、滋郎は文芸部の幽霊部員だった。

もっとも文芸部は幽霊部員しかいないような部活だったが。

バイト先は同じだが、それは高校に入ってからのことである。

「俺が自殺しようとしたとき、先輩に助けられたんすよ」

「うわ、いきなりヘヴィ！」

「やー、先輩いなかったら俺確実に死んでたっす」

「え、フジムが死んだら両親が泣くぞ、みたいなこといったの？」

「まさか」

「むしろお前が死んでも何も変わらないし、無駄死にだろ的な感じっすね」

「……ひどい、ひどいよフジム」

「いや自殺前とか知らねえし。偶然、偶然」

しかもそんなこと言ってない。

だいぶ違う。

滋郎の中でそうなっているのか、ごまかしたのか。

まあどっちでも良いけどな。

「なんにせよ救われたのは確かなんっす」

「あー！ あーあー、わかった。なるほど、うん」

真琴の中で何か閃いたらしい。

何か思い当たることがあったのだろう。

「というわけで先輩！ カボチャプリンとパンプキンパイ、食べたっす！」

「はいはい。ついでに夕飯も作るか。調味料もスパイスしか残ってないしな」

そうなのである。

液体系・ペースト系の調味料はすべて試食した。

なのに残念ながら醤油も味噌も存在せず。

これはもう開発しろってことなのか。

溜息を吐きながらスパイスを開封。

結構種類があるので舐めてみてから考えよう。

色々組み合わせも出来るだろうし、今日は無難に鶏肉のスパイス焼きでも作ろうか。

上手くいけばカレーも作れるかもしれない。

スパイスを種類ごと器に入れる。

一つずつ舐めていく。

何となく食べたことのある味、まったく知らない味、色々だ。

「ん？」

懐かしい風味を感じ、再度舐める。

「違うか……」

どうやら気のせいだったらしい。

残念すぎる。

鶏肉に合いそうなスパイスを数点選び、調合してみる。

無難な味。

下処理をした鶏肉に塗り込み、冷蔵庫で冷やす。

その間に副菜やカボチャ菓子準備も進める。

パンプキンパイはさすがに間に合わない。

今日はカボチャプリンにしよう。

大きい味が薄いカボチャは蒸し焼きにして漉し、鍋で煮詰めた。

面倒だがこうすれば水分がとび、味が濃くなる。

副菜は何にしようか。

せっかくだらスパイス全種類使ってみたいんだよな。

まだ使っていないスパイスを適当に調合していく。

味をみて、合いそうな副菜にしよう。

今日は組み合わせ云々は気にしないでもらいたい。

「あ」

そういうことか。

スパイスは個々の味がしっかりしているが、組み合わせでかなり味が変わるようだ。

日本で手に入るスパイスとはだいぶ違う。

「これは……いいな」

面白くなって来た。

色々実験しよう。

「フジム！ これ！！」

軽く興奮状態の真琴がぶんぶんと手を振り、何かを伝えようとする。わかる、わかるけどわからない。

「先輩！ これ！！」

「真似すんな」

本日の献立は鶏肉のスパイス焼き、野菜炒め、ほうれん草のお浸しもどき、白米、味噌汁もどきである。

「醤油！ あったんすか！」

「スパイスの調合で味噌とソースと醤油は何とかなる」
問題はスパイスな点だ。

粉末なのである。

水で溶かすと薄くなるので、醤油をかける料理が難しい。
刺身に粉末つけて食べるって何か嫌だし。

柚子果汁で溶かしポン酢にするのならいけるかもしれない。

「フジム最高！ 春日チャンとミッチーも喜ぶね！」

「おう。組み合わせを厨房の人に伝えて使ってもらえうように頼んでおく」

春日は一緒に生活しているがまだ帰って来ておらず、及川は騎士団の専用の食堂を利用することになっている。

自分達もそれぞれ別の貴族に引き取られるのなら、各自持っていくたいところだ。

「デザートはカボチャプリンな。パイは明日作るから」
ああでも良かった。

これで食生活はおおむね満足である。

1-11 道具作り

翌日、道具作りの日。

滋郎の箆っている部屋で色々教えてもらい、実際に作ってみようということだ。

真琴と貴人、エディと何故カリゲルもいる。

春日は精霊の巫女として色々修行中らしい。

部外者禁止なのでさすがに真琴はついていくとは言い出さなかった。

「わかりやすいもので説明しますね」

そう言ってエディは滋郎の試作品を取り出す。

貴人が使わなかった筒状のアレだ。

「キイトさんが訓練場で見た透明の剣と同種ですね。……Ⅲ」

筒の先から水の刃が出てくる。

「手元に彫ってあるこの魔記号が、この武器を維持するためのものです」

刃と固定を意味する魔記号などが彫られている。

ただ属性は指定されていない。

属性は自分で指定出来、発動させなくてはいけない。

「この手のタイプは自分の魔力を使います。が、魔記号だけでこの武器を出すよりも消費量は少なくて済む利点があります。もちろん魔動石を使うように改造も出来ますが、そうすると戦闘中は面倒な上、重くなりますからね」

確かに。

魔動石を持ち歩くのは大変そうである。

「次はこちら。魔動石を動力にした一般的なものです」

以前見たランプである。

下部に魔動石入れがあり、そこからエネルギーを抽出、稼動する。

自分の魔力を使うものと違う部分は、エネルギーを抽出する部分の魔記号だけだ。

これは魔法も同じで、魔力が少ない人間が魔力消費の多い魔法を使う場合、魔動石を使って補うことも出来るらしい。

現時点で貴人たち5人には不要な知識であるが。

「基本はこれだけです。簡単です。魔記号を彫る専用のナイフがこれですね」

一見彫刻刀である。

違う部分は習っていない魔記号の羅列。

「大抵のものは魔動石で動きます。魔力で動くものは使い手を選ぶので特注が多いんですよ」

以前魔力が多いのは異世界を渡ったからだと言っていたので、こちらの世界の人はそう多くないのだろう。

「このペンのように魔力の消費が少ないものは使えますけどね」

滋郎が改造した万年筆である。

エディとリゲルも持っているようだ。

「ナイフは高いものでもないし数もあるので、お一人一本ずつ持ち帰って結構ですよ」

有難く頂戴して、さっそく道具作りである。

エディの延々と続く魔動具蒔蓄をBGMに着々と作業を続ける。

衛生面が整っているのも魔動具何だとか。

風呂とかトイレとか、確かにあって良かったよな。

手元に集中していると、真琴に声を掛けられた。

細かい作業が得意ではない真琴は、さっそく飽きてきたようだ。

「フジム、何してんの？」

「いやちよっと実験……よし」

出来上がったものを軽く投げてみた。

魔動石が床に落ち、発光する。

「おーバッチリじゃん」
なるほどなるほど。

彫られた魔記号が自分に適性がなくても稼動することはわかっていた。

家電もどきが良い例だ。

実験したかったのは魔動石に直接彫り込んで大丈夫かどうかだ。
使い捨てで良いのでいちいち器の用意なんで面倒だし。

「防犯に良いかなと思って。店に置こうかと」

ペイントボールとか目くらましとかそういう類。

イグレッツィオは戦闘向きじゃないし、ちょうどよさそうだ。

今のところあの店に強盗が入ることはなさそうであるが。

「何？」

気が付くとエディとリゲルが呆然と貴人を見ていた。

「……いや……その発想は無かったな、と」

「逆に新しい発想だ」

魔動具で真っ先に出てきそうなものだけだな。

「非常用の水とか火とかにもなるな。属性外のものじゃないと意味無いけど」

「良いですね。キイトさんもジローさんと一緒に開発部で働きますんか？」

「いや俺ケーキ屋だし。滋郎はその開発部で働くわけ？」

「臨時職員って形で良いのでって誘われてるんっす」

「おー、いいじゃん。お前向きだな」

「なんで兼業考えてるっす。あと他にも色々やりたいこともあるっすよ」

「まあケーキ屋は俺一人でも良いし、好きなことやれよ」

忙しくなったら人員を増やせば良いし、滋郎は滋郎でやりたいことをやるべきだ。

「やりたいことは全部やるんで、ケーキ屋でももちろん働きますよ」
見た目に反して活動的だ。

いや元の世界でもやたら活動的だったけど。
インドアな部分で。

「そろそろメシ作ってくる」

真琴リクエストのオムライスだ。

「見学しても良いか？」

意外だ。

料理に興味があるとは思わなかった。

リゲルと共に厨房へ。

材料は頼んでいたので揃っている。

チキンライスの味付けはトマトソース。

それにスパイスを混ぜた。

この世界にケチャップはたぶんない。

トマトもあってスパイスもあるし、似た様なものは作れるだろうが
頻繁に使うものではないので作っていないのだ。

たまごは半熟ふわふわを被せ、最後にスパイス多目のトマトソース
をかける。

サラダとスープを添えれば出来上がり。

「手際が良いな」

「元の世界で働いてたからな」

オムライスはたまご工房の人気メニューだ。

休日の昼間など何食作っていたことか。

「そういえばリゲルって普段何してんの？」

「普段……？ 来客の対応とか、書類整理とか……」

何か魔女っぽくない。

「魔法も魔術も得意だ。この国で一番の実力だと自負している。だ
がそれと普段の仕事とは結びつかない」

魔法を使う仕事、魔術を使う仕事、色々あるだろうがそれ全部を一
人でまかなうことは出来ない。

何人分か出来たとして、あまりやりすぎるとあぶれる人間も出てく

るだろう。

「地位はあるが引退しているというか……相談役、というのか」
引退。

むしろ退職。

確かに定年退職してる年齢ではあるよな。

見た目はともかく。

リゲルを見る。

同じ年頃の女にしか見えない。

銀色の髪がさらりと流れ、綺麗だ。

猫目で美人系。

いいな。

欲しい。

「リゲルは今まで独身？」

現在独身なのは知っているが、今までがそうであったのかはわからない。

700年以上生きていれば結婚したことが数回あったもおかしくない。

「伴侶を持ったことはない。いずれ死に別かれるとわかっていて、一緒になろうとは思えない。それに……大抵は赤ん坊から知っている相手だぞ？　意識出来るわけもない」

「あーそうか、犯罪っぽいわ」

下手すれば相手の両親、祖父母も赤ん坊の頃から知っているパターンもあると。

懇意にしていればなおさら会う機会もあっただろうし。

「それでいうとき、俺は？」

「は？」

「俺の赤ん坊時代は知らないだろ？」

「知らない、が……」

意図をわかりかねているのか、迷惑しているのか。

返答が鈍い。

「だから、俺を好きになれば良いんじゃないかな」
リゲルの手を握る。

細くてさらさらしている。

「死に別れるって、は年月は違えど誰でも一緒じゃん」
リゲルの顔が若干赤い。

良い兆候だ。

「俺を意識して、俺を好きになって」
その指先にキスしてみた。

1-12 引越し

結果。

フラれました。

とはいっても顔は赤いまま、「何を言ってるんだ!」と怒鳴られただけだ。

フラれたというより相手にされなかったというべきか。しかし意識はしているようなので、今はこれで良い。今は、ね。

「フジム、何あくどい顔して笑ってんの?」

「あくどい顔って」

「何かサデイスティック?」

「変態か」

気を取り直して。

いよいよ貴族に引き取られる日である。

そのことでエディが部屋を訪ねてきた。

「それでは説明致します」

小さく咳払いし、話を始める。

「まずミナミさんはフレネス公爵家を後見として、白の塔にて生活して頂きます」

白の塔については以前聞いていた。

てっきり貴族の後見はないものと思っていたのだが。

フレネス公爵夫人は結婚前、精霊の巫女として白の塔で暮らしてい

たらしく、是非にということだ。

春日にとって悪い話ではないだろう。

「マコトさんはランル公爵家です。騎士団の訓練で顔を合わせてると思いますが」

真琴がたまに訓練に参加している王宮騎士団には、女性騎士が少数存在する。

その中で一番の実力者であるシャナル・ランルが、真琴を是非と父親である当主に頼んだようだ。

真琴はランル公爵家の屋敷には住まず、春日と共に今日から白の塔に住むことになっている。

表向きは侍女なのだが、騎士団にも所属し、護衛も勤めるという。

「そして最後にジローさんとキイトさん。お二人はわがカネル公爵家です」

「え、2人一緒なの？」

「まあ色々あります」

聞き返した真琴にエディは苦笑いで答える。

その様子を見て、貴人は唯一戦っていない自分が問題だったのだらうなと中りをつけた。

過ぎたことはどうしようもないが。

さてそんなわけで、正式な名前はキイト・カネルとなったわけだ。年齢的に貴人は三男でジローは四男。

領地は城下町より大分遠くにあるらしいが、住まいは今エディが住んでいる屋敷に居候である。

城下町の一角にある貴族の多い屋敷街。

2人とも仕事があるので考慮してくれたのだろう。

貴人はケーキ屋だけだが、滋郎は結局ケーキ屋と開発部、他にも色々やることがあるので城下町にいる方が都合が良い。

それぞれの住居へ、今から引越した。

借りていた部屋は念入りに清掃され、客室になるのだろう。

「それでは屋敷に案内します」

エディに連れられ、城下町を歩く。

今ではすっかり見慣れた風景。

城を出てすぐに屋敷があり、エディと滋郎には便利そうだ。

残念ながら店からは結構距離がある。

歩けない距離ではないのかまわれないが、自転車とか原付とかあれば便利なのに。

門を潜れば庭園。

石畳を歩き、玄関へ向かう。

小さな池とその周りには背の低い植物が生えている。

花はあまりなく、華やかというより青々しい感じた。

「門番はいません。ですが不審者が入り込めば魔力が感知されるのでわかる仕組みです」

人間すべてが魔力を持っているので生体反応と同じようなものか。

「この屋敷には私と、住み込みの使用人が3人とその子供が二人いるだけです」

言いながら扉を開ける。

ちよっとぼっちゃりとしたかわいらしいメイドが出迎えてくれた。

「おかえりなさいませ、エディ坊ちゃま」

「坊ちゃま……ッ」

噴出さないよう堪える貴人と笑う滋郎。

「坊ちゃまって！」

「マチルダ、坊ちゃまはやめて欲しいと……」

「ですが坊ちゃまは坊ちゃまですから。はじめまして、メイドのマチルダです。キイト様、ジロー様、よろしく願います」

「キイトです。よろしく願います」

「ジローです。よろしく願います」

揃って頭を下げる。

「まあまあこれはご丁寧に。お部屋に案内いたします、こちらへどうぞ」

若く見えるが言動がちょっとおばちゃんっぽい。

じつは若くないのかもしれないが、聞くのは失礼だろう。

やめておこう。

「右がキイト様、左がジロー様のお部屋です。荷物を置いたら屋敷内の案内をいたします」

部屋は城で借りていた部屋と同じような感じだ。

さすがに一部屋だが、かなり広い。

扉近くにテーブルと椅子、奥にパーテーションがありベッドがある。

美術品の類はない。

椅子の上に荷物を置いて、部屋を出た。

トイレや風呂、食堂などの場所を聞き、使い方などの説明を聞く。

一応食事の時間は決まっているが、事前に伝えておくことでずらしてもらうことも可能。

風呂も声を掛ければいつでも使える。

勿論非常識な時間に使うつもりはないが。

この屋敷の主はエディなので特に挨拶もなし。

当主であるエディの父親は領地にいるため、そちらの挨拶は見送り。それで良いのか疑問に思ったが、エディの父親はそういうことを気にしない変り種のようなだ。

納得。

そもそも遠いのでエディも仕事があるしで連れて行けないとのこと。

食事はエディの計らいでスパイスや調味料を使ってくれるらしい。

ありがたい。

マチルダの母親のメイサが料理人で、父親のヨハンは執事。

一家で使用人で、マチルダの娘と息子もこの屋敷に住んでいる。

旦那は早くに亡くしたらしい。

元々領地の屋敷に勤めていたらしいが、娘の学校のためにこちらに
来たという。

何でも有名な女子学校があるらしい。

学生向けのケーキも考えるか。

「あ、言い忘れてましたが、貴族には騎士に属する義務があります。
本職がある場合、臨時の騎士という扱いですが」

「は？」

「お二人は討伐隊の所属になります。一定期間ごと、その期間に人
手が足りなくなった場合に呼び出されます。所在地出現地次第なの
でその半年に10回出勤する人もいれば0回の人もあります。ちなみ
に私は長男ですので、免除です」

殺意が湧いた。

1-1 qu 会議

会議室に宰相と魔女、それから四大公爵家の代表者が集まった。

魔術のカネル。

武力のランル。

人脈のフレネス。

資産のロア。

エディことエドワード・カネルはカネル家次期当主としてこの会議に参加する。

現当主の父親はこの会議、というより救世主召喚すべてに関して面倒臭がり、引き籠もっている。

おそら午前中のこの時間は惰眠を貪っていることだろう。

救世主云々に関して、というよりほぼすべてなのだが、カネル家の実権はエディが握っている。

「さてそれでは、改めて救世主と共にこの世界にやって来た4人の後見を頼みたい」

リゲルの言葉に真っ先に反応したのは、ランルだ。

「マコト・サワラとジロー・ミヤオはランル家が責任を持って保護しよう」

やはりか。

魔物討伐で先陣を切った二人だ。

強い人間が好きなランルらしい選択。

しかし個人としてもカネル家としてもそれはまずい。

四大公爵家とは名ばかりで、実際に権力を持っているのはカネル家だ。

続いてランル家という具合だ。

権力云々に固執したくはないが、魔術の研究にかなりの国家予算を割いているので仕方が無い。

もしもランル家のカネル家の上を行ってしまえばその予算は削られ、騎士団に持つていかれることは明白。

それだけは避けねばなるまい。

予算に関しては譲れない。

「せっかく公爵家も四家なのです、一家に一人保護すれば良いではありませんか。ジロー・ミヤオはカネル家が保護します」

「私もそう思います。我がフレネス家はミナミ・カスガを保護しましょう。妻は元々精霊の巫女ですから、その方がミナミ・カスガも助かるでしょう」

ランルは悔しそうに顔を歪め、睨んでくる。

これだから単細胞は。

「それではロア家にキイト・フジムラということではよろしいか？」

「……まあ、仕方ないでしょう」

渋々といった風に了承する。

予想通りの反応だ。

「不服ならキイト・フジムラもカネル家で保護しましょうか」

ロア家は四家の中で一番資産が潤沢だ。

税で潤い、商売で潤い、何より出費にも煩い。

つまり無駄な人員など要らない、とそう考えるはずだ。

今回召喚された4人は使用人として引き取るのではない。

むしろ優遇しなければならず、本人が希望すれば大きな出費もある。

ロア家がそれを厭わないはずがない。

「まあ、当方としても、それは助かりますが」

「ジロー・ミヤオとキイト・フジムラは仲が良いようですから、一緒だと知れば喜ぶでしょうし」

「カネル家がキイト・フジムラを保護するのならば、ジロー・ミヤオはランル家が……！」

「何を言っているのです。二人が一緒だと喜ぶだろうと言っているのに。それにもう一人というならばキイト・フジムラを保護するのが筋でしょう」

「くっ……」

「決まったな。キイト・フジムラとジロー・ミヤオはカネル家だ」溜息を吐き、リゲルがどうでも良さそうに宣言する。

個人の権力は持つが、家族はなく、公爵家でもないリゲルにはあまり関心のない話なのだろう。

しかし、当初の予定通り、二人を確保出来て良かった。

キイト・フジムラが魔物討伐で活躍しなかったおかげである。

エディはひっそりと笑った。

2-01 デート

キイト・カネルになって数日。

ようやくリゲルとデートに扱ぎ付けた。

マコが仕事で予定が合わず、偶然2人になっただけであるが。

前回同様ビストロで食事することになったのだが、今回はアルコール込みだ。

この国では16歳は成人なので、アルコールも注文できる。

ボードに書かれているおすすめ食材の中から好きなものを選ぶ。

今回はピグウという獣肉をアルコールのつまみに合うように注文した。

濃い目の煮込み料理に薄くスライスされたバケットのようなもの。

浸したあとハーブを乗せて食べるらしい。

アルコールはアカの実のワイン。

酸味があり軽い口当たりで飲みやすい。

「店はどうだ？」

「ぼちぼちかな」

店の売り上げは3人分の給料を十分に払えるくらいとぼちぼちだ。

店の純利益分はほとんどないが、給料が出るだけ上々である。

「まあ少しずつ客足は増えてるかな」

前に来ていた人が戻って来たり、この店から流れて来たり。

順調である。

「それは良かった。マコとミナミも問題なく過ごしているよ……あ
あ、ワインのおかわりはどうだ？」

そうか。

二人とも何もなく何よりだ。

特にマコの侍女なんて不安すぎるからな。

「いや、そろそろやめておく。明日は討伐隊に参加しないといけな
いから」

そう。

初の臨時の討伐隊参加である。

登録されて即とはどういうことか。

ジローの呪いか。

「魔物討伐か。明日はどこに？」

「あー……確か西つってたかなあ。ピグウ討伐だっさ」

「ピグウか。となると……また近いうちに食べられるな」

「食べられる？」

「ピグウが大量発生すると討伐隊が組まれるんだ。群れは危険だからな」

草食動物だし、むやみに攻撃してくることはない。

ただ1匹に手を出すと群れで襲ってくる。

攻撃は単純だが力が強いこと、数が多いことがネック。

慣れていないと大変だろう。

「量が多すぎるからその後食堂なんか配布されるんだ。それ目当てで一般人が暴走しないように。まあ一般人に被害が出ないように取られた対策だ」

なるほど。

個人が狩りに行って負傷者が出ないように、か。

ピグウは繁殖率が高いため、よく大量発生するらしく、よく臨時の討伐隊が組まれるようだ。

ピグウの好物でもあるアカの実も、一年に何度も収穫出来る。

成長が異様に早いのは、魔力の影響ではないかといわれているが、まだ判明していない。

個人的には、この世界の食べ物と元の世界の食べ物で違うものは、魔力の影響があるんじゃないかと思う。

その証拠に同じ食べ物を食べても変化がないが、違う食べ物を食べると微量ながら魔力が回復しているように感じるのだ。

「せっかくだからな、デザートプレート頼もうか。キイトは？」
「俺は良いわ」

リゲルがデザートプレートを注文する。

デザートプレートは日替わりで、プチケーキを2種類とアイス、果物とソースを添えたものだ。

今日はシューとチーズケーキでアカの実のソースと季節の果物を添えてある。

これは意外と人気があり、最初こそぎりぎり10、といった具合だったけど、最近では20、30と出るようになった。

ありがたい。

美味しそうに食べるリゲルを見て癒される。

ああかわいい。

しかしあれだ。

髪が長くて邪魔なのか、耳の辺りで押さえる。

その仕草も食事の時に結ぶ仕草もどっちも良いよな。

項も良い。うん。

「リゲルさん、お久しぶりです」

「ターシャ」

ビストロの女性店員が食べ終わる頃を見計らい、近付いて来た。

「お元気そうで何より。……ちょっと色々あって、戻って来ちゃいました」

「そうか」

「ふふ、やっぱり実家は良いですね。これからはもっとお店に来てくださいね!」

どうやら顔見知りらしい。

それはそうか。

元々この店はリゲルの紹介だ。

「ああ、また来る」

「ところで、お二人はどういうご関係ですか？」

「え……」

リゲルが言い淀む。

珍しいな、即答しそうなのに。

「恋人候補」

「へー！ そうなんですか！ いいなあ、青春だなあ」

「ちよっ……！」

しれっと答えてみると、リゲルが慌てだした。

何故。

嘘は言っていない。

「俺が今一方的に口説いてるところですけどね」

「がんばってね！」

「勿論」

「……………」

恥ずかしかったのか、顔が赤いまま、睨みつけてくる。
全然怖くないが。

「そろそろ恋人に昇格ってどう？」

そろそろ何もまだデート1回目ですが。

「……帰る。明日は早いだろう」

残念。

しかし拒否されなかったので良しとする。

耳まで赤いリゲルを追い、店を出た。

ツケが通用するって良いな。

「リゲル、送る」

「良い。すぐそこだ」

「そういう問題じゃないから」

強引に手を取り、そのまま繋いだ。
指を絡める。

「戦況はどう？」

「芳しくない」

せっかく手を繋いでいるというのに、色気のない話題を出してしまった。

「戦場に行くのは本当に及川だけ？」

「……ああ」

「残り4人は何のためによばれたわけ？」

「救世主はひとりだ。巻き込んで申し訳ないと……」

「そう言えって、英雄に言われた？」

リゲルがびくりと震え、手を払おうとした。

させないけど。

「5人、必要なんじゃないの？」

リゲルが俺を見詰める。

会話の内容がこれじゃなかったら良い雰囲気を持っていけたのになあ。

「正直に話してくれれば、協力できるかもよ？」
揺らいだ。

キイトはそれに気付いていないふりをしながら、優しく髪を撫でた。
「悪いようにはされないってわかってるから。リゲルを、信用してる」

眉をきゅっと寄せ、目を瞑る。

その眉間に唇を寄せた。

「今すぐじゃなくて良い。マコもジロも、正直に話せば協力してくれると思う」

しかしこんなにわかりやすくてよく国の要としてやっていけてたな。それほど平和だったってことか。

「いずれ、話す。今は、まだ……」

「待ってる」

そのまま無言で城まで辿り着いた。
ゆっくりと手を解く。

「また、誘うから」
リゲルが小さく頷いた。

2-02 走竜

さて、ピグウ討伐である。

前回とメンバーも違い、初めてみる顔ばかりだ。

ジローとは時期をずらしてもらった。

三人しかいないので、一気に二人抜けると店が回らなくなる。

今までの三回は近場だったので徒歩だった。

しかし今回のピグウの目撃場所までは少し距離があり、移動は走竜ランドラという移動用の魔物を使う。

この魔物は草食でおとなしく、従順ということで好まれて使われているようだ。

一応二人乗りまでいけるのだが、今回はピグウも乗せることになるので全員一人で乗る。

実はかなり楽しみにしていた。

ジローほど漫画やアニメに興味はないが、小学校の時はそれなりにゲームをしていたこともある。

飛ばないとはいえ、ドラゴンである。

番号札を受け取り、走竜ランドラを探す。

61番。

それが今回キイトが乗る走竜ランドラの番号だ。

番号順に並んでいるのですねに見つかった。

片目に刃物傷がある。

「大きな」

大きいと言っても馬くらいだろうか。

馬よりもゴツイので大きく見える。

そつと手を伸ばすと、威嚇された。
撫でたかったのに。

大人しいと聞いていたのだが、どうも違うらしい。
窮地に立たされているのでなければ、魔物は自分より強いものに逆
らわない。

要するに強いことをわからせれば良いのである。

「よし」

魔力を開放してみた。

人間版の威嚇である。

走竜は小さく唸り、その場に伏せた。

「勝った」

大人気ないが、ようやく撫でることが出来た。

鱗に覆われた緑の体はごつごつとしている。

鱗なのに滑らかではないのが不思議だ。

「おー」

感動。

帰ったらジローに自慢しよう。

「さあ行くか」

61番を連れて城門前に集合した。

何か視線を感じるのは気のせいかな？

気のせいじゃないな。

かなり見られてる。

口開いてますけど。

走竜ランドラに乗って小一時間。

ピグウは農村近くの小高い丘に集まってアカの実を食い散らかして
いた。

騎士約20人に対しピグウは約50。

一人頭2か3つてことか。

一斉に囲んで、一斉に叩くらしい。

何て安直な作戦。

作戦といえるのか？

ピグウは単純な動きしかないし、一匹に手を出すと他も一斉に向かつて来るので一気に叩いた方が安全とのこと。

キイトはジロー印の武器を腰に下げ、あとは借り物の革の鎧で軽装備だ。

重い騎士鎧を着ると動ける自信がない。

「今までと違い、一人前としてここにいるんだ。しっかり戦えよ。」

今回はピグウ討伐だし危険は少ないと思うが」

隊長から告げられ、頷く。

今まで戦闘に参加していないので言われて当然だ。

だがしかし、笑いながらこちらを見ている騎士たちは気に食わない。

顔を覚えておこう。

走竜^{ランドラ}たちを一部に集め、騎士だけがピグウを囲む。

ピグウは食用になるため、丸焼きの恐れがある炎の魔法などの攻撃は禁止されている。

そのため物理攻撃か、刃状の魔法など、出来るだけ死体に損傷がないものでないといけないのだ。

キイトの武器は条件に合っている。

武器を手にも、構える。

「3」

風の刃が出現し、剣が出来上がる。

これで斬れば良いわけだ。

もちろん魔法を使っても良いのだが、人数が多いし外すと面倒である。

隊長が一発目、軽い魔法を打ち込むと、驚いたピグウたちが散り散

りに突進してくる。

それをバサバサと斬り捨てる、ただそれだけ。

特に何の感慨もなく、向かって来たピグウを斬りつけた。
要は屠畜。

もちろん好んでやりたいことではないが。

それにしてもジローの作った武器は軽い。

刃の部分が魔法なので当たり前といえば当たり前だ。

おかげで片手で軽々と操作出来て、かなり助かる。

他の騎士が持っているような剣は、確実に両手持ちになるだろう。
片手で持つとブレる。

笑っていた騎士に何か仕掛けられるのではと思っていたが、そんなことはなく。

非常にあっさりとする意味初の魔物討伐は終了した。

後は血抜きしたピグウを走竜ランドラに乗せて帰るだけだ。

このピグウは一番近い農村と、城下町などで配布される。

きっと騎士の宿舎ではピグウ料理が振舞われるだろう。

「ようやく！　ようやく使ってくれたんすね！」

屋敷に戻ると、ハイテンションなジローが部屋を訪れた。

「おー、滋郎、ありがとな。軽いから助かったわ」

「ふ、ふはははは！　もう先輩のためなら何でも作るっす！　参考になりそうな魔術書選んで来ましたから何でもリクエストしてほしいっす！　無双しましょう、無双！」

ジローがどさりと本を積み上げる。

つうかどんだけ持って来てんの。

その中の一冊をぺらぺらと捲る。

時の魔術とか空間魔術とか飛空魔術とか中々面白そうだ。

斜め読みだし詳しくはわからないが、猫型ロボットの道具とか再現

出来そうだと。

「まあそのうち読むけどさ……俺今欲しいものがあるんだよね」

「え？ 何すか？」

「電気」

「え？」

「電気」

「……あ？」

ジローが武器防具関係の開発のことを言っているのはわかっている。だがそこはあえて空気を読まない。

今一番欲しいものは電気だ、まずそれを開発してほしい。

電気といっても電気そのものが欲しいわけではなく、単純に魔動石の補充が面倒、それだけだ。

「ええー……電気って……電線引いたり家電作ったり……？」

「それなんだけどさ。魔動石を魔力に変換って出来ないわけ？」

「え？」

「魔法使う時は魔力使うだろ？ 魔動具使う時は魔動石。似たようなもんじゃん？」

「その発想はなかった……ッ！」

ジローは一人ぶつぶつと呟き始めた。

おそらく何か考えているのだろうと放置することにし、マチルダにお茶を貰う。

「ん……魔動石の魔力化、出来そうっす！」

「おー」

「電線ならぬ動線か……中継作って飛ばす方法を考えた方が早い
か……」

「おー」

「どっちにしろ大掛かりになるなあ。エディさんに企画書出してみ
るっす！」

「おー、期待してる」

魔動石補充本^{マジ}気面倒臭い。

2-03 家

口コミからか客も増え、リピーターもじわじわついてきた今日この頃。

壁絵に反応があるとイグレッツィオのテンションがあがる。

それを見てお客さんがちよつとひく。

うん、店は今日も平和です。

「あ、グレッツ。今日はデートだからさくつと仕事終わらせたい」
そう宣言して、仕込みに集中。

昼頃開店し、夜早めに閉店するので、営業時間は日本の一般的な店に比べて短い。

この世界ではどの店でも大体そうだ。

24時間営業の店は今のところ存在しないし、全体的に労働時間が短い。

「つうわけで、閉店したら上がって良いか？」

「はい。仕込みに問題なければ大丈夫です」

仕込みは問題なし。

元々余裕を持って仕込んでいるし、仕上げは朝にやっているので構わない。

店側の清掃関連は、イグレッツィオが担当している。

ジローとキイトが厨房の清掃だ。

仕込みは2人が担当しつつ、イグレッツィオにも少しずつ教えているところで、いずれは厨房に入ってもらい、接客は接客で人員を増やしたい。

そろそろもう一人雇っても良いんじゃないか、と話し合い中。

販売メインで簡単な製造補助もしてもらう、というのが今の希望である。

それにジローは城の仕事もあるので、キイトの休みの時や仕事量の多い時にしか出勤しないのだ。

2. 5人はさすがに少ない。

厨房の片付けは早めに終わらせ、閉店してすぐにビストロに向かった。

ターシャに奥の席へ通される。

「今日は？」

「リゲルとデート」

商品の搬入などでターシャとは度々顔を合わせており、今では色々と雑談する仲になっている。

特にリゲルに関してよく話す。

お勧めのデートスポットや人気のあるプレゼント、城下町の流行などを教えてもらっている。

あまり活かせていないのが残念だ。

「どう？ 上手くいってる？」

「ぼちぼちかな。デートには応じてくれるようになったし」

今回リゲルを誘ったとき、マコトも誘いたい、と言わなかったのだ。これは一歩進んだのではないかと、そう思っている。

実際のところ、マコトが休みでないことを知っていて言わなかった可能性もあるのだが。

「そろそろこう、決定的な一歩が欲しいわよね。やっぱりプレゼント？」

花や宝石、小物などの流行に話題は移り、しばらくしてからリゲルがやって来た。

「すまない、遅くなった」

「いや、大丈夫。忙しかったのか？」

「ああ……」

向かいに座るとターシャが飲み物を運んで来た。

微発泡のベリージュース。

食べ物を注文し、乾杯。

「ピグウ討伐はどうだった？」

「ピグウはまあ特に何もなかったかな。あ、走竜ランドラに初めて乗ったんだけど、良いな」

「そうか。走竜ランドラは従順で扱いやすいからな。、やはり人気がある。これから接する機会はあるだろう」

「俺には最初、反抗的だったけどな。警戒してただけかもしれないけど」

「警戒はしないと思うが……。城の走竜ランドラは人によく懐いている」

「俺がよっぽど胡散臭かったのか……」
ちよつと落ち込む。

もしかしたら異世界人だから、ということかもしれない。

ジローランドラが走竜に乗ったら聞いてみよう。

香ばしいチキングリルにさくつとしたオニオンフライ。

クリーミーなマッシュポテト、具沢山トマトスープ。

食事をしつつ、城に残ったメンバーの近況や戦況などを聞く。

大きな変化はないようだ。

「キイトは最近、何かあるか？」

「そうだなあ、今は紙をもっと安く手に入れたらと思うてるんだけどさ」

「紙？」

「お菓子を包むときに使う、柄をつけた紙っていうか……」

紙が安くなれば、厚紙で出来た箱にケーキを入れるということも出来る。

どのケーキ屋もあまり紙やフィルムを使っていないので、崩れやすいのだ。

消費者側もそれが当然だと思っていて気にしていないが、やはり崩

れにくい方が良い。

「紙か……紙を使うことがあまりないから、生産量も少ない」

「紙の使用が増えれば安くなる？」

「あるいは」

「そうだな……紙と言えば本に包装紙にノートに……」

そもそもティッシュがない世界だ。

ティッシュの代わりに布を使い、洗ってまた使う。

布も安いものではないが、使い捨てではないのでどの家庭にも必ずある。

城の書類は紙だったが、重要ではないものはボードだった。

城でさえそうなのだから一般家庭ではますます紙を使っていないだろう。

「本ねえ」

「魔術師は本をよく持っているがな。そもそも本は高価だから貴族くらいしか手が出せない」

専門書は読む人を選ぶ。

小説や絵本、漫画なんかは幅広く好まれるだろうが、そもそも低価格でないと広まっていかないだろう。

「どうしたもんか」

何をするにも資金が必要か。

世知辛い。

ここはエディに集るしかないのか……。

「本が高いのは書き写す労力が掛かるから、というのもある」

書き写す労力。

すなわち手書き？

「写す魔術はない？」

「なくはない。ただ魔力をかなり使うので好まれないといったところか」

なるほど。

魔術を使うくらいなら手作業の方が良いと。

部屋にある魔術書もおそらく手書きなのだろう。

「珍しい魔術だからな。城の魔術書にも載っているかどうか……家に戻ればあると思うが」

「家？」

「ああ。私の家だ。隣国リダインとの国境に近い山にある」

ずっと城にいるように見えたが、違ったのか。

キイトの考えが透けて見えたのか、リゲルが付け足す。

「今は城での仕事が多くて城内に部屋を借りているが、普段は山の家に住んでいる。そうだな、戦争が終われば戻らと思うが」

「いいな、行ってみたい。リゲルの家」

「私の家に？」

首を傾げるリゲル。

「そう。ああ、魔術書を貸してくれると嬉しいんだけど取ってつけたような理由に苦笑いだ。」

「まあいいか。珍しい食材もあるかもしれない……。そろそろ魔動石の入れ替えに帰らないといけないと思っていたしな。今度の定休日で良いか？」

「もちろん」

リゲルの言葉に上機嫌に頷く。

こうしてリゲルのお宅訪問が決定したのである。

2-04 緊急魔物討伐

早朝急に城からの遣いがやって来た。

目を擦りながら集合場所である城の広場まで歩く。

走竜ランドラの番号札を受け取り、竜舎へ向かう。

またもや61番。

「おー、よろしくな」

ぽすぽすと撫でると、小さく鳴いた。

「これも何かの縁ってことで、お前は今日からマサムネな」

心なしか嬉しそうに鳴き、キイトの手に擦り寄る。

おっと和んでいる場合ではない。

一応緊急討伐なんだった。

緊急と言いつつも、ちゃっかりおやつを持って来る余裕はあったわけだが。

城から南西の方角に、トープという飛行型魔物の大群が現れた。

この魔物はすぐ移動するので、目撃次第早く討伐するようにしているという。

害がなければ放っておくのだが、この魔物は肉食。

食い尽くすまで獲物の上空を飛び回る。

この魔物に滅ぼされた村もあるというから、中々危険なのだ。

救いなのは空腹時と正当防衛でしか殺生を行わないところか。

そう考えると悪い魔物ではないのだが、やはり人間自分たちの身はかわいい。

仕方がないことなのだろう。

走竜ランドラに乗り、目撃場所へ急ぐ。

臨時であるキイトは見張り役で、目撃場所付近に一般人や他の魔物が入り込まないように警備する。

森中央の上空に、旋回している魔物が見える。

暗いオレンジ色の大きな魔物。

コウモリのような羽にトゲがあり、漫画に出てきそうだと的外れな感想を抱く。

旋回している魔物は見張り役で、その下は食事中で、交代する瞬間を狙うらしい。

「変わった形の武器だなー」

「ああ、これ？ まあ、そうだな」

突然騎士の一人に話しかけられた。

見張り役って暢気なんだな。

討伐に関係ない話を振られるとは思っていなかった。

「これはこつちが刃で、こつちが銃……放出になってる」

この世界に銃はない。

弓はかろうじてあるが、放出系の魔法があるせいか飛び道具をあまり見ないのだ。

元々銃剣なんてゲーム内でしか見たことがなかったが、銃がない世界ではこの武器はもっと珍しいだろう。

「へえー。便利そうだねー、オーダーメイド？」

「あー……眼鏡の……」

何と言えば良いのか。

自分から召喚されたなんていうと馬鹿みたいだし、ジローとこの騎士が面識があるかどうかもわからない。

「あ。開発の臨時職員の眼鏡に作ってもらった」

開発の臨時職員はジロー一人だ。

ジローを知らなくてもその説明で何となく理解してもらえらるだろう。

「なるほどー、ね、あとでそれ貸して？ 使ってみたい」

「いいけど、たぶん無理だと思う」

「……どういうこと？」

説明しかけたその時、旋回していた魔物が降下し始めた。
緊張感が走る。

皆無言で、その様子を見守る。

金属音が響き、悲鳴や怒号、一気に騒がしくなる。
始まったのか。

降下してしまえば木々が邪魔で、その様子は窺えない。

見張りは相変わらず他の侵入を許さないことが仕事で、トープと直接対決はなく。

逃げる時は空を飛ぶので、追いかける術もない。

負傷したトープが羽ばたき、空を逃げる。

放出系の魔法が飛び交い、仕留めようとするが中々当たらない。

当たったところで丈夫な皮膚を持つトープは、一撃二撃じゃ撃ち落せないのだが。

「あっちは城の方か。大丈夫なのか？」

「んー、どうかなー。どうせまた空腹になったら狩りを始めるだろうし、そのとき動けば良いんじゃない？ どうせもう魔法が届く距離じゃないし」

普段ならそれはそれで良い、と思うところだが。

今回は少々違う。

今度の定休日はリゲルの家を訪れる予定なのだ。

そんな美味しい機会を魔物討伐なんかで潰す事になってみる。

「うん、仕留めようか」

人の恋路を邪魔するやつは滅びると良いよ。

まだ邪魔されてないけどな。

銃剣を構える。

「Ⅱ」

魔力を込め、魔記号を呟き、想像する。

炎は生まれ、トープを貫く。

それは心臓を貫き、燃やし、地上に落とし。

「Ⅲ；Ⅲ；Ⅲ」

連射。

ただ魔力を込めれば使えるが、自分なりにコントロールした方が格段に性能が良い。

それに気付いたのは製作者であるジローではなく、使用者であるキイトだ。

これはジローが作ったものが特別だということではなく。

単純に使用者の魔力の込め方、量、操作でどうとでもなる。

どんな武器でも使い方次第。

炎はトープを貫き、その身を燃やす。

一匹、また一匹と落下していく様子を、その場にいた者はただ、見ている。

「……本当に便利な武器だね。ね、貸してー？」

興味津々なその騎士に武器を渡す。

キイトはその間に休憩だ。

木の根元に座り、おやつに持って来ていた店の売れ残りを取り出す。賞味期限切れというわけではないが、そろそろ引いておくかと思つた焼き菓子である。

騎士が刃を出したり銃を発射したりしているのを見学しつつ、まったく休憩。

やはりというか何と言うか、刃の長さだったり維持力だったり、銃の威力だったり……キイトとは比べ物にならない。

改めて自身の魔力量は多いのだなあと実感する。

キイトだけでなく他の4人も同じなのだが、この武器はキイトしか使用していないため、よくわからないのだ。

「すごいね、これ、かなり難しい……って何食べてるのー」

「柚子のパウンドケーキ」

「いやそーじゃなくて……美味しそーだね？」

「食う？」

パウンドケーキを差し出せば、高速で咀嚼し飲み込んだ。

「おいしい。甘い好きなの？」

「好きっつうか……俺ケーキ屋だから、店の売れ残り」

実際甘いものよりしょっぱいものの方が好きだ。

おやつかごはんかと言われれば迷いなくごはんを選ぶ。

「あ、そーか。臨時だっけ。……ふーん、ケーキ屋さんなんだ？」

雑談していると、森の中心から騎士達が戻って来た。

隊長に状況を聞かれ、簡単に答える。

驚かれたが、開発の特注武器だというと納得された。

その後、撃ち落としたトープの死体を確認し、走竜ランドラに乗って城へと戻る。

これで安心して定休日待つことが出来るな。

2-05 店休日

待ちに待った店休日。

緊急呼び出しは、ない。

足取り軽く、城へ向かう。

「あー、ケーキ屋さんだー」

「は？」

騎士だ。

緊急討伐で武器を貸した騎士が、小走りに寄って来た。

胄を手持っているので、顔がよくわかる。

ごく普通の茶色の髪は長く、後ろで一つに束ねられている。

この国の男は髪が長いことが多いようだ。

「何々？ 今日^{ランドラ}は臨時討伐？」

「違う。私用で走竜^{ランドラ}借りに来ただけ」

「えー」

何がえー、なのか。

「俺今から討伐なんだよね。おやつ期待したのにー」

「残念だったな。今日は何も持ってない」

リゲルの話だと山に自生する果物が豊富にあるというので、それを貰う予定なのだ。

店で取り扱っていないような珍しいものもあるらしいので楽しみにしている。

「ちえー。あ、そうだ、ケーキ屋さんのケーキ屋さんってどこにあるの？」

「裏通りの角の……」

城からの道を簡単に説明する。

城に住んでいる騎士なら、簡単な説明でもわかるだろう。

「あー、わかったー！」

「とりあえず、俺の名前キイトだから。ケーキ屋さんじゃないからケーキ屋さんって。」

臨時の騎士の中にケーキ屋がいる可能性は低いので紛らわしくはないだろうが。

「わかった、ケーキ屋さん！」

「いや話聞けよ」

「あ、集合だ。またね、ケーキ屋さん！」

「おいこら」

話聞かないというか敢えて無視しやがったよな。

しかもあいつ名乗ってないし。

まあいい。

気を取り直して走竜^{ランドラ}を借りに行こう。

戦闘用に訓練された優秀な走竜^{ランドラ}は1から50までの番号で、それらの貸し出しはさすがに出来ないが、その他の番号は借りることが出来る。

もちろん一般人は借りられないが、キイトは臨時といえど騎士である。

騎士や魔術師、城の関係者は大抵借りられるようだ。

竜舎に行くと、いつもの係りの騎士がいた。

何故かぎよつとしたように見られ、首を傾げる。

「走竜^{ランドラ}を私用で借りられるって聞いたんだけど、どうすれば良い？」

「あ、ああ……ここに名前を書いてくれ」

ボードに名前を記入すると、その横に番号を振られる。

「それ、走竜^{ランドラ}の番号？」

「そうだが」

「61番は空いてないのか？」

書かれていた番号は78番。

空いているなら出来れば61番、マサムネが良い。

「空いてることは空いてるが」

「じゃあ61番を貸してくれ」

騎士は61番と書き直し、番号札を取り出した。
札を言って、61番のところまで歩く。

キイトに気付き、マサムネが鳴く。

「おい、おはよ。今日はよろしくな」

撫でてやると嬉しそうに擦り寄って来る。

まだ3回目だというのによく懐いたな。

マサムネを連れて城門付近で待っていると、足早にリゲルが現われた。

いつもの魔術師らしい格好ではなく、膝丈のスカートにタイツとブーツを合わせている。

こうして見ると、元の世界とあまり変わらない服装だ。

リゲルが街を歩いていてもおかしくは……あるか。

銀色の髪は確実に目立つ。

「すまない、待たせたか？」

「いや、今来たところ」

ランドラ
走竜は元々二三人で乗れる。

マサムネを連れ、徒歩で城下町を出てからリゲルを後ろに乗せた。
二人乗り。

これが原付か自転車だと定番なんだけどな。

街道沿いに走る。

村一つ、町一つを通り過ぎた辺りで、街道から反れる。

しばらくすると隣国リダインとの国境近く。

ふもとに町が一つあるらしいが、山だらけだ。

その山の一つに、リゲルの家がある。

麓でマサムネから降り、そのまま徒歩で山を登り始める。

手綱を引かなくてもマサムネはちゃんとついて来るようだ。

賢いな。

登り始めてすぐにアカの実の群生があった。

「アカの実、多いな」

「この国のどこにでもあるからな。何故か他国ではあまり育たないようだが」

気候がほぼ同じである隣国でもあまり育たないという。

土壌が違うのか何なのか、詳しいことは解明されていない。

アカの実が実っているもの、実が緑のもの、花が咲いているもの。

同じ場所に生えているのに、成長具合もそれぞれ。

不思議な植物だ。

「アカの実は年中あるが、他の実は季節によって変わる。この時期だと……」

リゲルは辺りを見回し、一つの木を指差した。

「あの薄紅の実が美味いんだ」

数個もぎ取り、麻袋に詰める。

その木の根元にあった茸や蔓に出来た実も採った。

「このくらいで良いか。この三つは市場には出回らない、珍しい種類なんだ」

他にも黄色の実や紫の実があったが、たしかに店で見た覚えがある。そこから少し登ったところにリゲルの家はあった。

キャンプで使うようなログハウス。

石造りの家が多いので、木製の家は珍しい。

「狭い家だが」

促され、家の中に入る。

確かに広くはないが、一人暮らしなら十分すぎる。

一階建ての四部屋で、部屋自体はわりと狭い。

テーブルにさきほど取った果物を並べ、カットする。

香りや断面図を観察し、種は持って帰る。

エディの屋敷の庭にこっそり植えておこう。

リゲルの淹れてくれたお茶を飲みながら、果物を食べる。

薄紅の方は桃に近く、蔓の方は葡萄に近い。

似ているけどどこか違うが、環境の違いの変化なのか品種違うのか、よくわからない。

元々店で使う果物以外の知識は持っていなかった。

「ずっとここに住んでんの？」

「ああ、数百年ほど。生まれた時からこの辺りに住んでいるが、さすがにこの家ではない」

生まれた時から。

要するに700年以上この土地で。

「生まれた時、この辺りは村だった。男は鍛冶を、女は機織を」
懐かしむように目を細める。

「村が襲われて、英雄の丘まで逃げ込んでひっそりと暮らしていた。
アカの英雄に救われてから今の城や城下町を作ったんだ」

穏やかに笑うリゲルを見ていると、たまらない気持ちになる。
何でだろう。

「へえ。でもなんであの場所に？　ここにすれば良かったじゃん」

「ああ……地下の泉があるだろう？　あの泉の力を使うために、あの場所に城を建てたんだ」

白蛇の精霊の住処か。

精霊が住んでいるだけあって、やはり特別な力があるのだろう。

「そういえばさ、英雄の意志って結局何？」

「……英雄は、未来を望んだ」

「現在？」

視線をカップに落とし、リゲルが呟く。

「五人の異世界人を召喚した、未来を」

「やっぱり元々五人召喚したんだな。巻き込まれたんじゃない」

「ああ。大陸暦760年に、異世界から五人召喚するようと、英雄に頼まれた」

「予言じゃないのか」

「予言……ではない。英雄はその未来になるとは言わなかった。私は英雄に頼まれた英雄の望む未来になるように動いている」

「英雄の望む未来……」

「昼食にしようか」

リゲルは立ち上がり、準備を始めた。

先ほど採った茸でパスタを作ってくれるらしい。

しかし。

長期不在にする場合、やはり魔動石は不便だ。

事前に冷蔵庫を空にするか、魔動石の入れ替えを頼むか。

そうになるとやはり電気のような自動供給が望ましい。

ジローも何とか出来そうだと言っていたので、そのうち出来上がるだろう。

2106 恋愛

「ところでさ」

とてもとても気になっていたことがある。

過去を気にするなんて小さい男だと笑うがいいさ。

気になるものは気になるのである。

「アカの英雄って、イイ男だった？」

リゲルの一番近くにいて。

きっと一番信頼され、一番好意を持たれていた。

大体自分のピンチを救ってくれた男なんて、惚れるに決まってるだろう。

かなり真剣に聞いたつもりだったのだが。

リゲルは噴出した。

「くっ……くくく……あー……うん、素晴らしいひとだったよ」

何だよその微妙な言い回し。

「好きだった？」

「好きだったな」

その答えを聞いてむっとする。

一欠けらの躊躇もなく、好きだったと答えたりゲル。

「もっとも、恋愛の好きではなかったが」

「……本当に？」

「ああ。私は恋愛経験がない」

「は？」

恋愛経験がない？

ない？

ないって言った？

「不老不死になってからの私は、意図的にそういうことを避けていた。恋愛が出来そうだった年齢の頃は、生きること必死だったし

……そもそも同年代の異性はいなかったからな」

不思議そうな顔に見えたのか、リゲルが続けた。

「同年代の異性に限らず……戦闘能力の高い人間は、最初に襲われたときにほぼ死んでいる」

悪いことを聞いてしまっただろうか。

淡々と話すリゲルからは悲しいといった感情は見えてこない。

「私は女子供を避難させていたから助かったが……異性といえば一桁の年齢しかいなかったな」

小さく笑う。

「じゃあ俺と恋愛しよう」

正直なところ、話を反らしたかったのかもしれない。

「……私は、好きという感情がわからない」

リゲルの目を見つめる。

嘘を言っているようには見えない。

「好きというのは、どういうものだ？」

「人によって感じ方が違うと思うけど、俺の場合は」

手を伸ばす。

小さなテーブルだから向かい合っているリゲルに手が届く。

頬に触れた。

「全部欲しい」

全部。

「リゲルが」

こころも、からだも。

リゲルの顔が赤い。

恥ずかしいとか照れるとか、そういう感情はあるようだが。

「全部欲しい、という感じではない。私のキイトに対するこの感情が何なのか、よくわからない」

「俺に対する感情？　どんな？」

「言葉にするのが難しい」

リゲルの傍に寄り、抱きしめてみた。

「嫌？」

「嫌じゃ……ない。ただ、恥ずかしい」

恥ずかしいがるリゲルを一層抱きしめる。

「俺以外でも、嫌じゃない？」

「想像がつかない」

枯れている、というより意図的に封じている、というのが正しいのか。

良いことではないのだろうが、キイトにとっては好都合だ。

このまま誰もリゲルの視野に入らなければ良い。

抱きしめたまま、額に唇を寄せる。

頬に触れ、項に触れ、耳朵にキスして。

リゲルが小さく身動きする。

「くすぐったい？」

「くすぐったい……何かもぞもぞする」

「もぞもぞ？」

もう一度耳朵にキスし、様子を窺う。

「それ、何かもぞもぞする」

上目遣いって何か良い。

リゲルは耳が弱い？

それってもぞもぞつつうかぞわぞわって言わないか？

試しに耳朵を食んでみた。

ついでに舐めた。

「ッ……！」

リゲルがびくりと体を震わせた。

「どう？」

耳を押さえ、真っ赤な顔でキイトを見上げる。

「どうって……びっくりしたじゃないか。何をするんだ」

「何って……耳弱いっばかったから、実験？」

「実験……何か、わかったのか？」

「うん、リゲルは耳が弱い」

腰に手を回し、耳元で囁く。

「もっと、色々しても良い？」

しばらくして、リゲルが小さく頷いた。

そんなわけで。

リゲルの寝室にお邪魔して色々致したわけですが。

首と背中と内腿が弱いと判明しました。

手が早いとか軽いとかそんな罵倒は受け付けない。

遊びじゃないし、本気だし。

まあまだ付き合ってるわけではないが。

色々してたらもう夕方。

リゲルの選んだ珍しい魔術書を借りる。

主に天候の魔術、時の魔術、目的の転写の魔術が載っているようだ。

魔動石も入れ替えて、登りと同じく徒歩で山を降りる。

「あれ？」

入り口付近の植物が枯れている。

地面が黒く変色しており、空気が淀んでいる、そんな感じがする。

「呪いか」

「呪い？」

「ああ……そうだな、理性をなくし凶暴化する病気のようなものだ」
病気なのに呪い。

「簡単に言えば、凶暴化するというものなんだが。強い魔物が呪いにかかれば、かなり手強くなる」

普段襲ってこない魔物が突然凶暴化すれば、油断している分、危険度が増す。

「世界中にある呪いの発生地点がこの状態になった時、どこかで生物が呪われる。呪いは厄介だ。感染するまで呪いがどこにあるのかわからない」

呪いの発生地点で異常が発見された場合、城に報告が入るようになってる。

だがその呪いの現在地点まではわからないので、目撃情報を待つしかない。

今のところ人間に感染したケースはないようで、ひとまず安心だ。魔物に感染した場合討伐するという選択肢があるが、人間に感染してしまえば討伐という方法が取れない。

「大抵は精霊の巫女による呪いの浄化で解決出来るのだがな」

呪いの浄化の魔術は詠唱が必要だ。

これが長い。

詠唱を聞いたことはあるが、その長さと必要性のなさからキイトは一字も覚えていない。

覚えていたとしても才能がないキイトでは成功率なんて一割もないのだろうが。

「私がこの山に住むのは、この発生地点を監視するためでもある。一応、麓の町からも巡回があるのだがな」

この発生地点を消すことが出来れば、呪いもなくなり少し平和になるかもしれないが、消滅方法は見つからない。

「帰ったら報告しなくてはな……」

溜息混じりに呟く。

マサムネに乗り、城に戻る。

「次の店休日也会える？」

「……ああ」

「良かった。じゃあまた」

抱き寄せ、額にキスする。

城の前だが、辺りは薄暗い。

夜の広場なんか、元の世界じゃちよつと見ないくらいいいちやいちゃしている人たちが多いのだ。

こちらの世界ではわりと普通なのだろう。

午前中に店に行き、開店までにケーキを仕上げ、ショーケースに並べる。

仕上げが終わったら、仕込みだ。

今日はクッキー種を仕込む。

成型して冷凍し、必要な時に必要な分だけ焼成する。

あとはパウンドケーキとシートを焼こう。

タルト生地も仕込んでおいて、明日型に嵌めて……。

夕方はビストロに配達があるから……。

そこまで考えてイグレッツイオに呼ばれた。

「お客さんだよ」

「あ」

厨房から店側に出ると、騎士がいた。

「やほー、ケーキ屋さん」

「騎士だ」

「……どうして職種で呼び合ってるんですか？」

それはこっちが聞きたい。

つうか名前知らないし。

「おやつ買いに来たんだー。あ、コレだ！」

柚子のパウンドケーキを手に取り、嬉しそうに笑う。

そうか、あれを気に入ったのか。

「他のもおいしそー」

次々と籠に焼き菓子を入れていく。

「そんなに食うの？」

「うん、討伐っておなか減るよねー。おやつにするんだ」

にこにこと上機嫌に焼き菓子お買い上げ。

普通のケーキは持っていけないので買わないようだ。

「討伐の時のごはんって味気ないしさー。下手したら非常食のみだし」

討伐時に携帯する非常食は味のないカンパンみたいなやつだ。

それと定番の干し肉。

この干し肉がまた硬くて味がない。

普通噛めば噛むほど味が出るもんじゃないのか。

何の肉かは聞いていないが魔物の肉のようで、若干魔力が回復する感覚がある。

噛む回数が多いから確かに満腹中枢が刺激されるかもしれないが。

それはそれ、これはこれ。

味は重要。

量も重要。

腹が減っては戦も出来ぬ。

そんなわけで、前回の討伐では柚子パウンドをおやつに持っていたわけだが。

討伐地点の付近に町や村があれば美味しい食事を取れる可能性もあるのだが、毎回そういうわけにもいかず、非常食を食べる羽目になるのである。

「ところで、お前名前は？」

「そっか、名乗ってなかったねー。ノルマンド・デイスカだよ。ノルって呼んでー」

「ノルな。俺はキイトだから。ケーキ屋さんじゃないから」

「デイスカって……まさかデイスカ侯爵家の……」

「知ってるのー？」

「そりゃ知ってますよ！　こんな店に侯爵様が来られるなんてっ。高位の貴族様なんて初めて見たっていうかつ」

「お前の中に俺は貴族として認識されてないのか」

確かに血筋的にはまったく貴族ではないが、一応高位の貴族なんだけど。

別に自分の手柄でもないし威張りたいわけでもないが、カウントさ

「へー!?　ないけど……うーん……でもたまに聞くよ、そういう話」

「そういうもんか」

貞操観念なんて色々だしな。

「そもそも、この国は婚姻前にそういう関係になること、少ないよ」

「マジ?」

「マジマジ。私の前いた国は婚姻前からむしろ推奨、って感じだったけど」

リゲルはこの国にずっといるはずだ。

それなのに、応えてくれたということは、そういうこと?

ポジティブに考えすぎかもしれない。

が、超前向きに考えると結婚しても良いと思ってるレベルなんじゃないだろうか。

「キイトくん、顔がにやけてるよ?　リゲルさんと何かあったね?

お姉さんにいつてごらん?」

ターシャがにやにやとキイトを突いて来る。

ああ、やっぱり?

にやけてるだろうとは思ったが。

「まあ、進展はした」

次のデートでは確実にOK貰いたい。

押せば何とかかなりそうな気がする。

ビストロを出て、次に向かうのは城。

ジローとエディの職場である。

最近ジローは忙しいらしく、屋敷であまり会うことがない。

今回はジローに魔動具のテストをして欲しいと呼び出されているのだ。

「せんぱーい」

目の下に隈を作り、疲れた声で出迎えてくれた。

髪の毛もさもさ、服はよれよれ。

大変そうだ。

「ほい、差し入れ」

パンプキンパイだ。

デザートプレート用にパイ生地を仕込んでいたので、ついでに作ったのである。

「あざっす!!」

途端に元気になる。

菓子でそんなに元気になれるって凄いよな。

お茶を淹れ、話を聞く。

今回ジローが作ったのは単なる冷蔵庫とミキサーだ。

一から作ったものではなく、改造品。

改造部分は勿論、エネルギー供給部分。

要するに魔動石ではなく魔動力で稼働させよう、である。

「城から店までなら何とか届くと思うんですけど。一応中継も作ってるっす」

もし失敗していても、魔動石の補充場所が残っているので無駄にはならない。

魔動力式が普及すれば面倒が省けて良い。

魔動石を売って商売している人も、魔動力に変換するためにもどうせ魔動石も使うし職を失う心配はないだろう。

変換所でも人手がいるだろうし、職は増えるかもしれない。

そこまで普及するにはまだまだ時間が掛かるだろうが。

「あ、そうだ。滋郎、これなんだけど」

リゲルに借りた魔術書を渡す。

使えそうな魔術のところにキイトなりに考えた原案を挟んである。

「これは……」

「忙しいだろうに悪いな。一応魔動具の原案っていうか。手が空いた時で良いんだ、使えそうなのがあったら考えてみてくれ」

「いいっすね! これ!! あ、これもいい!!」

ジローは軽く興奮状態だ。

テンション高い。

あれか、疲れがピークに達しているのだろうか。

「くく……開発王に俺はなる……」

「……………お前普通に寝ろよ。俺が言うのもなんだけど」

「でもこれあるとイロイロ問題起きそうっすね」

「確かに。個人的にはすっげー欲しいけど。あと城だけ使うとかさ、一般には流通しなければ良いかなあとは思う」

「そうっすねー。魔動力が完成したらこっちにも着手したいっす。

あ、これもいい……」

ジローは魔術書と原案を熱心に見ている。

「あ。忘れるとこだった」

「何すか？」

「エディにもあとで話そうと思ってるんだけどさ……ちよつと紙を融通して欲しいというか」

むしろ紙の製造工場が欲しいというか印刷工場が欲しいっていうか。どちらにせよジロー待ちになるのだが。

「魔術書の最後の方の原案あるじゃん」

「はい」

「その裏」

表は転写の魔動具の原案だ。

「はい……え？」

「大規模だからな、時間がかかり掛かると思うけど」

「そうっすね。でも……うん。いけると思うっす」

裏は紙の利用案、プラス、工場計画である。

2108 ジローの休日?

冷蔵庫とミキサーが稼動した。

ジローの使う城の一室からケーキ屋までの距離は、魔動力の供給が可能ということだ。

距離がどれだけのぼせるか、一度にどれくらい供給が可能かなど、確認作業は山ほどある。

とりあえず第一段階終了ということで、ジローは今までの分を取り戻すかのように連休を取得した。

「って聞いてたんだけど、何でいるの？」

マコトにそう言われたジローは、厨房用の服を着て泡立て器とボウルを手ホイッパにしている。

「だって暇なんすもん」

キイトが屋敷を出た時は、まだ起きていなかった。

昼過ぎに起きたらしいが、娯楽が少ないので暇を潰せなかったようだ。

本を読むなり買い物するなり、色々あると思うのだが。

「マコ先輩は、何しに？」

マコトは侍女服を着ているため、今日は休みではないのだろう。

「何って……お遣いかな。春日ちゃんとオヤツにしようって」

「仕事は良いんすか？」

「仕事みたいなもんでしょ。ていうか侍女の仕事ほとんどないけどね。勉強ばっか」

マコトはぶつぶつと不平不満を吐き出したあと、あれこれ楽しそうにケーキを選び始めた。

「おい滋郎、クリームだれるぞ」

キイトはジローの手から泡立ホイッパて器とボウルを奪い、冷蔵庫に仕舞う。

「マコ、明後日から遠征だって？」

今朝突然リゲルが屋敷を訪ねてきたのである。

用件は次の店休み日である明後日、仕事になったので会えない、ということ断りと謝罪だった。

「うん、呪いがどうのこうのって」

呪いの感染した魔物が発見され、その浄化にミナミが選ばれた。一応護衛であるマコトは当然、リゲルや騎士も数人同行するらしい。せつかくのデートが潰れてしまい、キイトとしては面白くない。

「あー、くそ、よりによって明後日とか」

「もしかしてリゲルと約束してた？ 店、休みだもんね」

「まあな。気をつけろよ」

「大丈夫、大丈夫！」

マコトはキイトの言葉に笑顔で軽く返す。

確かに五人にとって魔物は、そんなに危険なものではない。

だがそれを見ていたジローは真剣な面持で忠告する。

「……油断大敵っすよ。何気ない行動ひとつで運命変わることであったあるんすから」

「……うん。気をつける、ありがと」

ジローの言葉に、はっとしたマコトは真剣に頷いた。

ジローの表情が、真剣だったから。

いつもの調子ではなかったから。

その言葉が何を意味するか、わかってしまったから。

キイトはその様子を見て、黙ったまま息を吐いた。

仕事を終え、キイトとジローはビストロに行くことにした。

ジローは最近籠りっぱなしだったので、久々の外食である。

屋敷に戻ったらエディと話し合いをする予定だ。

話し合いというよりは頼みごとと言った方が正しいか。

とにかく肉が食いたいというジローのリクエストで、注文は鶏肉の丸焼きとなった。

キイトは肉といえば牛肉だと思うのだがジローは違うらしい。鶏肉の腹に野菜や果物がたっぷりと詰められ、ソースもたっぷり。淡泊な肉に合うこってりとしたソースが旨い。

「そういえば遠征って、及川先輩も行くらしいっすよ」

鶏肉を夢中になって頬張りながら、その合間にジローが言う。もちろんメインは肉である。

「マジか。あー、春日が行くんだもんな」

「っす。健気っすね。上手くいけばいいんすけど」
こればかりはどうにも。

好かれれば好きになるなんて単純なものではない。

「及川なー。なんつうか春日の前では弱気っつうか」

「ヘタレっす。見てておもしろいけど」

元の世界ならともかく、こちらではミナミの傍には白蛇トリーカがいるわけ。
で。

近付くだけでもびくびくしているのがよくわかる。

蛇型の魔物が出たらどうするのだろうか。

「キイトくん、ジローくん、これ」

「ん？」

「私から、サービス！　なんて、試作品れんしゅうなのよ。感想聞かせて欲しいなって」

ターシャに差し出された皿は、デザートプレートだった。

もちろんケーキ屋から仕入れているものだ。

ただしキイトが提示した盛り付けではなく、アレンジされている。

「へえ……かわいいっすね」

女性らしい盛り付けだ。

キイトはタルトの横にクリームを添えていたが、ターシャは上にかわいらしく絞っている。

「つうか絞りが出来るならもっと難しい盛り付けにしても良いよな」

「ふふふ、最近ちょっとケーキいいなあって思ってた。ひそかに練習中。ケーキ屋さんのケーキってこうやってかわいく絞ってるよね」

「あーなら暇な時にでも店に来れば？」

「え、教えてくれるってこと？」

「うん、凝ったデコレーション出来た方がデザートプレートの幅も広がるし」

その上、盛り付けの指南をせずに済む。

そうすれば時間の節約にもなる。

ついでにケーキ屋も手伝ってくれば万々歳なのだが。

屋敷に戻るとエディはすでに夕食を終え、寛いでいるところだった。

「悪い、遅くなった」

「いえいえ、大丈夫ですよ」

テーブルにつき、マチルダにお茶を淹れてもらう。

「さて、それでは伺いましょうか」

リゲルに借りた魔術書と原案を書いた紙を取り出し、説明を始める。

「紙の普及ですか……」

「元の世界じゃ、紙はかなり利用されててさ」

紙製品のデザインをさらっと書いているのだが、実物を見たことのないエディには分かり難いかもしれない。

デザインを指差しながら言葉でも補足してどうにか説明する。

「なるほど。製作所にこれを注文したいというわけですね」

「それなんだけどさ、製作所を買い取る、って出来ないか？」

別に買い取りまでしなくても良いのだが、自由に指示出来た方が楽である。

ついでにそのまま人員も欲しいのだ。

ケーキ屋関連にも人が欲しいが、長時間は要らないため兼任にすればちょうど良い。

紙の製作所は城下町では二箇所。

もちろん需要があまりないので、どちらも人員も少なく、利益も少

ない。

所持者もあっさりと手放す可能性が高いのではないだろうか。

キイトが目をつけたのはその片方。

「城に近いこっちの方。土地が広いんだよな」

城と屋敷の中間にある製作所は、庭がかなり広い。

「魔動力の変換所とかにも使えそうじゃね？」

変換所がどこになるか、まだ決まっていらない。

一般に普及できるかも確定していないので当たり前なのだが。

「そうですね……しかしこの紙の製作所、損失ばかりじゃ話になりませんよ？」

「最初は赤字が続くかもしれないけど……そこはどうか頼む。もちろん何年掛かってでも返すし」

「金額にもよりますけどね。……これくらいならどうにかなるでしょう」

「助かる」

エディ様様である。

現在製作所の損益はほとんどといったところなので、そこまでひどい赤字にはならないと思うのだが。

それに店で使う紙製品を上乗せするということは、製作所云々というよりは店の方が問題だ。

店で紙製品を使うとその分単価もあがるわけで。

それで売り上げが落ちると赤字、落ちなければ黒字だ。

もちろんキイトは売り上げが上がると見ているからこそその買い取りである。

ただそっち方面は素人なので、確実とはいえない。

「持ち主は……ああ。買い取りの話はこちらで進めておきましょう」

「何だ、知り合い？」

「ええ。ちやうど手放す話が出ていたので」

タイミング良いな。

この話はここで終わり、あとは魔動力や魔動具の話に移った。

魔動力は普及の目途がたてば国レベルで浸透させたいらしい。

二人は戦争に関してノータッチだが、エディは一応中枢にいるので忙しいようだ。

戦争の準備は着々と進んでいるとのこと。

隣国が勝ってくれば戦争にならずにすむのだが。

2109 白の塔

「うがぁ！　もうやだああああ」

マコトは叫び、机に突っ伏した。

精霊の巫女は浄化の魔術や回復魔術に加え、詳しい国の歴史を勉強せねばならない。

マコトはミナミに付き合っただけ勉強するように強要されたのである。勉強嫌いなマコトはもちろん断ったのだが、ミナミを盾にされ致し方なく頷いた。

歴史は週に数回、リゲルが講師として訪れる。

「歴史なんて巫女と関係ないじゃんん」
低く唸る。

リゲルとミナミが苦笑いしているのが目に映った。

ミナミの肩に乗ったトーカがマコトを馬鹿にしているかのように舌を出している。

「蛇に馬鹿にされてる……」

歴史の勉強は巫女の義務だというが、実際活用されているかといえは……という感じがしない。

これを機に廃止にすれば良いよと訴えてみたが、却下された。

760年分の歴史を、かなり細かく勉強するのだ。

日本のことだってこんなに詳しくないってほど、エトランに詳しくなりつつある。

浄化も回復も使わないのに習わされ、もちろん侍女の礼儀作法とか騎士の訓練とか、中々多忙だ。

勉強メイン、仕事なし。

精霊の巫女の侍女は、巫女の補助をするらしいのだが、基本的にミ

ナミは何でも一人でしてしまおう。

元々一人でしていたことをいざ他人にやってもらえといわれても、確かに抵抗があるだろう。

「マコト、ミナミ。休憩にしようか」

リゲルがお茶を淹れてくれた。

熱いお茶は落ち着く。

「でもやっぱり納得いかないいい」

「そう言うな。学んだことはいつか必ず、マコトの力になる」

妙に力強いその言葉が、何故だか心に響いた。

休憩後、みっちりと歴史の勉強をし、マコトは再び机に突っ伏した。疲れた。

かなり疲れた。

一日がこれで終了なマコトと違い、ミナミは今からが大変なのだ。

マコトはぐっと伸びをして立ち上がった。

ミナミの巫女装束を用意するためだ。

巫女装束、といっても正月に見るような赤と白の和装ではない。

上半身はタイトな作り、下半身はふんわりとしたロングスカート。

色は全身真っ白で、ヴェールで顔を隠し、まるでウェディングドレスのようだ。

背中に小さなボタンがたくさんついているので、一人で着替えることが出来ない。

巫女には必ず侍女がついているので問題ないのだが、不便だと思う。

マコトはミナミの背中のボタンをとめながら、そんなことを考える。

「よし、オッケ。いこっか」

精霊の巫女の役目、それは人々を癒すこと。

白の塔の一階は聖堂となっており、怪我をした人々が訪れる。

そこで巫女は怪我人を癒すのだ。

病気には効かないので、訪れるのは怪我人だけ。

役目は他に不浄のもの、いわゆる呪いの感染が発見された場合、現

場を訪れ浄化すること。

元々が攻撃的な魔物の場合は浄化せず、そのまま討伐してしまうこともあるらしい。

浄化してもしなくても、討伐することにかわりがないからだ。

ミナミが聖堂で人々の相手をする間、マコトはその護衛につく。

侍女にしか見えないだろうが、れっきとした護衛である。

ごく稀に暴走して巫女を攫おうとしたり、病人が乗り込んできたりするそうだ。

特に大病を患った人は暴走しやすい。

効かないと理性ではわかっているけど、もしかすると、と希望を捨てきれないのだろう。

その気持ちはわからないでもない。

翌日の朝、歴史がないのにリゲルが白の塔を訪れた。
珍しい。

「ミナミに呪いの浄化をしてもらったことになった」

リゲルは淡々とミナミに告げる。

呪いは発生地点が決まっているらしく、呪いが発生するとその地点が変色するのだと浄化の勉強で教えてもらった。

最近その地点が変色していたので近々……という話は聞いていた。その話がミナミに来ると思っていなかったが。

「じゃあ私も同行するんだよね？」

「ああ。私と救世主も同行することになっている」

「みっちー……！」

笑いを必死で耐える。

さすがみっちー、やってくれる。

「私に……出来るでしょうか」

自信がなさそうにぼつりと呟く。

「大丈夫だ、難しい規模ではない。ミナミなら問題ないと思う」
呪いの浄化の練習はよくしている。

特に失敗なく出来ているのだが、実践は初めてだ。

不安に思っても仕方がない。

「今回の一番の目的は呪いを直接見ることだからな。その気配を感じてくれればそれで良い」

「それって今から？」

今日は訓練の日だ。

休むことを伝えなくてはならない。

世話になっている女性騎士は何故かマコトをとても気に入ってくれているようで、がっかりするだろう。

マコトの剣術とこちらの剣術はかなり違うので、面白いと思われているのかもしれない。

「明後日の早朝、出発する。呪いには監視をつけているから被害は大きくならない」

現役 of 巫女は白の塔にしかいないため、近場でない限りどうしても日数が掛かる。

そういう時は対象に監視をつけて被害が出ないようにするのだ。

被害が出そうになれば対象は処分される。

「特に必要なものはない。この部屋まで迎えに来るから用意して待っていてくれ」

となると、明後日は侍女服ではなく騎士服か。

侍女服は戦い難いからね。

久しぶりの実戦だ。

楽しみである。

2-10 精霊の巫女の役目

早朝。

マコトは騎士服を、ミナミは巫女装束をそれぞれ身につけ、迎えを待った。

騎士服は特殊な製造方法で布製なのに防御力が高いという代物である。

もっとも高いとは言えど金属製の鎧に比べれば低いのだが。

軽量化の魔術が掛かっているものが主流といえど、さすがにマコトも鎧を身に着けて動く体力も筋力ない。

それは他の4人も同じようで、誰も普通の鎧は使用していない。

リゲルが部屋を訪れ、竜車に移動する。

黒塗りの竜車は想像と違い、高級そうだ。

金色の装飾で縁取りされており、揺れを感じさせない仕様になっている。

四人乗りの竜車に乗り込む。

竜車を引く走竜^{ランドラ}は三匹。

番号は100、101、102と連なっている。

中に乗るのはマコトとミナミ、オマケにトーカで、リゲルは前、走^{ドラ}竜の手綱を持つ。

自動操縦、というか手綱を持たずとも目的地まで問題なく進むようだが、見張りも兼ねて前に座るようだ。

「みっちー、久しぶり！」

鎧を着用した騎士が一人と、ミッチーが黒い竜に乗ってやって来た。

鋭い爪を隠し持つ、爪竜^{ネドラ}という種類の黒い竜だ。

王宮騎士は主にこの爪竜^{ネドラ}に騎乗することが多い。

「みっちーって言うな！」

お決まりのやり取りにミナミが小さく笑った。

ウェディングドレスもどきのミナミに、ミッチーが見惚れ、マコトは笑いを堪える。

何て予想通り。

二人に報告しよう、とこっそり考える。

「さて出発するぞ」

それを合図に竜車が動き出す。

聞いていた通り、揺れがない。

こんなに安定しているのならば遠出も苦にならないと思う。

三時間程揺られ、湖の畔に到着した。

「リゲルさん、遅いー。疲れたよー」

間延びした話し方の騎士が竜車に近付く。

監視は警備か討伐のどちらかの騎士がするものらしく、今回の騎士は走竜ランドラに乗っているので、おそらく討伐隊の方だろう。

警備は跳竜ジャンドラに乗っていることが多い。

「悪いな。呪いは？」

「対岸。あーやっど帰れるー」

巫女一同が到着し、監視は終了らしい。

竜車を置いたまま、歩いて対岸へ渡る。

道が悪く、歩きづらい。

さすがにヴェールは邪魔なので、ミナミは後ろに捲っている。

ふらつくミナミををミッチーが支える。

しかしその度に目線がトーカに、若干ビクついているのがおもしろい。

渡った途端、ざわりと鳥肌がたつ。

ミナミの顔は青白く、気分が悪そうだ。

「リゲル、何なの……？」

「これが呪いの気配だ」

そういうリゲルも顔色がよくない。

ミッチーがまったく変化なしというのがむかつく。

「巫女として才能があればあるほど、呪いに敏感になる」
なるほど。

マコトもミナミほどではないが少しは才能があるということか。

青白い顔のまま、ミナミが膝をつき、手を組む。

巫女が長い詠唱を行う間、護りを固めるために騎士がいる。

呪いは詠唱を嫌うので、詠唱している巫女に気付くと攻撃してくるからだ。

今回はリゲルが結界を張り、全員を保護する。

結界は万能ではない。

結界の力よりも強い攻撃を受ければ、当然消滅する。

そうならないように危険な敵が現われた場合は、騎士やミッチーが対応するのだ。

黒く変色した小鹿が、勢いよく結界に突っ込む。

呪いが感染した生物は、黒く変色するのだ。

ミナミの細い声が呪文を紡ぐ。

この呪文が本当に長く、その間防御しなきゃならないので使い勝手が悪い。

精霊の巫女、というか才能がなければ九割は失敗に終わる。

ミナミは今のところ百発百中、リゲルだと七割くらい。

魔物の少ない場所なのか呪いに近づいて来ないだけなのか、小鹿以外の生物は見当たらない。

ミナミの初本番もあっさりと成功し、ミッチーの見せ場もなく。

呪いが消え倒れた小鹿。

リゲルはしゃがみこみ、そっと手を伸ばす。

回復魔術を掛けられた小鹿は元気に飛び上がり、仲間も元へと駆け行った。

「良かったね」

一安心だ。

ミナミの成功も、小鹿の無事も。

ふと、リゲルの項に、赤い痕を見つけてしまった。

知り合いや友達ของそういうものを見つけるといふのは、何と云うか
恥ずかしい。

あえてそれには突っ込まないが、相手はどうせキイトだろう。

「あ……」

ぽつりと、声が落ちた。

立ち上がったミナミが、リゲルの項を見ている。

あ、まずい、と思ったが、もう見てしまっているし、どうしようもない。

先ほどと違う原因でミナミの顔色が悪い。

「あちゃー……」

なんてこった。

マコトにとってはどちらも友人だ。

どっちも上手く言って欲しいけど、片方しか成り立たないわけで。
遅かれ早かれ、こうなることはわかっていた。

「戻りましょう」

その顔をヴェールに隠し、歩き始める。

だが声が震えている。

「春日さん」

ミッチーが素早くミナミの傍に立ち、手を取った。

「危ないから」

「……ありがとうございます」

ミッチーは気付いているのか、いないのか。

恋愛って難しい。

2-11 もうすぐ

さすがエディ。

仕事が早い。

紙の製作所の買い取りが成立した。

製作所と従業員が二名、キイトの指示で動かせるようになったのである。

さっそくケーキの箱のデザインを渡し、製作に取り掛かってもらう。キイトは店で午前中は仕上げを、午後から仕込み、閉店後は事務仕事である。

事務仕事は最近の売り上げのまとめや商品ごとの売り上げの数字を算出する予定なのだ。

当たり前のことなのだが、売れるものは数を増やしたりバリエーションを増やし、売れないものは販売中止にする。

「どうですか？ 最近お客さん多いし、順調な気がするんですけど」キイトの手元をイグレッツイオが覗き込む。

紙はわりと高価なものだが、キイトが書き込んでいるルーズリーフは貰い物。

マコトが召喚時に持っていたものである。

ケーキによって原価が違うため、何が何個売れたのでいくらの利益が出る、という計算を最初に行う。

そこから材料の仕入れ金額や魔動石代、給与などを引けば純利益が出る。

この純利益から税金が引かれていくわけだが、エトランの税金制度は穴が多い。

それは今まで日本で暮らしていたからそう思うのであって、こちらの世界ではそれが普通、なのだが。

「うん、利益は上がってるな」
順調だ。

ビストロに卸してる分も数が増えているし、店での売り上げも日々増加している。

利益を出したあとは商品ごとの売れ筋を確認。

「んー、やっぱりスティックパイの売り上げが他の倍くらいあるな」
「それと最近、騎士様がよくいらっしゃいます」

「ノル？」

「いえ、ディスカ様もよくいらっしゃいますけどね、違う方も多いんです」

王宮に住む騎士は、基本的に自分のことは自分でする。

というより想像以上に従者や侍女、下働きのような人が少ない。

貴族一人につき数人、侍女がつき、何やかんやと世話を焼くのかと思っていた。

が、それは王族や上位の貴族くらいで、上位貴族の中にも従者がいないということがある。

エディも従者はいない。

屋敷には使用人がいるが、しかもそれは三人のみ。

その三人だってやたら気安い関係で、中世ヨーロッパなイメージを持っていると裏切られることが多い。

貴族だって自分で買い物をするし、お茶を淹れるし、着替える。

さすがにドレスアップなどは一人ではしないようだが、箸より重いものは、などということはない。

「一度にたくさん買われるので売り上げが上がって嬉しいんですけど……」

イグレッツィオは言葉を濁す。

確かに売り上げが上がりれば嬉しいが、今まで見なかった客層が増えると不審である。

「ノルが言ってたみたいに、討伐のおやつなんじゃね？」

「そうなんですかねえ」

今度ノルマンドに会ったら聞いてみよう。
何か知っているかもしれない。

数日後、リゲルいつものビストロで待ち合わせた。

リゲルは昼が遅かったというので、軽くつまめるものを注文。

一口サイズのクラッカーのようなものに、チーズやトマト、ディップなどがのっているものが運ばれてきた。

あとはポテトフライと野菜スティック。

この二つは一緒についているソースとディップが旨いのだ。

「先日はすまなかった。そしてこれは土産」

どん、とテーブルに置かれたのはかご盛りの梨のようだ。

洋梨ではなく和梨である。

「ありがとう」

現場近くに梨があったのだろうか。

和梨は菓子に向かないので、冷やしてそのまま食べることにしよう。

「それでなんだが。また少し忙しくなるから……当分家に帰れそうにない」

淡々とした口調だが、上目遣いでキイトを窺うリゲルは正直かわいい。

だがしかし。

だがしかしだ。

ラブホもなければ屋敷に連れ込むのもどうかなこの状況で、唯一手出ししやすかったのが、リゲルの家である。

いやほら若いから。

「すまないな」

「いやいいよ。でも次帰るときは教えて欲しいかな」

「わかった」

キイトの下心に気付かないリゲルは、ごく普通に頷いた。

「魔術書は読んだか？」

「今半分くらいかな。時の魔術を覚えたいんだけど、リゲルは使える？」

「初歩の初歩くらいなら。今存命の魔術師で時の魔術を使える者はいない。本当に覚えたかったら自力でがんばるしかないぞ」
そんなに難易度が高いのか。

「初歩の初歩だけなら教えられるから、あとは自力でがんばってみ
てくれ。おそらく、大丈夫だと思う」

「難しい魔術なんじゃないの？」

「難しいな。ただ、異世界から召喚された五人なら、使える可能性
が高いと思う」

「へえ……」

リゲルがそういうなら、ちょっとやってみよう。

時の魔術はキイトが欲しいものを開発するために、絶対必要な魔術
だ。

五人のうち一人でも使えるようになれば開発が進む。

他の四人にも聞いてみて、希望者だけリゲルから教えてもらうこと
になりそうだ。

少なくともジローは習いたいと言うだろう。

浄化の話や店の話、たった数日しか経っていないが近況を聞く。

元の世界では気軽にメールや電話で連絡が取れたが、この世界は違
う。

通信系の魔術は発達していないし、手紙を送るくらいなら直接会っ
たほうが早い距離だ。

「そういえば魔動石のエネルギーはうまくいってるか？」

「ああ、今のところ順調。滋郎が連休の間も実験してた」

「せっかくの休みを……ジローは働きすぎじゃないか」

「働く方が楽しいんだってさ。食事と睡眠はきちんととってたよ」

ジローの休みは昨日までだったのだが、結局いつもより睡眠を多く
とるだけで休みらしいことはしていなかった。

しいていうなら絵を描いていたことくらいで、それも一応仕事に係する。

こちらにはない漫画の描き方を、イグレッツィオに教えていたのだ。キイトの計画は絵本作成や小説に挿絵をつけることであって、漫画作成ではないのだが。

ジローの説明をすぐにのみ込んだイグレッツィオは、漫画らしい絵を数点書いていた。

この調子なら計画は順調に進みそうだ。

「ああ、そうだ。次の店休日の朝、城に来て欲しい」

「城に？」

「英雄の丘に行ってもらうことになった」

「五人とも？」

「……五人ともだな」

以前聞いた精霊の武器か。

ちようど数が五で、確実に怪しいと思っていた。

「わかった」

“英雄の意志”ね。

2-1 qu 初恋

初恋は、近所のケーキ屋さんで、お手伝いをしていた同年くらいの男の子。

家族の誕生日やクリスマス、お客さんが来る時、いつもそのケーキ屋さんだった。

“パティスリー フジ”

わたしが生まれる少し前に出来たばかりの、新しいケーキ屋さん。

お母さんがそのケーキ屋さんが好きだったのだ。

小学校2、3年頃から、同年くらいの男の子を見かけるようになった。

お母さんが、ケーキ屋さんの三番目の息子さんでみなみより一つ年上なのよ、と教えてくれた。

一生懸命がんばってお手伝いをするかっこいい男の子。

わたしはケーキ屋さんに行くのがますます楽しみになった。

お店の前を通るときもついちらちらと見てしまう。

お母さんはそんなわたしを見て笑ってた。

4年生の誕生日に、ケーキを買いに行った時。

男の子にケーキを手渡された。

今までお店側の手伝いをしたことがなかった男の子。

不思議に思ったけど、嬉しくて。

その日の夜、その理由を知った。

“みなみちゃん　お誕生日　おめでとう”

定番のその文字は、今までと筆跡が違って。

あの男の子が書いたんだってわかった。

お母さんの話では、ずっと練習していて、最近書かせてもらえるようになったんだって。

たぶんそれがきっかけ。

クラスの友達に、みなみちゃんは誰が好きなの、と聞かれ思い浮かんだのはひとり。

遊んだこともない、話したこともない、男の子。

お父さんが一戸建てを購入したことで、引っ越すことになった。

中高一貫制の私立中学に入学すると同時に、お店から大分離れてしまい。

嫌だったけど、どうにもならないことだし、黙ってた。

それでも年に数回、お店にケーキを買いに連れて行ってもらって。

それだけで充分だった。

それだけで満足だった。

2年生になって、ケーキ屋さんがなくなったことを聞いた。

事故で亡くなったって。

優しいおじさんとちゃきちゃきしたおばさん。

作る人がいなくなってしまったケーキ屋さんは閉店。

一番上のお兄さんは成人してたから、兄弟だけで暮らしてるって。

お店がなかったら、もう会えない。

3年の夏、突然お母さんが言い出した。

好きな高校に行ってもいいのよ、と。

お母さんが勧めてきた高校は、色んな科のあるところ。

英語科なんていいんじゃない、と、確かにわたしは英語好きだけど。調理科にあの男の子もいるし、なんて。

せっかく受験して中高一貫制の私立に入ったのに、とか。

入ったからってあの男の子はわたしのこと覚えてないよ、とか。色んなこと考えたけど、わたしは。

行ってもいいの。

呟くとお母さんは笑った。

たまにはわがままくらい言いなさい、と。

違う場所でアルバイトをしてると聞いて、行ってみたり。もうとっくに男の子、っていう感じではなくなっていて。すぐドキドキした。

高校に入学して、よく見かけるようになって。

つい目で追ってしまったり。

アルバイト先がお兄さんのお店なこと。

高校に入って彼女がいないこと。

すぐ仲のいい後輩がいること。

今まで知らなかったことをたくさん知って嬉しくて。

それだけで満足してて。

……それを今、すごく後悔してる。

もし、話しかけてたら、何か違った？

もし、告白してたら、意識してもらえてた？

藤村先輩の、リゲルさんを見る目が。

すごく、嫌。

そんな目で、表情で、他の人を見ないで欲しかった。

わたしを、見てほしかった。

リゲルさんにつけられていた、赤い痕。
それをつけたのは、きつと藤村先輩だ。

泣いちゃだめ。

人のいないところじゃなきゃ。

帰るまで、我慢しなきゃ。

「……その、リゲルさんは……なんていうか、年齢がアレだから……」

「え？」

及川先輩はすごく真剣な表情で。

「か、春日さんは、かわいいし、その、がんばれば藤村も……」
どうやら慰めてくれているみたいで。

必死に言葉を探す及川先輩がかわいくて、つい笑ってしまった。

「ありがとうございます」

わたしは大丈夫。

ただ想うだけなら、きつと許されるから。

3-01 精霊の武器

ゆるやかな丘の上、巣穴。

店休日である今日、約束どおり英雄の丘に来ていた。

「この祠の奥に、精霊の武器を保管してある」

以前来た時から大分経っているのにアカの実は相変わらず。

そのまま実っていたのか、朽ちてまた実ったのかはわからないが、不思議な植物である。

「中には五つの部屋がある。それぞれの武器を取って来て貰いたい」

「危険はないのか？」

「危険はない。罠もないし、魔物もない。どの部屋が誰の、なんて考えなくて良い。好きな部屋に行ってくれ」

「わかった。じゃ、行こっか！」

マコトの先導で巣穴に入った。

危険がないのならばと気楽なもので、互いに近況を話しながら歩を進める。

中は薄暗かったので、ミッチーが魔法で光を灯す。

五つのその光はそれぞれの頭上でゆらゆら揺れて、ついてくる。

便利だ。

入り口から細い道を進み、すぐに拓けた場所に出た。

そこから分かれた五つの部屋。

「どこでもいいって言ってたよね。私ここでいいや」

マコトが真っ直ぐに進む。

左から二番目。

自然と隣にミナミ、その横にミッチー。

残りの両端にキイトとジローが進む。

部屋の中央に台座、そして短剣が刺さっている。

キイトはそれを手に取る。

頭に響く声が気持ち悪い。

若い男の声。

声が気持ち悪いというのではなく、頭に響くから気持ち悪いのだ。もしやこの声は、アカの英雄のものだろうか。

ともかく声の通り、指示に従う。

自分の血液を、武器に与える。

どうやらそれが持ち主認定のための方法らしい。

たったそれだけのことなのですぐに終わり、その短剣を抜く。

鞘ごと台座に刺さっていたので、何か特殊な加工でもされているのだろうか。

使わないので待機状態、すなわち体内に隠すことにする。

どうやらこの武器はそういうことも出来る、特殊なものらしい。

原理はわからないが、魔術が関係しているのだろう。

武器を手にしたのでここに用事はない。

先ほどの場所に戻ると、一番乗りだったらしく、誰もいない。

ミナミだけは血液に手間取りそうではあるが、他が遅いな。

感覚的に数分経ち、ようやくマコトが戻り、ジローが戻り。

ミナミ、ミッチーと戻ってきた。

「遅かったな」

「何か説明がやたら長かったっす」

「説明？」

「使用方法の説明が……」

使用方法の説明？

「取説？」

「いや、頭に響く声みたいなの……あれ、長くなかったっすか？」

「全然」

聞くと皆使用方法の説明があったらしい。

キイトの武器は説明など隠し方、出現方法だけしかなかったのだが。もしや持ち主認定されてない？

いやいや認定はされたようだった。

でなければ隠し方も説明されなかっただろうし。

「とりあえず出るか。リゲルに聞けばわかるだろ」

何のためにこの武器を回収したのか、それも聞かないと。

「皆武器は手にしたようだな」

リゲルが満足げに微笑む。

「んー、リゲル、それでこの武器って何なの？ そろそろ説明してくれてもいいんじゃない？」

マコトの言葉にリゲルが頷く。

「そうだな。皆、武器を出してくれ」

それぞれの手に武器が現われる。

それを見て一気にファンタジーだな、と思う。

「どの武器にもついている、透明な魔動石」

それぞれの武器を見てみると、確かに透明な石がついている。

キイトの短剣。

ミナミのロッド。

ジローのメイス。

マコトの剣。

ミッチーの剣。

キイトは自分の手元にある、短剣を見た。

何だろう、戦闘用っぽくない。

確かに戦闘するつもりはないが、明らかに自分の武器だけずれている感じがする。

他の皆はらしいのに。

「その魔動石は、召還用だ」

「……え？」

ぽかんと、リゲルを見返すマコトとミナミ。

ミッチーも目を瞠り、リゲルを見た。

ジローは無反応でメイスを観察している。

「つまり、この武器で元の世界に帰れる、と？　そういう訳っすか

？」

「そうだ。その武器を使い、馴染んでくれば力を発揮し帰ることができる」

使う。

短剣はリーチが短いし戦いにくいんだけどな。

「使うといっても、魔物を屠れば良い、ということではない。日頃から触れていれば、それだけで良い」

魔物討伐とか言われると、ミナミが中々持ち主になれそうにないから、それは助かるな。

「それぞれ個人にあった武器になっているだろう。説明があったかわかると思うが」

「あ。俺の武器の説明、なかったんだけど」

「……ああ。キイトの短剣は、説明が要らないからな。その武器には特殊な効果がないんだ」

「俺のだけ？」

「それだけだな。その……必要なかったというか、ジローの武器もあるし……」

確かに戦闘用はジローの武器があるし、特に必要はないが。

しかし使って馴染ませるって、用途がないのにどうやって。

まあすでに帰る気はあまりないから良いんだけどな。

兄貴達には悪いと思っているが、キイトは愛に生きる気満々である。連れて戻れるのならそれもありかと思うが、戸籍云々日本で暮らすのは厳しいだろう。

それならばキイトがこちらに永住した方が良い。

「この先救世主には、特に必要となる武器だ」

忘れがちだが、ミッチーは戦場に行く予定なのだ。

確かに武器は必要。

「精霊の加護のあるその剣は、他のどんな剣よりも強力だろう。使い方は聞いたな？」

「聞いた、けど……」

眉を顰め唸る。

使い方が難しいのか。

「ならば良い」

「それよりもそろそろ聞かせてほしいです。俺たちが召喚された理由」

「それは国を救^{エトラン}って欲しいと」

「それもあるかもしれないですけど、そろそろ本当のことが知りた

いっす」

リゲルは諦めたように、落ち着かせるように、息を吐いた。

「アカの英雄が現われ、この国を創った」

マコトとキイトは以前この場所で聞いた話だ。

「英雄がのこした、書がある」
書。

この話は聞いていない。

「その書には、この国があるべき姿、進むべき方向、いろんなことが書かれてある」

「それが……わたしたちをよんだ……」

「そうだ。それに救世主を召喚することで、この国が救われるだろう、と」

目を閉じ、続ける。

「英雄の知識のすべて、英雄の望む未来を、私は辿っているだけ」

英雄がいなくなってから七百年以上、その書を頼りに、国を創^{エトラン}り。

「書は、誰にも見せていない。見せられない。英雄と、約束、したから」

「戦争の、ことも?」

「書かれてあった。隣国^{アステ}には警戒を呼びかけたが、相手にされなかった。予兆もなかったからな、疑われて仕方がないが」

もし隣国^{アステ}が信じていれば、戦争はなくならないにしても、犠牲は少なかつたかもしれないのに。

「予言みたいなもん? これからのことも書かれてある?」

「そうだな。私は予言の書だと思っている。ただ、これからことは、あまり書かれていない」

戦争の細部が書かれていれば、策が練れていたかもしれないのだが。「私に対する指示はまだ続いているが、それも動機が見えないものだ。だが英雄は絶対だ。悪いようにはなるまい」

何だその信用度。

また少し英雄に対し苛立ちが募る。

もういない人間に対して。

いつからこんなに狭量になったんだ。

「どちらにせよ、そう細かいことまで書かれていない。結局は今生きている人間が、最善を尽くしていかなくてはならない」

「……みっちーは、戦場に行くの？」

「悪いが、行ってもらう。しかし、悪い結果にはならないはずだ」マコトがその言葉にほっと息を吐く。

「この戦争が終われば、元の世界に帰れるはずだ。あと少し、協力して欲しい」

「まあ悪い結果にならないなら、私はかまわないかな。その書が絶対ってわけじゃないなら、ちょっと簡単に考えすぎとは思うけど。だけど、帰るには協力しないと、っていうことに間違いはないんだし」

それはそうだ。

たとえば武器を使い馴染んでも、帰り方はわからない。

「脅すようで悪いが……戦争が終わらないと、召還は難しい。武器だけでは不十分だからな」

「この国にも愛着わいちゃってるし、もちろん協力するよ」

「乗리카かった船だしな」

「わたしも、出来ることなら……」

弱弱しいミナミの笑み。

意外な発言に、ついミナミに視線を移す。

それに気付いたミナミが慌てて顔を伏せた。

「で、肝心の五人召喚された理由は、なしっすか？」

「書に書かれているのは取るべき行動だけで、理由は書かれてない」

「五人に対して取るべき行動は書かれているが、それだけだ」

リゲルがちらりとキイトを見た。

「……個人の、感情に関するようなことは、書かれていない。その……誰かを好きになれだとか嫌いになれだとか、恋仲になる、だとか……」

ほんのりと頬が赤いように見える。

それは、ポジティブに受け取っても良いということか？

3-02 紙箱完成

紙の箱が出来上がった。

その箱のサイドにアカの花を描く。

底にはシリアル番号も入れる。

キイトとイグレッツィオが二人掛かりで取り掛かり、数時間。

主にアカの花に時間が掛かる。

やはり印刷技術が欲しいところだ。

さてこの箱をどうするのかというと、もちろんケーキをいれるのだ。日本のケーキ屋ならどこでも使っているような、紙の箱。

折り畳まれた薄い箱を、ケーキを入れるときに組み立てる、あの箱だ。

「これはどうするんですか？ 紙の箱は高いから採算が合わないって言ったのに」

「無料じゃなくて有料だからな」

「有料……、誰も買わないと思いますけど……」

もちろんそんなに高く売りつけたりはしない。

原価ぎりぎり程度で良いのだ。

「初回有料、次回から箱を持って来てくれればそれに入れる」

エコバッグならぬエコ箱だ。

浄化の魔術を使えば衛生的にも問題ない。

本当は木の箱でも良かったのだが、紙の方が絵が描きやすいことが一点、紙の製作所の仕事を増やすことに一点。

一応意味はあるのだ。

「俺か滋郎がいれば浄化も出来るしな」

アカの花の描かれた紙の箱は、目立つ。

歩く宣伝。

店によって色々な看板はかけられているが、ロゴの入った袋や箱の類はない。

そこそこ注目されるのでは、という狙いなのだ。

知名度大事。

ぶっちゃけ知名度が上がれば味がそこそこでも売り上げは上がる。

知名度を上げるには味も大事だが、販売方法の方が重要だと思う。

目立ったもの勝ちだ。

注目度が上がってきているこのタイミングでエコ箱の導入。

そして新商品の導入。

紙の箱が出来たことで紙コップもどきも製作してもらった。

こちらにはアイスやスムージーを入れようと考えている。

季節は秋でちょっと外れてしまったが、まずは売り上げよりも認知されること。

あとはパイに力を入れようと思っている。

あれから他店を回ってみたがパイはなかった。

パイの売り上げはあるのに他店が扱わない理由。

やはりパイのレシピが出回ってないと考えるのが妥当だろう。

いずれ出回るだろうが今のうちに売りまくり、この店発祥と謳うのも良い。

今のところはパイを買える店はここだけ、と売り出そう。

パイ生地を細めにカットし、振じる。

それに砂糖をまぶし焼き上げたものが主流商品だ。

あとはゴマやシナモンシュガーなど、味のバリエーションを揃え、セット商品も並べる。

他にもアップルパイやパンプキンパイをホールサイズで売っている。

もう一つ考えているパイ商品があるのだが、こちらはまだ試作段階である。

「はー……色々知ってますよねえ」

「まあ、……他国出身だし、この国にない情報を持ってるわけで…

「ちょっと反則っぽいけど」

あまり気持ちの良いものではないが、売り上げは必要だ。

稼げなくてもカネル家で援助してくれるだろうが、いつまでもその状態で良いわけじゃない。

将来的には、家族を養うこともあるわけだし。

たぶん、きっと。

閉店した後、ビストロに商品を搬入する。

今日のデザートプレートは薄く焼いたパイにクリームを挟み、フルーツで飾るというもの。

要するにミルフィーユだ。

「こんにちはー」

「あら、こんにちは。今日の分ね、ありがとう！」

おばさんがにこにこ笑顔で迎えてくれる。

最近はターシャばかりだったので珍しい。

きよろりと店内を見渡すと、奥の席にターシャと小さい男の子と、若い男がいた。

ターシャの膝の上で男の子が美味しそうにシチューを食べている。

それを慈愛に満ちた表情でみつめるターシャ。

若い男もにこにこその様子を眺めている。

もしかして子供と元ダンナか？

さすがに声は掛けられないし、見なかったことにして立ち去ろう。

しかしせっかくの気遣いもターシャによってぶち壊された。

「あ、キイトくん！ こっちこっち！」

何故呼ぶ。

渋々奥の席に近寄る。

「こんにちは、商品の搬入に来ました」

「うん、座って座って」

だから何故。

「この子、私の息子でタロよ」

「は？」

太郎？

ついもれた声は聞こえなかったようだ。

「ほらタロ、挨拶しなさい」

「……んわ」

声が小さすぎて聞き取れなかった。

先ほどもでは笑っていたのに、今は無表情だ。

緊張してるのか警戒してるのか。

「こんばんは」

「ごめんねえ、人見知りするのよ」

なら何故呼んだ。

「タロ、このお兄ちゃんがね、ママにお菓子の作り方を教えてくれるのよ」

なるほど。

それで呼ばれたわけか。

「あとこっち。タロの世話役のコマイ」

「コマイ・フルシャです。よろしく」

「キイト・カネルです」

手を差し出されたので握手を交わす。

金色の髪を一つに束ねた優男だ。

「えーっと、じゃあ俺はこれで」

「待って待って、ね、デザートプレート、二皿作ってくれない？」

ターシャはあまり息子から離れたくないのだろう。

他国から来ているのだとすればわからないでもない。

厨房の隅を借り、デザートプレートを仕上げる。

せっかくなのでチョコプレートで男の子の好きそうな絵を描こう。

しかし乗り物もなくアニメもない世界で男の好きそうな絵って何だ。

無難にドラゴンっぽいものを書いておこう。

本格的なものは描けないので、デフォルメしたドラゴンだ。

テーブルに運ぶとタロは目を輝かせ見上げてきた。

「ありがとう、おにいちゃん！」

興奮してるのか大きな声で、今度はきちんと耳に届いた。

警戒心も薄れたのか、キイトが座ってもにこにこしている。

美味しいそうにパイを口に運ぶ。

特別子供が好きとか嫌いとかいうことはないが、やはり笑っている方がかわいいと思う。

普通仕様はコマイが食べるようだ。

「タロはいつまでこっちに？」

「明日の夜には帰るわ」

「じゃあまた明日の午前中にちよつと寄るわ」

子供といえはやはりあれだ。

さっそく準備しなくては。

3-03 プロポーズ

夜に用意したお菓子を持って、ビストロを訪ねた。

店はまだ開店していないが、店の奥が住居となっている。

「おはよう、ターシャ。これ、土産」

「え？　ありがとう。タロ、良かったね」

「うん！　ありがとう、おにいちゃん！」

さっそくかごの中を漁り始める。

中にはパイやクッキー、パウンドケーキなどの焼き菓子が入っている。

その中で一番のメインが、

「わあ！　ぐるぐるだ！」

飴である。

やはり子供といえば棒つきキャンディ。

ぐるぐると巻いた大きな飴だ。

実際に子供が食べているところはあまり見たことがない、という商品自体あまりない。

が、やはり子供といえば、というイメージがあるため作りたかったのだ。

自分が末っ子で親戚もなく、小さな子供が身近にいなかったので変なイメージがあるのかもしれない。

喜ぶタロの頭を撫で、コマイに挨拶した後、城に向かった。

本日店休日。

城で走竜61番・マサムネを借り、リゲルの帰省に同行する。

山に登りながら、質問を投げかける。

「そういえばさ、精霊の武器の持ち主って何か意味あんの？」

「ああ……出し入れと特殊効果は持ち主でないと使えないんだ」

「俺のは特殊効果ないけどな」

「す、すまない」

「リゲルが謝ることじゃないと思うけど」

「いや……私も精霊の武器の製作に携わってるんだ」

「リゲルが？」

「私の生家は鍛冶をしていたからな。それに……精霊の力の付与が出来るのは私だけだ」

精霊の武器は精霊そのものが作ったわけではなく、精霊の血を浴びた人間が作ったものということか。

「リゲルは精霊扱い？」

「精霊、というより半精霊……下級の精霊というか……精霊の能力が一部与えられている」

精霊の能力。

キイトは精霊について詳しく聞いていないのでよくわからないが、おそらく不老不死がその精霊の能力なのだろう。

「精霊の能力って具体的に他に何があんの？」

「そうだな……血を浴びてから、魔力が一気に上がった。使える魔法も増えたし……当時魔術は発達してなかったからわからないが」

「へえ……リゲルと異世界人だ^{おれら}と比べてどうなの？」

キイトたちも魔力が高く、個人差はあるが使える魔法も多い。

「純粹に魔力だけなら同等だ。適性は個人差があるからな。私はさすがに全種は使えないし、そういう意味ではジローに勝てない。剣の技術で言えば……そうだな、おそらくミナミ以外には勝てないだろうし……」

何だか“魔女”があまりすごく感じないのだが。

「普通の刃物では私に傷一つつけることできやしない」
だからこそその不老不死。

「さて、ついたな」

その言葉にマサムネはひとりで歩き出した。

木陰を陣取りゆっくりと伏せ、気持ち良さそうに目を細める。

「私達も休憩しよう」

昼食はキイトが作った。

デザートまで平らげて、お茶を飲み、寝室に引き摺り込んで一時間。久々だったからちよつとがつついてしまった。

リゲルを腕の中に閉じ込めてまどろみ中。

細い銀色の髪を手で梳いてみたり、柔らかい部分を摘んでみたり、項にキスしてみたり。

リゲルは擦ったそうに身を振るが、嫌がる風ではない。

このまま夕方までいちゃいちゃしていたい。

「リゲル」

でもこれは言っておかないと。

「俺、この世界に残りたい」

「な……」

「この世界に残って、リゲルとずっと一緒にいたい」

「……キイト、ありがとう」

密着しているから表情は見えない。

「だが、キイトは元の世界に戻るべきだ」

「嫌だ」

「……キイトは普通の人間だ。ずっと一緒にいることは出来ないし、元の世界に家族だっているだろう」

確かにリゲルとは寿命が違う。

そもそもリゲルは不老不死なんだから寿命はない。

元の世界に、家族に未練がないかといわれれば、それはあるに決まっている。

だがしかし、このまま元の世界に戻っても、こちらの世界に未練が残る。

どっちもどっちだ。

遺伝なのか何なのか、キイトの家系は恋愛に関して情熱的というか一直線というか。

母親は父親と駆け落ちで結婚してるし、兄も長男なのに婿養子だし、

キイトが異世界で結婚しても決しておかしくない気がする。

「だから……元の世界に帰るまでで良いんだ。……そばに、いてくれ」

きゅんとした。

何かこうたまらない。

「リゲル」

「あ……」

耳朵を食む。

「俺は帰らない。寿命が違うなんて当たり前だろ。同時に死ぬなんて滅多にないんだから」

両親は事故死なので同時だが、基本夫婦同時、なんて普通の人間だつてありえない。

でもだからこそ、限られた時間を一緒にすごしたいと思う。

「リゲルが寂しいっていうのなら、俺の子いっぱい産んで。俺がダンナいなくても、家族がコドモいる」

野球チーム作れるくらい、産めば良い。

抱きしめる腕に力を込める。

「それでも寂しいっていうのなら……俺が死ぬ前に、リゲルを殺してやるよ」

喉元を噛む。

もちろん力を入れてない。

「俺の貰った短剣は、そのためのものなんだろう」

戦闘に向かない、精霊の武器。

だけど切れ味はよく、精霊に傷をつけることが出来る短剣。

ひとりだけ、特殊効果のない理由。

戦闘には使わないから。

「俺はそのために喚ばれた？」

リゲルではなく、英雄に。

紙の製作所の隣の土地に、魔動力の小さな工場が出来上がった。ここから城下町全体、発展すれば中継地点へと魔動力を飛ばす。まずはエディの屋敷とケーキ屋の二箇所。

ようやく二箇所の家電もどきの動力を改造し終えたので、本日稼働である。

動力が不足すると自動的に魔動石に切り替わる仕組みだ。停電(?)対策もばっちり。

朝、ジローからその報告を受けたキイトは、差し入れを持って城へ向かった。

「先輩っ！ これっ！」

満面の笑みで突き付けられたものは、一枚の紙だった。

そこには何故か猫耳と肉球のある女の子がカラーで描かれている。

……何て言えば良いかわからない。

「反応薄いっす！」

いや意味がわからないから。

「これ、転写の魔術なんすよ!？」

最初からそれを言えと。

よくよく見ると作業台にはまったく同じものがもう一枚。

「へえ、綺麗だな。色そのままだし」

印刷ではなく転写なので、解像度の問題もなく、綺麗なものだ。そのまま転写しているので、絵が反転したりということはない。

「ただ、すごい時間掛かるんすよ。慣れれば早くなるかもしれないっすけど」

時間が掛かるのは問題だ。

だが複雑なものならば時間が掛かっててもやる価値がある。

しかしアカの花の絵程度で時間が掛かってしまうなら、紙箱には取り入れられないかもしれない。

「まあその辺りは色々やってみるっす。それと、浄化の魔動具は出来上がりっすよ」

こっちも中々難易度が高そうだと思っていたのだが、そうでもなかったのだろうか。

浄化の魔動具は衛生面の浄化を専門に開発してもらった。

紙箱の浄化をエディにやってもらうためだ。

「汚れの浄化程度で大きさも小さめなんで、そんな難しくはなかったっす」

簡単に言っただけのけるジロー。

同僚らしき女性から睨まれてますが。

すごく視線を感じますが。

「なんすか。見ないで下さい、減るんで」

「減るわけないでしょ!!」

顔を真っ赤にして怒鳴る女性。

青味掛かった黒髪を肩で切り揃え、片眼鏡モノクルを着用している。

「くっ……! キイト・カネル! 私はクオル・ロアよ! 覚えて

おきなさい!!」

何で俺、とキイトが眉を顰める。

それを察したのかクオルが続ける。

「部外者の癖に妙に良い案持ってくるんじゃないわよっ!」

「僻みか」

「ぐっ! 僻んで何が悪い! 部外者と臨時の癖にっ! エディ、

何とか言いなさいよっ!」

「え、こっちに振るんですか。遠慮します」

何度かここには来ているが、あまり人に会ったことはなく、クオルとはおそらく初対面だと思うのだが。

おそらくジローに巻き込まれたんだな、と他人事のように考える。

しかし激しい人だ。

「あ、そうだ。差し入れ」

布を掛けたかごを差し出す。

布を取れば卵黄で焼き色をつけた一口サイズのパイが大量に顔を出す。

「あら美味しそう」

バターの良い香りがふんわりと鼻腔をくすぐり、食欲をそそる。

「パイの実っすか!？」

「だろ、パイの実っぽくしてみた。つうか商品名まんまパイの実にしようと思ってるくらいだし」

中身はチョコレートではなく、アカの実のジャムであるが。

アカの実を砂糖とはちみつでとろっとろに煮込み、パイの中に詰めた。

自画自賛だが良い出来だと思う。

「うまいっす! マコト先輩が喜びそうっすね」
確かに。

パイの実でお茶にすることにし、作業台からテーブルに移る。

お茶の準備をしていると、来客があった。

「リゲル! ちょうど良かった、一緒にお茶にしましょ」

キイトではなく、クオルがリゲルを誘った。

エディに書類を届けに来たようなのだが、クオルと親しいのだろうか。

「いいか？」

「もちろん」

パイの実がキイトの差し入れだとわかったのだろう。

キイトに伺いをたて、テーブルについた。

先日、返事を出来ないでいるリゲルに、キイトは笑った。
笑って、嘘だって、と抱きしめた。

その後もわざと明るく話を変え、うやむやに。

キイトの召喚にどういった意図があらうと、自分の思うがままに行動する。

リゲルが死にたいといっても、帰って欲しいといっても、好かれて
いる限りはリゲルの傍を離れる気はない。

元々生き物はいつなにあるかわからない。

一年後、半年後、明日にだって自分が死んでしまうかもしれないの
なら、出来るだけ後悔しない道を選ぶ。

「このパイの実を名物扱いにしようかなって思ってたさ」

「名物？」

「なんつうのかな、看板商品？　ここに来たらこれ！　っていうさ」
温泉饅頭や〇〇に行ってきたと書かれた土産物のようなイメー
ジだ。

このケーキ屋に寄ったらこれ、というのはもちろん、城下町に来た
らこれがお土産！　というところまで持って行きたい。

やはりパッケージに地名をいれるべきか？

“城下町名物・パイの実”とか。

まずは店で売りを上げていこう。

「リゲルさんとクオルさんは仲が良いみたいっすね」

隣に座り、パイの実やお茶についてあれこれと話している二人に、
ジローが声を掛けた。

「そうだな。クオルがまだ幼い頃、私に向かってババアと……」

「あああああっ！　やめてよっそういうこというのっ！」

「本当のことじゃないか」

ババアと言われて仲が良くなるのか？

不思議そうにしていたことに気付いたのか、リゲルが笑った。

「影では言われても、面と向かって言われたのは初めてだった。あ
れだけ笑ったのは久しぶりだったな」

ババアと言われ大笑いし、暴言を吐いたクオルの両親が必死で土下
座。

何てシュールな光景。

「私は元々ロア家の……クオルの叔母と仲が良くてな。よく屋敷を訪ねていたんだ」

エディと一緒にいることが多いので、カネル家と仲が良いのかと思っ

ていたが。
権力のありそうな立場である魔女が特定の公爵家と仲が良いなんて、確執が生まれたりしないのだろうか。

が、この国で貴族や国民の反乱のような事件は、一回もないのだという。

魔女は王族や貴族という権力者ではなく、精霊のような不可侵な存在だと思われているようだ。

七百年以上国を支え発展させてきたのに、あまり表舞台に立つことなく、裏方に回ることであまり敵を作っていないのかもしれない。

「最近は留守にしているから会ってないのだがな」

「叔母さん自由人だから」

何でも世界中を飛び回っているそうだ。

文字通り、飛び回っている、だ。

珍しい野生の飛竜を飼いならした豪傑で、ウナカーサ大陸だけでなく、他の大陸や島々も見回っている。

アステ東隣国と海を挟んだ隣国メンティとの戦争にいち早く気付いたのもその叔母さんらしい。

もっともこの戦争の開始時期は、大体のところわかっていたので警戒していたおかげでもある。

「今はメンティの偵察に行ってるんじゃないかな。そろそろ決着がつきそうだし」

「戦争が終わるってことか？」

「おそらくアステが降参するだろうと。その後メンティがどう出るかはわからないが、おそらく……」

リゲルの表情で、戦争になるだろうとわかる。

「その辺り対策とか練ってるんすか？」

「東の国境沿いはすでに避難している。騎士が駐在しているから、

何かあればすぐ知らせが来る」

「こっちから攻めたりしないんすか？」

「侵略の動機もはっきりしないから何ともな。単なる領地拡大ならば遠慮なく叩き潰すのだが」

物騒なことをさらりと言ったのける。

「まあ、調査を進めるしかない。何か発展があればすぐに知らせる」
その後話題は魔動具やケーキのことに移り変わり、日が暮れるまでお茶の時間は続いた。

魔動力式の家電の使用開始。

紙箱の使用開始。

浄化機の使用開始。

パイの実際の販売開始。

売り上げも増加し、色々忙しくなってきたので、従業員も増やした。紙の製作所と魔動力工場の兼任に三人、ケーキ屋の販売に二人。販売の二人が仕事を覚えたら、イグレッツィオが完全に製造へ回る予定だ。

製造で従業員を入れないのは、パイのレシピの流出を防ぐためである。

今はまだ秘匿しておきたい。

「さてと……今日は冷菓にするか」

「冷菓？」

「ムースとかババロアとかゼリーとか……あんまりこっちじゃ見ないけどな」

ゼラチンの類は一応存在するが、あまり流行ってないようだ。

そもそも容器に入れて販売するケーキが見られないので当然ともいえる。

気候が涼しくクリームやバターの重いものが好まれているせいもあるだろう。

「そうですね、大通りの店で一度見かけたくらいで」

「容器がないと売り難いんだよな」

安価な透明な容器がないので、容器ごと販売するケーキは売り難い。

ガラスの牛乳瓶風容器に入ったプリンなんてかわいいと思うのだが、それだってケーキと同じくらいかそれ以上の価格である。

こちらは再利用するにしても高すぎるし、戻ってきてから仕込むわけなので数も多くいるし遣りづらいのだ。

「つうわけで、今回はビストロ用な」

ビストロで出す分には、容器は関係ない。

毎日使うわけじゃないので後日返却してもらえば良いだけだ。

まずカップの底に練り抜いたスポンジシート。

それにアカの実で風味をつけたシロップをうつ。

その上にバニラビーンズをたっぷり入れたムース、その上にアカの実のムース。

そのまた上にアカの実のゼリーを重ねる。

あとは少しクリームを絞り、アカの実などのフルーツ、ミントの葉を飾れば完成だ。

イグレッツツイオに作り方を説明しながら30個ほど作成。

冷菓のレシピはないので、量や味などは調整しながら作らなければならぬ。

今日はちよつと多すぎたので次回はもう少し分量を減らそう。

「グレッツツが一人で製造出来るようにしとかなないと、最近討伐が多いんだよなあ」

「そうですね。不穏な空気というか」

緊急はまだ一度しかないが、討伐が増えているのだ。

期間中一度も討伐しない臨時もいるというのに、あまりにも多い。

疑問に思い訊ねたところ、どうやら魔物が活性化しているという。

戦争が近いということもあり、何か不吉な予感がするというか。

「生地はかなり多めにストックしてるけどさ……」

キイトならば一人で回せる仕事量でも、やはりグレッツツだとキツイ。経験値が違うので当たり前なのだが。

とにかくキイト不在でも店が回るように、ストックを増やすなり商品展開の工夫をするなり試行錯誤。

イグレッツィオにはまず仕上げを重点的に教えている。

「ま、とにかく、明日も討伐だしな。一応滋郎が来てくれることはなってるけど、出来るだけグレッツががんばれよ」

「はい！」

ジローは一応朝から店に来る。

グレッツが一人で仕上げと製造をしてみても、間に合わなかったりわからなかったりしたらジローに頼る。

なのでジローも製造ではなく、開発をするために色々道具を持ち込むことになっている。

何度か討伐もこなし、顔見知りの騎士にも慣れて来た。

そのうちの一人は店の常連でもあるノルマンド・デイスカだ。

「最近魔物多いねー」

「多いな。原因てわかってんの？」

「うーん、西っていうか南っていうか……流れてきてるみたいなんだよねー」

「リダインも通ってるけど、大元はそこじゃないんだよね。リダインも最近魔物が多いってばやいてるし」
もっと先から流れてきてるってことか。

「ま、その分ケーキ屋さんがおやつ持ってきてくれるしー」

「……………」

そこを期待されても。

いや持って来てますけども。

毎回借りるので、当番の騎士は何も言わずマサムネを回してくるようになり、現在マサムネの上である。

他の騎士たちは1から50までの走竜ランドラに乗っている。

戦闘用という話だが、キイトにはその違いがわからない。

「61番はねー、乗り手を選ぶからー」

「乗り手を選ぶ……ああ、気性が激しいもんな」

そういえば最初威嚇されたんだっけ、と思い出す。

穏やかな生物であるはずなのでそれは珍しいことなのだろう。

「うん。乗り手っていうか……他の走竜^{ランドラ}ともあんまり馴染んでないし、元々野生だから仕方ないんだけど」

「ふーん？」

「討伐に正直戦闘用は必要ないんだけど、軽い運動っていうか準備体操も兼ねてねー」

散歩代わりってことか？

たしかに竜舎にずっと繋いでおくと運動不足になりそうだが。

「あ、見えてきたー」

魔物の群れだ。

四足歩行型の茶色の大きな獣。

でかい野犬といった感じである。

素早さ注意、それと数匹で集中攻撃で来ること、肉食なことで警戒されている魔物だ。

大人数での討伐はかえって難しいことで、少数精鋭、キイトを含め十人もいない。

「さって、行くよー！」

ノルマンドの掛け声で、走竜^{ランドラ}が一斉に走り出す。
が、マサムネは違った。

「あー……うん」

スピードは一切上げず、変わらぬ歩調。

戦闘用に回されないわけだ。

いや訓練されれば命令を聞くのかもしれないが。

「マサムネ、行こうぜ」

キイトの声に反応し、走り出す。

ノルマンドじゃだめなのか。

討伐隊の隊長ではないのだが、それなりの地位にいるらしいので指示を出すことは多い。

特に今回の討伐ではリーダー役を務めている。

キイトは他のメンバーより少し遅れ、討伐に参加した。

短剣を使いたかったが、さすがにマサムネの上からだ無理がある。ジロー印の武器で野犬もどきを撃ち抜いていく。

銃を撃つ時の反動がほとんどないのでかなり使いやすい。

マサムネも向かってきた野犬もどきを噛み殺したり、爪で切り裂いたりと善戦している。

さすが竜種。

すべて討伐を追え、皮を剥ぎ取り、身はその場で燃やす。

皮は加工され、衣服などになるらしい。

肉は臭みが強くかたすぎるので、食用には向かない。

「さーおやつだー！」

いや言うと思ったけど。

ノルマンドがリーダーって違和感があるわ。

3-06 終結

秋の終わり、東隣国^{アステ}が降伏し、戦争は終わった。

メンティはアステに移住を始めているらしい。

侵略のはっきりした動機はわからないままだが、移住を始めるということは領地拡大が目的だったのだろうか。

今のところエトランへ侵略してくる気配はないが、油断は出来ない。メンティも戦争で負傷しているだろうし、その回復とエトランが油断した時期が一番危ないだろう。

戦争が終わる前の一月で、色々と変化があった。

若干スパルタでイグレッツィオを鍛えてみた結果、一人でも仕上げが出来るようになった。

最近ますます討伐が増えているので、それだけで大助かりだ。

販売の従業員も大分慣れて来たようだし、浄化機も順調に稼働中。

他の魔動方式も問題ないので、次は城を切り替えていくようだ。

最終的にはエトラン全体が魔動方式になる予定である。

新たな魔動具もどんどん開発されており、ジローが過労死するので、と心配になるほどだ。

印刷機は製作所に設置し、稼働中。

用途は主に書籍の印刷。

つまり、レシピ本である。

写真の技術は魔術では応用出来そうになかったので、イグレッツィオにイラストをつけてもらった。

レシピの内容はもちろんケーキ。

パイ菓子を数点とゼラチンを使ったものがメインである。

自費出版だし世界は違うが、レシピ本を出すことは密かな夢だったのでちょっと嬉しい。

パイ菓子の売り上げで店は軌道に乗ったし、そろそろレシピを流出しようと考えたのだ。

ちなみにレシピ本はかなりの高値をつける予定である。

断じてぼったくりではない。

次は時の魔術を覚えて冷蔵庫の進化系を作るため、キイトとジローで研究中だ。

時の魔術は現在リゲルとほんの数名が少し使える程度。

魔術書には詳細に書かれてある時の魔術だが、真偽は怪しい。

一応リゲルは高度な時の魔術を見たことがあるらしいが、その一人以外、使える人間は現われていないという。

戦争終結の知らせから数日後、クオルの叔母であるクウガが帰って来た。

クオルによく似た顔立ちの女性で、思ったより若い。

二十歳過ぎの姪がいるのだから四十くらいかと思っていたのだが、三十前後に見える。

「はじめまして、クウガ・ロアだよ。よろしくね」

挨拶を交わし、テーブルにつく。

クウガが帰って来たことで、なぜカリゲルから呼び出されたのだ。

「クウガ、頼む」

リゲルの言葉に頷き、報告を始めた。

「メンティの上空を隈なく飛んで見たんだけど、呪を発見した。おそらく精霊だ」

「え？」

「メンティは崩壊の危機みたいだね！ はっはっは」

はっはっは、じゃないだろう。

リゲルも苦笑いだ。

「そういうことだ。呪にかかった精霊が暴れているせいで、国から

逃げるしかなかったんじゃないかというのが国の見解だ」

「何で？ メンティは呪の浄化が出来ないわけ？」

出来ない国、というか巫女が存在しない国はいると聞いていたが。

「普通の魔物なら出来と思う。精霊はちよつと特殊で……かなり難しい」

「加えて精霊に攻撃は効かないからな。逃げるしかなかったんだろうよ」

リゲルが溜息を吐く。

腕を組み、頷くクウガ。

「ちよつ……もしかしてそれでアステに逃げるために戦争になったんすか？」

「おそらく。陸続きじゃすぐに追いつかれると思ったんじゃないか」

「え、えー……そんな理由で……っていうかエトランから巫女派遣とか出来ないんすか？」

「事情を話してくれば出来たがな」

いまさら、である。

「助けを求めることが恥とでも思っているのか、エトランでも無理だと思っているのか……メンティのお国柄はよくわからん」

船があまり発達していないので、エトランからメンティへ行くとなると陸続きになり、エトランからみると大陸で一番遠い国なのだ。

そもそも隣国でさえ交流の少ないエトランである。

そんな遠地と交流があるはずもなく、そんな相手に頼みごともし出来ないと思っただのかもしれない。

実際は、精霊の巫女の派遣に関してわりとどの国も遠慮なく、エトランに持ちかけてくるのだが。

エトランも交流がない国でも派遣は積極的に行っている。

「まあ、それは置いといて……浄化はしないと被害は広がっていく一方だからね、浄化には行こうな」

「は？」

「……ミナミに行ってもらう。もともと精霊の呪は難しい。ミナミ

に出来なければ他の誰にも出来ないだろう」

「春日は了承したのか？」

「ああ。優しい子だからな……」

確かに、断れる性格ではないが。

「それで、キイト、ジロー、君たちにも同行してもらいたい」

「は？」

「メンティの侵略を防ぐために、騎士はすべて出向する。単純に人手不足なのでミナミの護衛を頼みたい」

「いや、まあいいけどさ……」

「詳しくは道中話すが……とりあえず私も行くから竜車には四人だな。クウガは飛竜だし」

「竜車でってだいぶ掛かるんじゃないのか？」

「結構かかるな。しかし飛竜は訓練しないと乗れないから、どうしても竜車が最短なんだ」

それは残念だ。

「長期間あけることになるからな、手配を頼む」

店を休むか、イグレッツィオに任せるか、だな。

「わかった」

「準備があるから出発は三日後だ。……それと、キイトにちょっと頼みがある」

3-1 qu 英雄の書

英雄の書を開く。

時の魔術がかかっており、劣化はしない。

760年、少しずつこの書を読みすすめて来た。

一気に読まずにいたのは、英雄との約束だったからだ。

英雄の知識が詰められた書。

英雄の望む未来が書かれた書。

その年に起こる大きな出来事や、その年に私がやるべきことが書かれており、私は書を読みそれを目標に行動する。

出来ない、と思っても諦めなかった。

少しくらい寝なくても、食べなくても、疲労はあっても死は訪れない。

書に忠実な未来を紡ぐ。

私は英雄に少しでも近付けただろうか。

英雄の望んだ未来に辿りつけただろうか。

大陸歴760年、現在。

書は761年の救世主たちの帰還で終わる。

未来以外の知識も、読んでいないものはない。

書にある魔術の三分の一は難しく、特に時の魔術などはほんの少ししか使えないが。

ただ私の役目は時の魔術を覚えることではなく、書に残すことなので問題ない。

すでに大抵の部分を書にして一般に流出してある。

“ 761年 救世主たちの帰還”

その文字を指で辿る。

帰ってしまおう。

どれだけ別れを繰り返しても、やはり別れとは寂しいものだ。
親しくなってしまうえば、なおさら。

脳裏に浮かぶのは二人の姿。

今回の件が無事に終われば、私はまたひとりになる。

だけど……少しくらい、夢を見てもいいだろうか。

キイトが帰るまでで良い、“恋人”の隣にいてみたい。

もうすぐ私の役目も終わる。

英雄の望む未来がなければ、私のとるべき行動もない。

ただ最後にある英雄からの手紙、これだけは読みたい。

頁の端を閉じられたその部分は、もう少し未来の私宛だ。

「リゲルー!!!」

明るく大きな声にはっとして、顔を上げる。

書を片付け、外に出た。

「帰ったのか、クウガ」

「ふふ、見つけたよ、原因!」

「原因?」

「そう! 精霊種のね、呪を見つけたよ」

ああ、また。

「そんな顔しないでよ。今度は大丈夫でしょ?」

「ああ……」

どんな顔をしていたかわからない。

だが今はミナミがいる。

「作戦開始でしょ。集合かけるなら私も付いていく!」

「別にかまわないが、なぜ？」

「ふふふ、噂のキイトくん見たいじゃん！」

「……そうか」

別に好きで話したわけではない。

なぜかバレただけだ。

断じて惚気たわけではない。

本当だ。

「ロアに渡さずカネルに入りたいだなんてさ。ロアだったらリゲルと身内になれたのになあ」

なぜ結婚前提で話す。

「キイトはどうみてもロアの当主と相性が悪い」

ロアの当主はクオルの歳の離れた兄。

クオルとクウガが異端なだけで、ロアの気質はキイトには合わないだろう。

「確かにね、ロアと相性がいい人なんて早々いないでしょ」

「とにかく……明日、だな。エディの屋敷を訪ねよう」

「了解！」

「今日は城で会議だな。行こう」

救世主たちを無事、元の世界にかえすために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3375t/>

ノグ・コンフェクショナリー

2011年11月19日08時22分発行